本庄市埋蔵文化財調査報告書　第10集

宮内上ノ原遺跡Ⅲ
―Ｅ地点の調査―

社会福祉法人武蔵野福祉会
特別養護老人ホーム等建設に伴う
埋蔵文化財調査報告書

２００８

本庄市教育委員会

序

本庄市はかつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一誕生の地として広く知られているところです。そうした豊かな歴史的背景と文化的風土をもつ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書に報告する宮内上ノ原遺跡は、これまでにも４次にわたる調査がおこなわれ、縄文時代の集落が丘陵上に広く展開していることが判明しておりましたが、今回の調査においても縄文時代前期の住居跡が新たに発見されました。また、完全な形をとどめた石棒や浅鉢など、特筆すべき遺物も数多く出土し、充実した成果を得ることができました。

今日に残された貴重な文化遺産をこののちも長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、埋もれていた歴史を明らかにすることは、よりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財保護の普及・啓発として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、宮内上ノ原遺跡の記録保存に格別のご理解を賜り、現地調査から資料整理、本書の刊行に至るまで多大なご協力をいただきました社会福祉法人武蔵野福祉会には、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、事業の全般にわたってご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた地元各位、直接発掘調査の労にあたられた皆様に心よりの御礼を申し上げます。

平成 20 年 3 月

本庄市教育委員会
教育長　茂　木　孝　彦

例　　言

1．本書は埼玉県本庄市児玉町宮内字上の原1,250番地1外5筆に所在する宮内上ノ原遺跡（№54－105）のＥ地点の発掘調査報告書である。

2．調査は社会福祉法人武蔵野福祉会が計画する特別養護老人ホームならびに老人短期入所施設建設にともない、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査、整理調査および報告書作成に要した経費は、社会福祉法人武蔵野福祉会からの委託金であり、平成19年度遺跡発掘調査受託事業として実施した。

4．発掘調査面積は本庄市宮内上ノ原遺跡のうち723.7㎡を対象とした。

5．発掘調査期間は以下のとおりである。

　第１次調査　　自　平成19年6月21日　　至　平成19年7月　9日

　第２次調査　　自　平成19年8月　6日　　至　平成19年9月19日

6．発掘調査担当は本庄市教育委員会文化財保護課太田博之・的野善行があたり、有限会社毛野考古学研究所宮田忠洋が現地調査員として専従した。

7．発掘調査に関する発掘基準点測量、遺構等の測量は有限会社共同測地開発に委託して実施した。

8．整理調査期間は以下のとおりである。

　自　平成19年10月26日　　至　平成20年　3月14日

9．整理調査および報告書刊行にかかる業務は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。

10．本書の執筆は、Ⅰを本庄市教育委員会文化財保護課が、Ⅱ～Ⅴを宮田が担当した。

11．本書の編集は、本庄市教育委員会文化財保護課の指導に基づき、宮田が担当した。

12．本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関連する資料は本庄市教育委員会において保管している。

13．発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

坂本和俊　田村　誠　金子彰男　丸山　修　外尾常人　中沢良一　関根慎二　谷藤保彦
増田　修　山口逸弘　山崎芳春

14．宮内上ノ原遺跡の発掘調査、整理調査および報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・平成19年度　発掘調査、整理調査、報告書刊行

教　育　長　　茂木孝彦

＜本庄市教育委員会事務局＞

事務局長　　丸山　茂

文化財保護課

課　　長　　儘田英夫

課長補佐　　鈴木徳雄

埋蔵文化財係

係　　長　　太田博之

恋河内昭彦

大熊季広

松澤浩一

松本　完

的野善行

凡　　例

1．本書所収の遺跡全測図におけるＸ・Ｙ座標値は世界測地系に基づく。各遺構図における方位針は座標北をさす。

2．本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真中の遺構名称も同一の記号を用いた。

SI…住居跡　　SK…土坑　　SD…溝　　P…ピット

3．本書に掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。

【遺構図】

遺構全測図…１/300　　SI…１/20、１/60　　SK…１/40

【遺物実測図】

縄紋土器…１/２、１/３、１/４　石器…１/１、１/２、１/３、１/６　土製品…１/２

4．遺構断面図の水準数値は海抜を示す。単位はｍである。

5．遺構図及び遺物実測図中のトーンが示す内容は以下のとおりである。

ａ．遺構断面図中の斜線は基本層序Ⅲ層以下を示す。

ｂ．遺構平面図中の焼土範囲は以下のトーンで示す。

ｃ．遺物実測図中の被熱部分は以下のトーンで示す。

焼土範囲　　被熱部分

6．本書中に使用したAs－Ａとは1783（天明３）年に降下した浅間山噴出Ａ軽石、As－YPは浅間－板鼻黄色軽石（13,000～14,000y,B,P）である。

7．本調査における遺構の土層断面図及び遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を使用して観察した。

8．遺構の規模は上端での計測値を原則としている。

9．溝の軸方位については、上端の中心線を軸線として計測した。

10．挿図中で使用しているドット記号（●）は出土土器を、（▲）は出土石器を示す。

11．遺物観察中の単位は、法量はcm、重さはｇである。［　］内の数値は推定値を示す。

12．本書掲載の地形図は、国土交通省国土地理院発行１/25,000「高崎」「寄居」、位置図は児玉町現況図１/2,500　「12」に加筆したものを用いた。

目　　次

序
例言
凡例
目次

挿図目次
挿表目次
写真図版目次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 5
　1　調査の方法 …… 5
　2　調査の経過 …… 5
Ⅳ　調査の成果 …… 7
　1　遺跡の概要 …… 7
　2　基本層序 …… 7
　3　検出された遺構と遺物 …… 8
　　（1）　竪穴住居跡 …… 8
　　（2）　埋設土器 …… 27
　　（3）　溝跡 …… 27
　　（4）　土坑・ピット …… 28
　4　遺構外出土遺物 …… 38
Ⅴ　まとめ …… 41

写真図版
報告書抄録
奥付

挿　図　目　次

図 1　埼玉県の地形 …… 2
図 2　宮内上ノ原遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 4
図 3　宮内上ノ原遺跡調査地点 …… 5
図 4　宮内上ノ原遺跡E地点全体図 …… 6
図 5　基本層序 …… 7
図 6　SI-40 …… 9
図 7　SI-40 埋設土器 …… 10
図 8　SI-40 磨石・石皿検出状況 …… 10
図 9　SI-40 出土遺物（1） …… 10
図 10　SI-40 出土遺物（2） …… 11
図 11　SI-40 出土遺物（3） …… 12
図 12　SI-40 出土遺物（4） …… 13
図 13　SI-40 出土遺物（5） …… 14
図 14　SI-41・1号・2号埋設土器 …… 18
図 15　SI-41 出土遺物（1） …… 19
図 16　SI-41 出土遺物（2） …… 20
図 17　SI-42・炉跡 …… 22
図 18　SI-42 出土遺物 …… 23
図 19　SI-43 …… 25
図 20　SI-43 出土遺物 …… 26
図 21　単独埋設土器 …… 27
図 22　SD-02・03 出土遺物 …… 28
図 23　SK-189 ～ 192 …… 29
図 24　SK-193 ～ 199 …… 31
図 25　SK-200 ～ 204 …… 33
図 26　SK出土遺物（1） …… 35
図 27　SK出土遺物（2） …… 36
図 28　遺構外出土遺物（1） …… 39
図 29　遺構外出土遺物（2） …… 40
図 30　SI-42 出土石棒の類例 …… 42

挿　表　目　次

表 1　SI－40 出土遺物観察表（1）
表 2　SI－40 出土遺物観察表（2）
表 3　SI－40 出土遺物観察表（3）
表 4　SI－41 出土遺物観察表（1）
表 5　SI－41 出土遺物観察表（2）
表 6　SI－42 出土遺物観察表
表 7　SI－43 出土遺物観察表
表 8　単独埋設土器観察表
表 9　SD－02 出土遺物観察表
表 10　SD－03 出土遺物観察表
表 11　SK－189 出土遺物観察表
表 12　SK－190 出土遺物観察表
表 13　SK－191 出土遺物観察表
表 14　SK－194 出土遺物観察表
表 15　SK－195 出土遺物観察表
表 16　SK－197 出土遺物観察表
表 17　SK－199 出土遺物観察表
表 18　SK－200 出土遺物観察表
表 19　SK－203 出土遺物観察表
表 20　SK－204 出土遺物観察表
表 21　P－10 出土遺物観察表
表 22　SK計測表
表 23　ピット計測表
表 24　遺構外出土遺物観察表

写真図版目次

写真図版 1　宮内上ノ原遺跡の位置と周辺の地形
写真図版 2　宮内上ノ原遺跡E地点全景（南西より）
北側調査区全景（北より）
南側調査区全景（南西より）
写真図版 3　SI-40 遺物出土状況（北より）
SI-40 全景（北より）
SI-40 P-14 全景（北より）
写真図版 4　SI-40 1号埋設土器全景（北より）
SI-40 磨石・石皿出土状況（東より）
SI-40 遺物出土状況（北東より）
写真図版 5　SI-41・42・43 全景（北より）
SI-41・43 全景（北より）
SI-41 1号埋設土器出土状況（北東より）
写真図版 6　SI-41 2号埋設土器出土状況（北より）
SI-42 完掘状況（北より）
SI-42 石棒出土状況（北より）
写真図版 7　単独埋設土器全景（北より）
SK-190 全景（北より）
SK-192 ～ 195（北東より）
写真図版 8　SK-202（北より）
SK-203（南より）
SK-204（南より）
写真図版 9　SI-40 出土遺物（1）
写真図版 10　SI-40 出土遺物（2）
写真図版 11　SI-40出土遺物（3）
写真図版 12　SI-40出土遺物（4）
写真図版 13　SI-41出土遺物（1）
写真図版 14　SI-41出土遺物（2）
SI-42 出土遺物
写真図版 15　SI-43 出土遺物
単独埋設土器
SK-189 出土遺物
SK-190 出土遺物
SK-191 出土遺物
SK-194 出土遺物
写真図版 16　SK-195 出土遺物
SK-197 出土遺物
SK-199 出土遺物
SK-200 出土遺物
SK-203 出土遺物
SK-204 出土遺物
SD-02 出土遺物
SD-03 出土遺物
P-10 出土遺物
写真図版 17　遺構外出土遺物

Ⅰ　調査に至る経過

本報告にかかる本庄市宮内上ノ原遺跡Ｅ地点の発掘調査は、特別養護老人ホーム等の建設計画に伴って失われる埋蔵文化財の記録保存のために実施されたものであり、発掘調査に至る経緯の概要は、以下のとおりである。

埼玉県本庄市児玉町宮内字上の原 1250 － 1 外 5 筆の約 3,560 ㎡において特別養護老人ホームの建設が計画され、この建設計画に基づいて社会福祉法人武蔵野福祉会理事長倉林敏澄より開発予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会が本庄市教育委員会に提出されたのは平成 18 年 10 月 2 日であった。本庄市教育委員会では、この開発予定地内の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地（№.54 － 105）宮内上ノ原遺跡に相当することとともに、これら埋蔵文化財の試掘調査が必要である旨の説明をおこなった。試掘調査は、対象区域の作物の収穫や樹木の移植を待って、平成 18 年 10 月 30 日から 11 月 2 日に実施し、試掘対象区域の南西側を中心に縄紋前期を主とする竪穴住居跡等の遺構が確認されたところから、これらの埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての回答を行うとともに、建設計画と埋蔵文化財の保護についての調整を行った。

本庄市教育委員会は、試掘調査の結果をもとに社会福祉法人武蔵野福祉会との埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行い、埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するよう調整を行うとともに、建設計画の変更の可能性を探りながら調整を進めた。しかし、特別養護老人ホーム建設計画による埋蔵文化財への影響は避けがたく、この工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる 110 ㎡の区域についての発掘調査を実施する必要が生じた。以上の協議を踏まえて、社会福祉法人武蔵野福祉会から本庄市に発掘調査の依頼があったので、調査を実施する区域を宮内上ノ原遺跡Ｅ地点とし、平成 19 年度宮内上ノ原遺跡Ｅ地点発掘調査受託事業として本庄市と社会福祉法人武蔵野福祉会との間で遺跡発掘調査委託契約を締結することで、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。なお、現状変更区域の南西部分の建物については、建物基礎の支持強度確保のためにやむを得ず 613.7 ㎡の追加の調査が必要となった。

発掘の実施にあたっては、社会福祉法人武蔵野福祉会理事長倉林敏澄より平成 18 年 10 月 2 日に、文化財保護法第 93 条第 1 項同法第 184 条第 1 項及び文化財保護法施行令第 5 条第 2 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が本庄市教育委員会に提出されたが、試掘調査実施以前であり、事業計画にも未確定な部分があったため、試掘終了後現地の建設計画が固まったのを見て平成 19 年 6 月 12 日付け本教文保第 70 号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この発掘の届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から本庄市教育委員会教育長に、社会福祉法人武蔵野福祉会理事長倉林敏澄宛の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知が平成 19 年 9 月 3 日付け教生文第 3 － 471 号であったので、本庄市教育委員会は同日社会福祉法人武蔵野福祉会理事長に送付した。

発掘調査の実施については、本庄市教育委員会教育長茂木孝彦から、平成 19 年 6 月 12 日付け本教文保第 71 号で、文化財保護法第 99 条の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を埼玉県教育委員会教育長に提出した。なお、現地の発掘調査は、平成 19 年 6 月 21 日に開始され、平成 19 年 9 月 19 日に終了した。

（本庄市教育委員会文化財保護課）

Ⅱ　遺跡の環境

1　地理的環境

本遺跡の所在する本庄市は、埼玉県北西部に位置している。平成18年1月10日に旧本庄市と旧児玉町が合併して新「本庄市」となり、人口、面積ともに埼玉県北部の中心的な都市となった。また、これにともなって、市域には上武山地から妻沼低地に至る山地部と平野部の境界域を包括した、変化に富んだ地形をもつに至っている。

本庄市は、南方より山地・丘陵・台地・低地の四地形に区分される。市域南西部には三波川系結晶片岩帯に相当する標高300～500ｍを測る上武山地が位置しており、この山地域が埼玉・群馬両県にまたがって、概ね北西から南東方向へと展開している。この上武山地に接して児玉丘陵が位置し、「八王子－高崎構造線」により区分されている。児玉丘陵は、山地裾部より北東方向へ半島状にのびており、先端部には沖積作用によって浸食・分離された生野山、浅見山などの残丘性丘陵が標高100ｍ～180ｍの小支丘群を形成しながら小山川に沿うように位置している。また、児玉丘陵の小支丘の間には、山地からの湧水によって開析された細長い谷が発達している。なお、これと同様な地形が小山川の東側にも展開しているが、これらについては児玉丘陵と区別されて松久丘陵と呼ばれている。

児玉丘陵の北側には、埼玉・群馬両県の境とする神流川の堆積作用により形成された一段低い扇状地性台地である本庄台地が展開している。この台地の東側に沿って、上武山地内を水源とする女堀川や金鑽川などの小河川の開析により形成された、帯状の沖積低地が広がっている。この沖積低地内には、台地面が開析されずに遺存した微高地と沖積作用によって形成された自然堤防が、女堀川に沿うように点列状に並ぶ。本庄台地北側に広がる妻沼低地は旧神流川または烏川の氾濫原で、台地とは6～7ｍの比高をもつ段丘崖によって区分されている。

こうした地形のなか、本遺跡は児玉丘陵を構成する小支丘の一つに位置し、上武山地との境の近点に立地している。

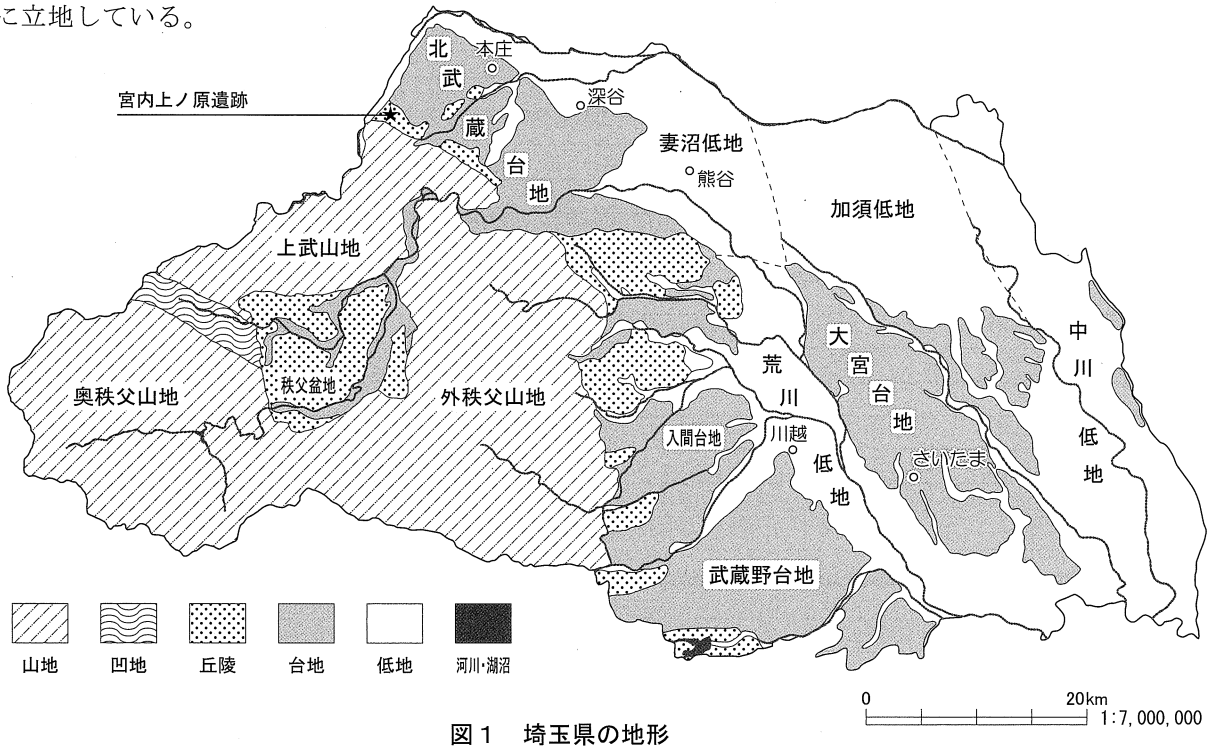


図１　埼玉県の地形

2　歴史的環境

本遺跡を含めた児玉丘陵から平野部にかけての縄紋時代の様相は、一定の範囲に留まることなく、時期や生活形態の変化など様々な要因によって常にその占地を変えながら、集落を形成していることを特徴とする。本遺跡における集落占地も、この地域の縄紋集落の一般的な占地の傾向に一致している。以下では、この占地の傾向を踏まえながら縄紋時代における周辺の遺跡を概観する。

草創期から早期にかけては丘陵部や丘陵縁辺部に偏り、丘陵に接する台地平坦部にも進出するが、本庄台地などの台地や低地には少ない傾向にある。丘陵先端部に位置する長沖梅原遺跡（10)、秋山宿田保遺跡（25）では爪形紋や側面圧痕紋土器が検出されている。丘陵に接する台地面には葦池遺跡（９)、城の内遺跡（24)、山地部では塔ノ入遺跡（31）といった小規模な遺跡が点在しており、押型紋系土器、貝殻沈線紋土器が少量ながら検出されている。また、秋山南飯盛遺跡（28)、秋山中山遺跡（29）等では早期後半の貝殻条痕紋系土器が検出されている。本遺跡Ｂ・Ｅ地点でも撚糸紋系土器、押型紋系土器、貝殻沈線紋及び貝殻条痕紋系土器等が少量ながら出土しており、その活動域が窺える。

前期になると特に児玉丘陵から上武山地周辺で住居跡を伴う遺跡数が増加し、丘陵部を中心に丘陵付近の台地や山地部の丘陵に接する尾根筋の平坦面で遺跡相互が密に分布する。本遺跡や天田遺跡（２)、脊戸谷遺跡（３)、塩谷下大塚遺跡（７)、宇留井山遺跡（11）などが該当する。これに対し本庄台地においては前期の遺物が稀薄で、丘陵部における集落の分布状況とは対照的である。

中期になると引き続き丘陵部や山地に占地するが、遺跡分布は拡大し、その中心は後背地を控えた本庄台地に移る。本庄台地周辺では中葉以降さらに遺跡分布が拡大し、勝坂式終末期から加曽利ＥⅢ式期にかけて、新宮遺跡（18)、古井戸遺跡（20)、将監塚遺跡（21）において大規模な環状集落が形成される。大規模集落周辺の台地や丘陵部には中・小規模の集落が高密度で形成され、勝坂式期においては塩谷平氏ノ宮遺跡（６)、倉林東遺跡（13)、加曽利Ｅ式期では観音山遺跡（８)、賀家ノ上遺跡（14）などが立地する。山地では河内下ノ平遺跡（32)、橋ノ入遺跡（33)、神川町杉ノ嶺遺跡（34）にみられ、本遺跡Ａ地点の丘陵頂部でも加曽利Ｅ式期の環状集落が存在している。

後･晩期になると遺跡数は大きく減少するが、これまで未開地であった低地への進出が顕著になる。また、大規模集落は見られなくなり、小規模な集落が継続的に営まれるようになる。旧河道流域に占地する女池遺跡（15）では称名寺式から堀之内２式期の土器群が、湧水点に接する台地に占地する児玉清水遺跡（16）では堀之内１式から安行３ｂ式にかけての土器群が検出されている。本庄台地の微高地上に占地する藤塚遺跡（23）においては称名寺式から安行３ｃ式期に及ぶ土器群が検出されている。丘陵部である本遺跡Ｅ地点でも後世の土坑から晩期の粗製土器片が１点のみ出土している。

晩期終末にはその分布が丘陵や山地に拡散する。ただ、本庄市において縄紋時代終末期から弥生時代初期の遺跡は少なく、弥生中期までは小山川流域等で小規模に点在するのみで、台地部の児玉清水遺跡や丘陵部の秋山塚原遺跡（26)、山地部の塔ノ入遺跡において少量見られる程度である。弥生後期になると児玉丘陵を中心として遺跡数は増加傾向にあるものの、塩谷下大塚遺跡や塩谷平氏ノ宮遺跡といった小規模な集落が丘陵部を中心として形成されるのみで、大規模な集落は確認されていない。再び大規模な集落跡が形成されるのは古墳時代に入ってからであり、占地も女堀川中流域の低地域に中心を移す。これらの集落は、異系統土器を伴うことが特徴的であり、低地域の開発を前提とした集落として捉えることができる。

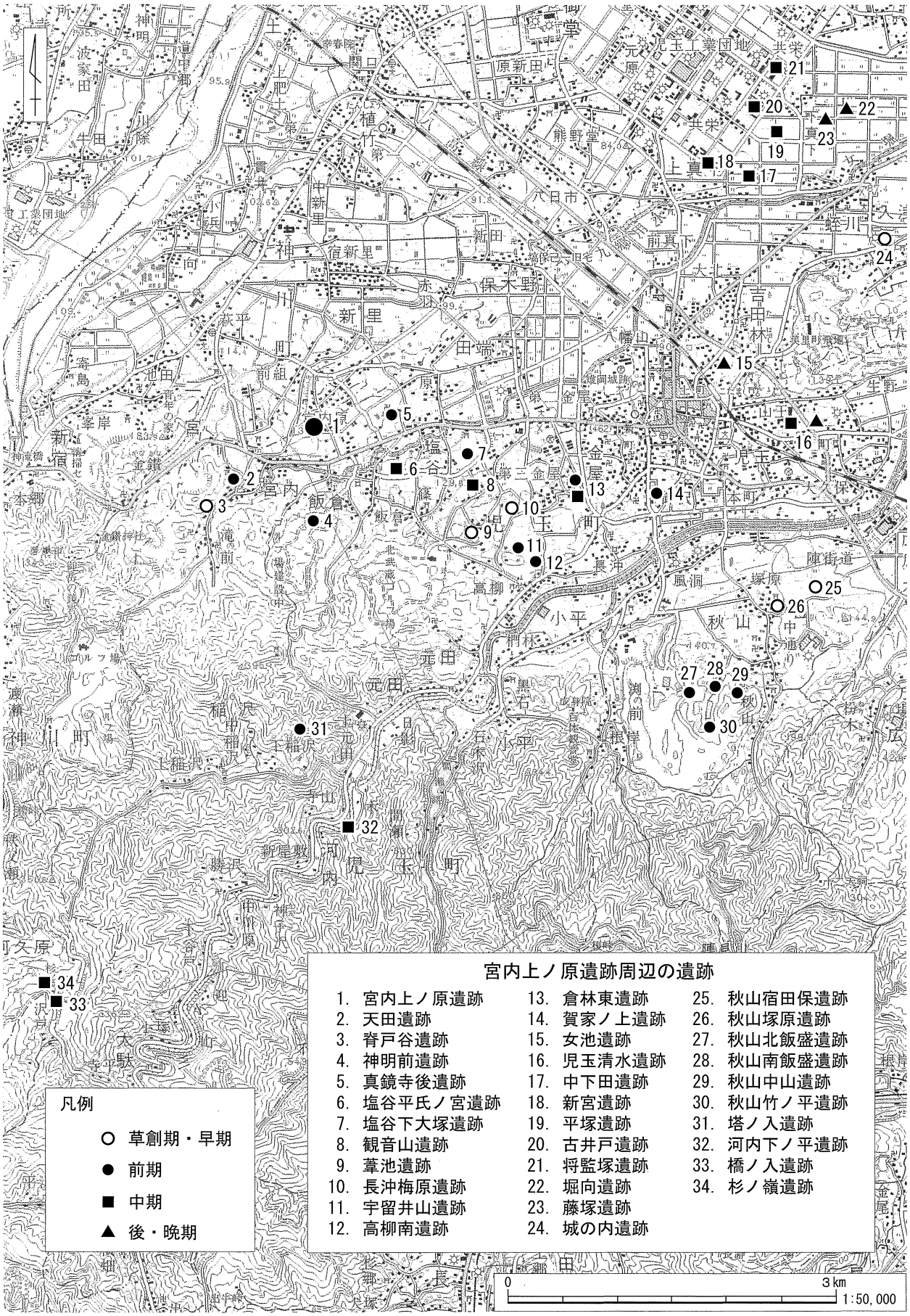


図２　宮内上ノ原遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

発掘調査は試掘調査の成果等を参考に、ローム層（基本層序Ⅲ層）上面を遺構確認面として実施した。その直上までは重機を用いて掘削を行い、その後の遺構確認と調査は人力で行った。現地実測の基準として方眼基準杭と基準点・水準点を設置し、各遺構平面図は機械測量、土層断面図は手実測で行い、縮尺は1/10ないし1/20とした。遺構の写真撮影は、35㎜モノクロ、カラーリバーサルの各フィルムとデジタルカメラを使用し、遺跡全景撮影はバルーンによるデジタルカメラ撮影を行った。

整理調査においては出土遺物の注記はインクジェットを使用し、遺跡の略号は「ＭＹＵＨＥ」とした。接合にはセメダインＣ、復元にはエポキシ樹脂を使用した。遺物の写真撮影には６×７判モノクロフィルムを使用した。遺物実測は等倍で手実測で行い、適宜拓本を使用した。遺構・遺物図はロットリングによるトレースを行い版下図版を作成したのち、原稿執筆を行った。

2　調査の経過

発掘調査は２次にわたり、平成19年６月21日から同年７月９日を第１次、同年８月６日から同年９月19日を第２次として実施した。第１次は北側調査区110㎡、第２次は南側調査区613.7㎡をそれぞれ調査した。遺構調査終了後、埋め戻し作業は行わず、そのまま事業者側へ引き渡しを行った。

整理作業は平成19年10月26日から平成20年３月14日にかけて実施し、平成20年３月31日付で報告書を刊行した。

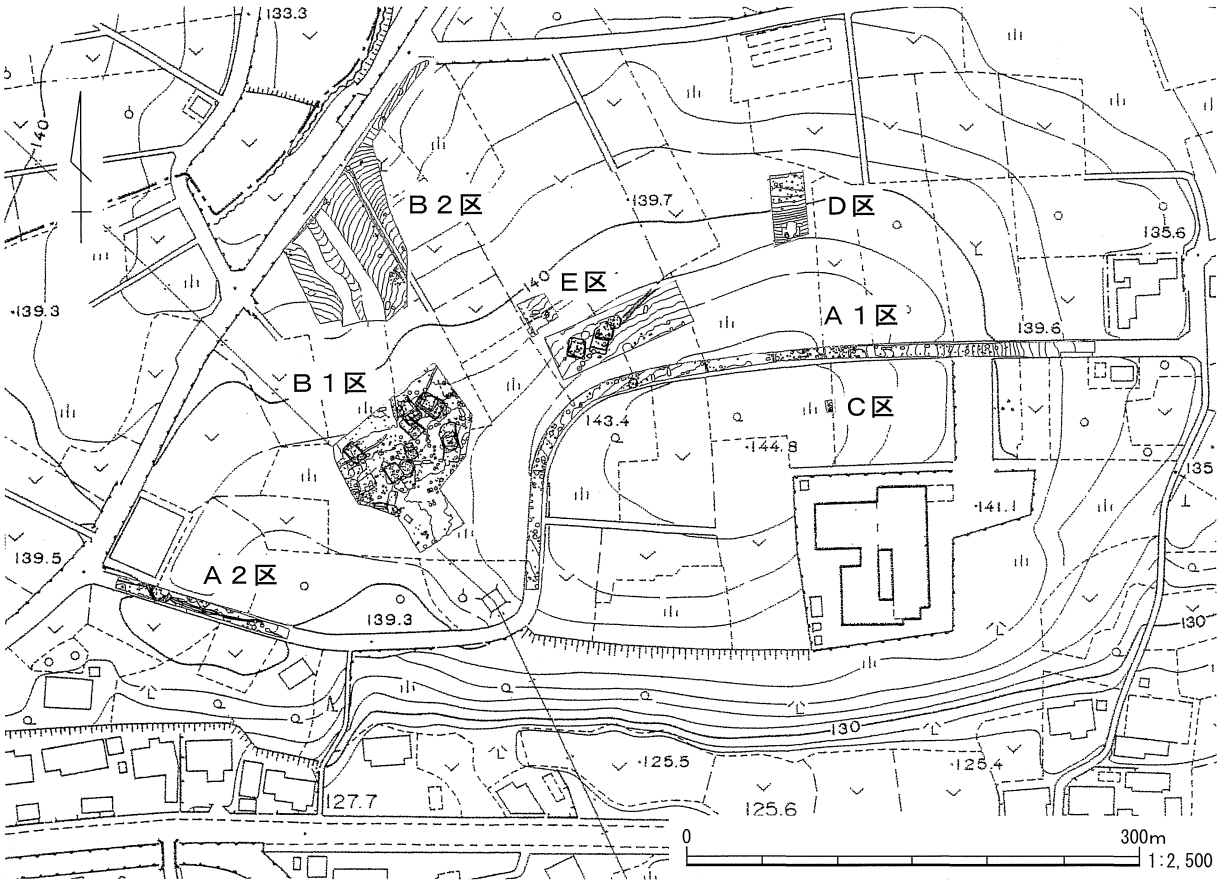


図３　宮内上ノ原遺跡調査地点

図４　宮内上ノ原遺跡Ｅ地点全体図

Ⅳ　調査の成果

１　遺跡の概要

本遺跡は本庄市児玉町宮内に所在し、南側の上武山地から北東方向に半島状に延びる児玉丘陵の標高 143 m付近の比較的平坦な部分から北斜面地にかけて立地している。

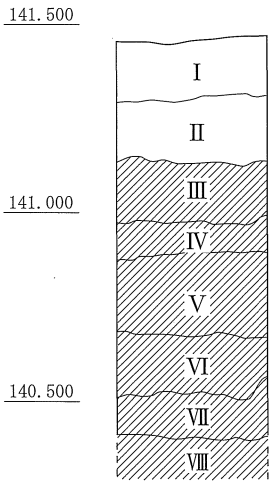
本遺跡の発掘調査は、これまでに農道改良工事に伴うＡ地点（1988 年調査）、鉄塔建設に伴うＢ地点（2002 調査）、福祉施設に伴うＣ・Ｄ地点（2003、2005 年調査）の４地点で実施されている。検出された遺構は総計で竪穴住居跡 39 軒（縄紋、弥生、平安）、土坑 188 基（地下式坑含む）、溝１条、埋没谷２基である。縄紋時代早期から中期、弥生時代、平安時代、中世にわたる複合遺跡であるが、主体は縄紋時代前期黒浜式から諸磯式、中期加曽利Ｅ式期の集落である。出土遺物は黒浜式から加曽利Ｅ式を主体とし、早期撚糸紋系土器、押型紋系土器、貝殻沈線紋及び貝殻条痕紋系土器が出土している。また、弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定される吉ヶ谷系土器を伴う住居も検出している。

今回報告するＥ地点は、Ｂ地点東側、Ａ地点北側の標高 141 ～ 143 ｍを測る緩傾斜面に位置する。検出された遺構は縄紋時代前期中葉黒浜式、後半諸磯ａ・ｃ式期の竪穴住居跡４軒と土坑 16 基（縄紋 10 基、中世以降６基）、ピット 10 基（縄紋）、時期不明の溝２条であった。竪穴住居跡の主軸はすべて北東－南西方向である。本調査区内東側では竪穴住居跡が検出されておらず、前期集落の東端であることが判明した。SK -204 においては鉢形土器が伏した状態で出土しており、意図的に埋設した痕跡が窺える。また２基１対で並ぶSK -192 ～ 195 は、覆土から中世以降である可能性が高い。

出土遺物は縄紋時代前期中葉黒浜式・有尾式、後半諸磯ａ・ｃ式の土器・石器が中心で、そのほか早期撚糸紋系土器、中期後半加曽利Ｅ式、晩期の土器と中世以降の陶器が検出された。石器は打製石斧、磨石、スクレイパーの比率が高い。SI－40 床面では磨石と石皿がセットで出土し、廃棄直近の様相が窺えた。SI－42 では壁際から石棒が検出されたほか、黒曜石の剥片が多量に出土している。

２　基本層序

今回の調査では北側と南側調査区の中間で傾斜に対して垂直方向に基本層序観察を行っている。ローム面（Ⅲ層）より上層の２層はともに火山起源の軽石が観察された。表土であるⅠ層は、浅間山噴出Ａ軽石（1783 年：天明３年）を含む混土層である。この層を切り込む遺構はなく、検出遺構は近世以前のものとして捉えることができる。Ⅱ層は縄紋土器を含む包含層で、浅間－板鼻黄色軽石（As－YP）が再堆積している。Ⅲ層以下においてもAs－YPが再堆積しており、表土下１ｍ程で浅間－板鼻褐色軽石群（As－BP）となる。



基本層序　土層説明

Ⅰ	暗褐色土	表土。As-A多量に含む。しまりややあり。粘性なし。
Ⅱ	暗褐色土	As-YP粒を多量、褐色粒を微量含む。しまり強い。粘性なし。
Ⅲ	褐色土	As-YP粒、灰白色粒（径１mm）多量、ロームブロック径1～5cmを少量含む。しまり強い。粘性中弱。漸移層。
Ⅳ	黄褐色粘質土	褐色粒（径２cm）を少量、As-YP粒を微量含む。しまりやや強い。粘性強い。
Ⅴ	黄褐色粘質土	灰白色粒（径１mm）少量、As-YP粒を微量含む。しまり固い。粘性やや強い。
Ⅵ	暗黄褐色粘質土	灰白色粒を微量含む。しまりやや強い。粘性強い。As-BP上部。
Ⅶ	黄褐色粘質土	灰白色粒、褐色粒を微量含む。しまり、粘性ともにやや強い。
Ⅷ	黄褐色粘質土	褐色粒（径５mm～２cm）を多量に含む。しまり強い。粘性中弱。

図５　基本層序（Ｓ＝1/20）

３　検出された遺構と遺物

（１）竪穴住居跡（SI）

今回検出された住居跡は総計４軒で、すべて縄紋時代の竪穴住居跡である。調査区南西部に密集して分布しており、調査区東半部からは全く検出されていない。SI－41 ～ 43 は重複しており、南側より順に新しくなる。平面形はSI－40・41・43 が隅丸方形、SI－42 は円形を呈する。SI－40・41・43 では柱穴と周溝が複数確認されており、拡張あるいは建て替えが数回行われたものと捉えられる。各住居跡の壁面は北側へ傾斜する緩斜面地であるため、概して北壁は浅く、SI－41 ではほとんど確認できなかった。各住居跡の覆土は共通してしまりが非常に強い黒褐色土を主体としている。

SI－40（図６～ 13、表１～３/写真図版３・４・９～ 12）

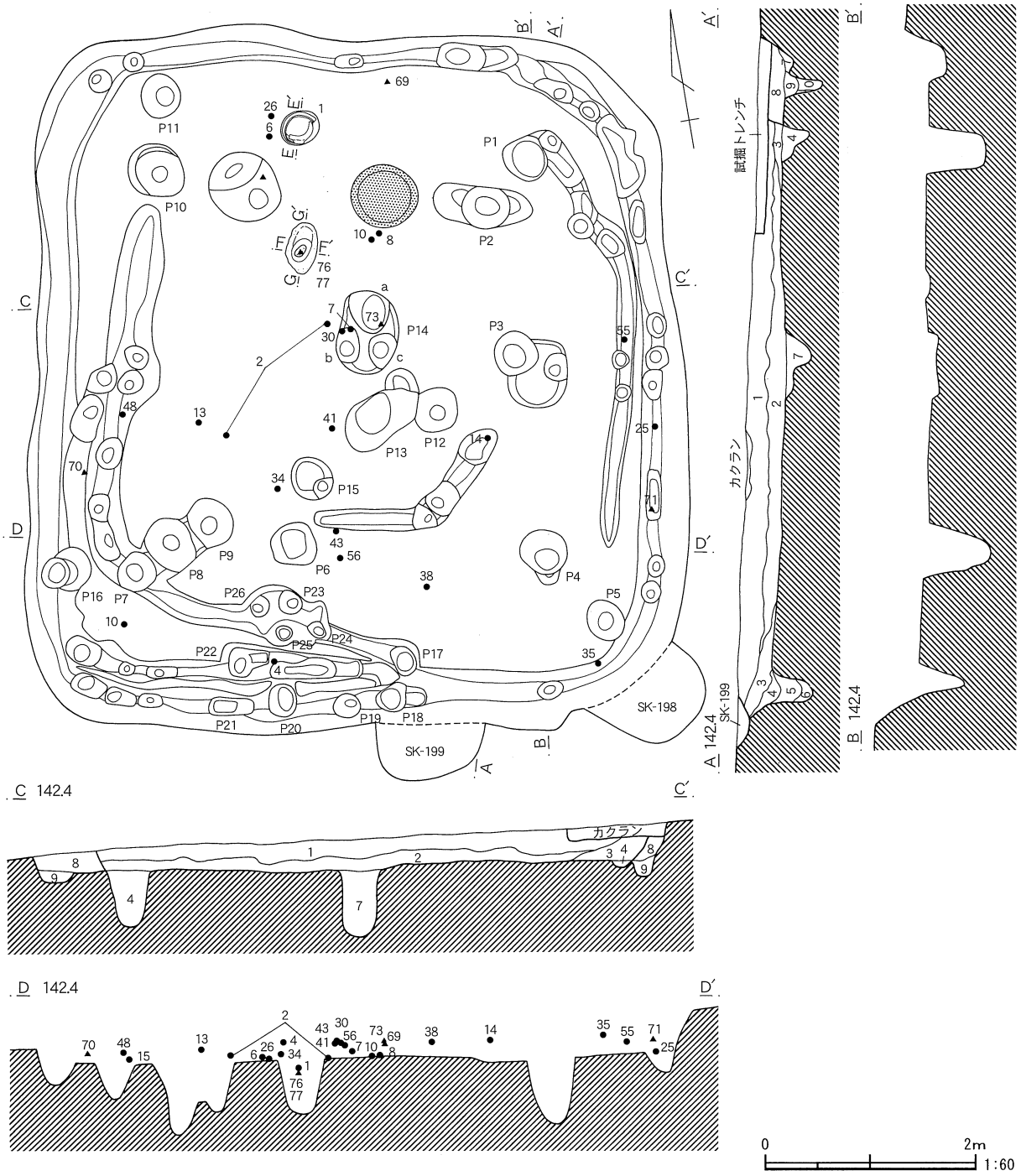
位置：調査区の西側に位置する。SK－198・199 と重複し、本遺構が一番旧い。また、本住居跡は３条の壁周溝と覆土堆積状況、床面出土土器から３期の重複が認められた。旧い順よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ期とした。最も内周する壁周溝から外に向かって順にⅢ期→Ⅰ期→Ⅱ期に該当する。

形状：Ⅰ期：長軸 6.14 m、短軸 6.12 mを測る隅丸方形。Ⅱ期：長軸 6.50 m、短軸 6.12 mを測る隅丸長方形。Ⅲ期：長軸 5.20 m、短軸 5.08 mを測る隅丸方形を呈する。

構造：残存する壁面は一部を除きⅠ・Ⅱ期で共有する。急な傾斜を持ちながら立ち上がり、残存深度は 46 cmを測る。各期の床面は概ね平坦で、南半部では硬化面が部分的に確認されている。また、南西隅ではⅡ期の床面がⅠ期の床面より若干の高い。Ⅰ・Ⅱ期の壁周溝は南西隅を除き、重複しながら全周する。それぞれ幅 30 ～ 50cm、深度 10 ～ 40 cmを測り、断面は箱状とＶ字状を呈する。Ⅲ期はⅠ・Ⅱ期と主軸が異なる。幅 15 ～ 30 cm、深度 5 ～ 30cm を測り、断面はＵ字状を呈する。各周溝底面は概ね平坦であるが、ピット状に落ち込む部分も見られる。ピットは総計 29 基検出され、そのうち７基が主柱穴と推定される。Ⅰ期はＰ１・４・８・10、Ⅱ期はＰ１・４・７・10、Ⅲ期はＰ２・９が該当する。各主柱穴は深度 50 ～ 60 cmを測る。中央には主柱穴と同規模のピット（Ｐ 14 ａ・ｂ・ｃ）が検出され、各期にそれぞれ対応する。各南壁壁周溝内中央部には、10 基のピット（Ｐ 17 ～ 26）が配置されている。Ｐ 18 ～ 21、17 と 22、24 と 26 はそれぞれ対ピットと考えられ、入口施設を想定させる。埋設土器は住居北壁寄りの位置で検出された。土器の様相からⅢ期に属する。長径 38cm、短径 33cm の楕円形を呈し、深度 15 cmを測る断面箱状の掘り込みに埋設され、埋設土器は住居中央方向に若干傾いている。炉跡は明確には確認されなかったが、北東壁寄りに皿状の掘り込みが位置し、ごく微量であるが焼土ブロックや焼土粒が確認されている。

遺物：縄紋前期中葉黒浜式・有尾式期から前期後半諸磯ａ式期の土器が大量に出土しているが、大半は黒浜式・有尾式である。覆土上層から下層にかけてまんべんなく見られ、若干ではあるが壁際よりも中央に纏まって出土する傾向が窺えた。特に、諸磯ａ式期の土器は中央に寄る傾向にある。石器では磨石、打製石斧、結晶片岩質の自然礫の出土が多い。磨製石斧（71）は東壁中央の中層から出土している。床面直上では石皿（77）が磨石（76）を伴って検出された。若干西側へ傾きながら位置し、石皿の中央は貫通している。出土状況も踏まえ使用廃棄直後の状態が窺える。

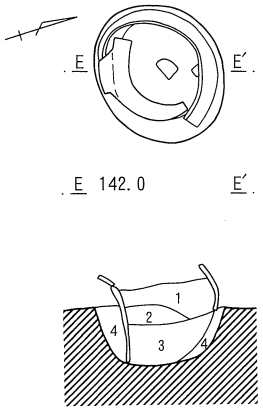
所属時期：覆土と出土遺物から縄紋時代前期中葉から後半期と考えられる。



SI-40　土層説明

1　黒褐色土　As-YP粒子を均一に、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。
2　黒褐色土　As-YP粒子を疎らに、ロームブロックを少量、ローム粒、炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。
3　黒褐色土　As-YP粒子を疎らに、ロームブロックを少量、ローム粒、炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。
4　暗褐色土　ローム粒を少量、ロームブロック、炭化物を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。
5　暗褐色土　ロームブロックを少量、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり、粘性ともにやや弱い。
6　暗褐色土　As-YP粒子を少量含み、ロームブロックを多量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
7　暗褐色土　As-YP粒子を微量含み、ローム粒を多量、ロームブロック、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
8　褐色土　ローム粒を少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
9　褐色土　ロームブロックを多量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
10　褐色土　ローム粒、ロームブロックを多量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
11　暗褐色土　ロームブロックを少量含み、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり、粘性ともにやや強い。

図6　SI-40



SI-40 埋設土器　土層説明

1 暗褐色土　As-YP 粒子を疎らに、炭化物、マンガン粒子を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

2 褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

3 暗褐色土　焼土・炭化物を微量に含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

4 暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

図７　SI -40 埋設土器

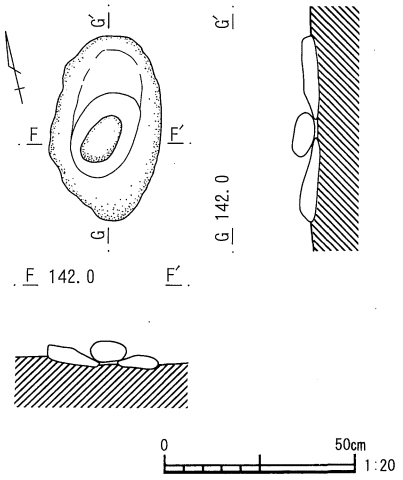


図８　SI -40 磨石・石皿検出状況

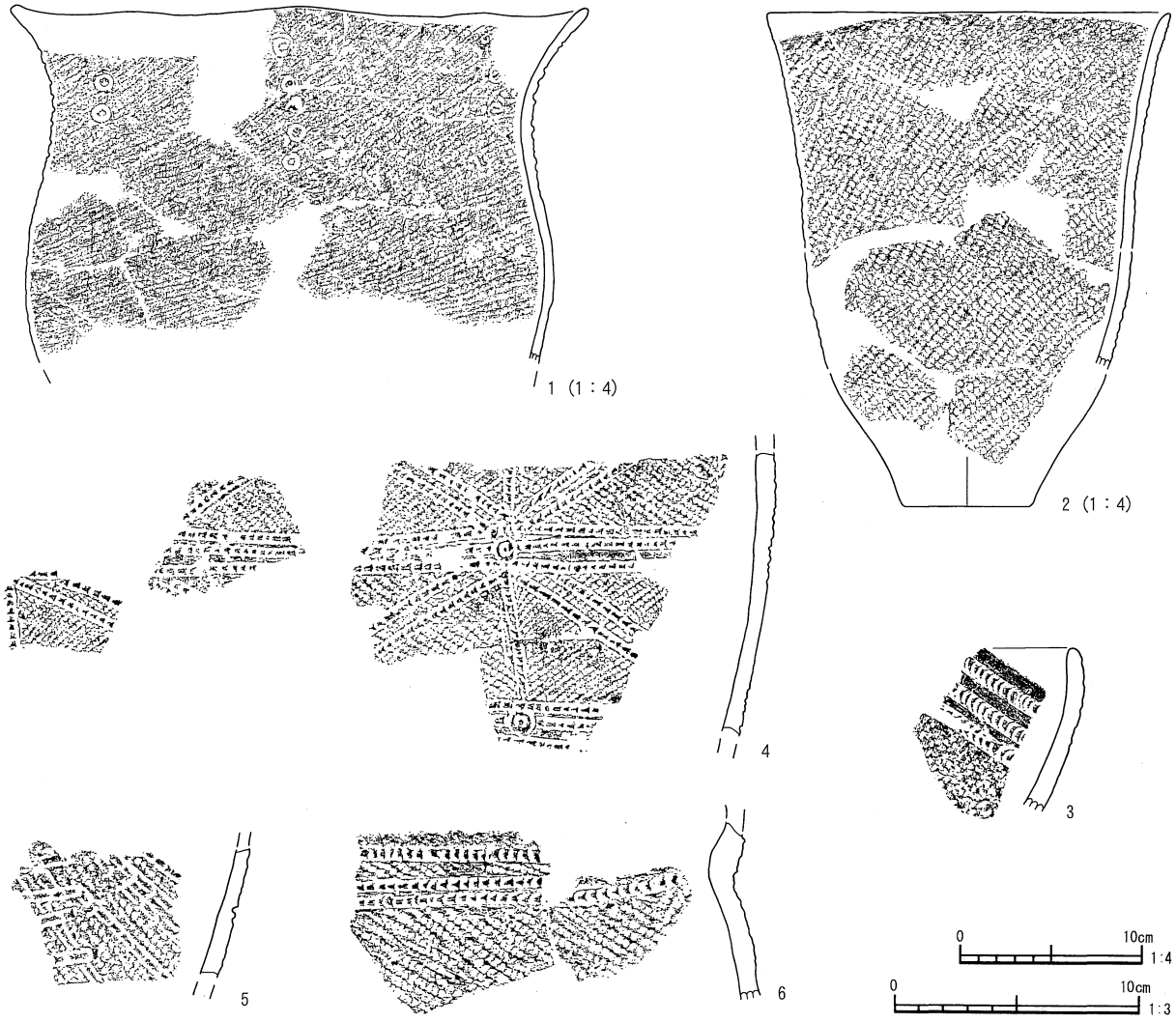


図９　SI-40 出土遺物（１）

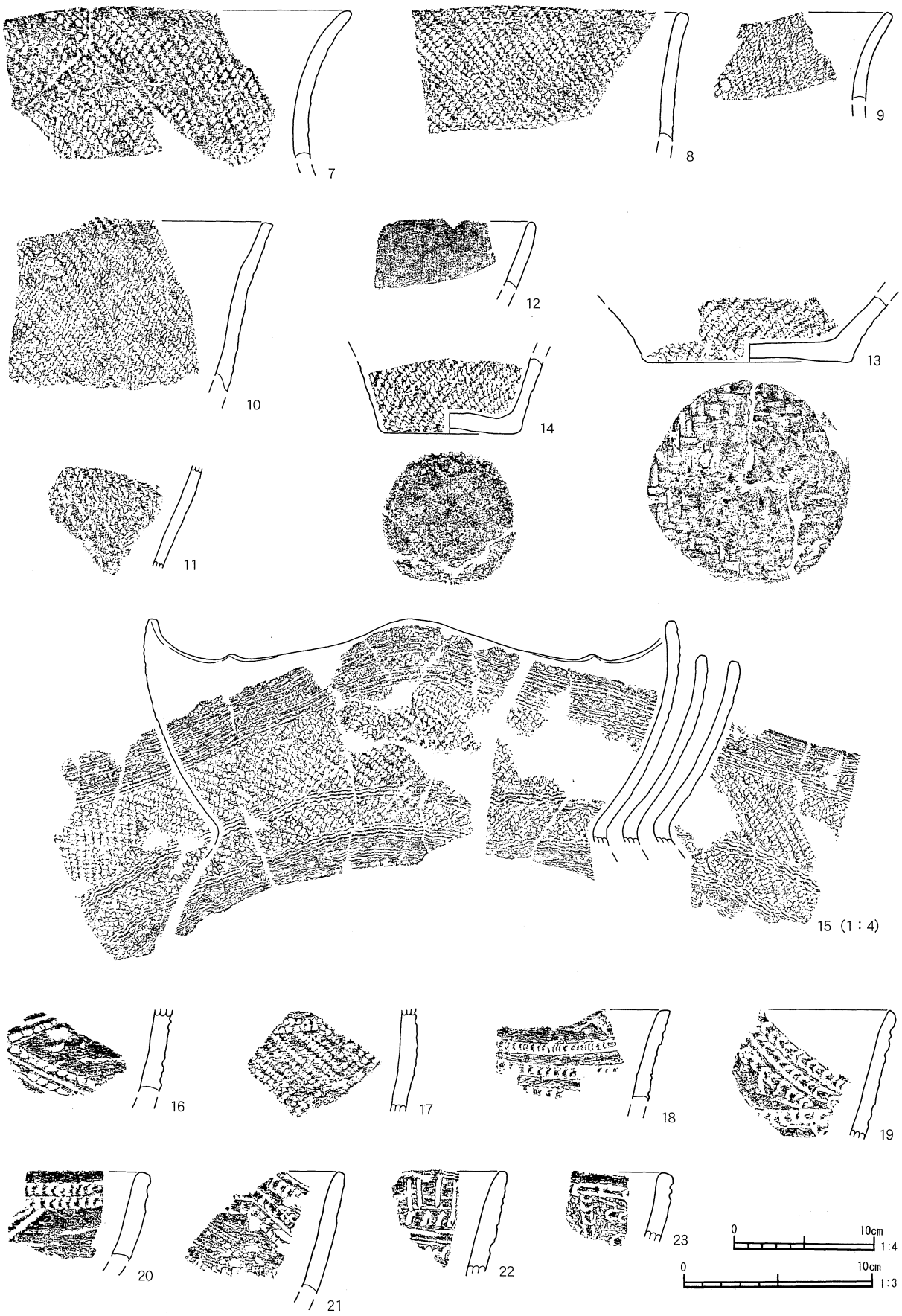


図 10　SI-40 出土遺物（2）

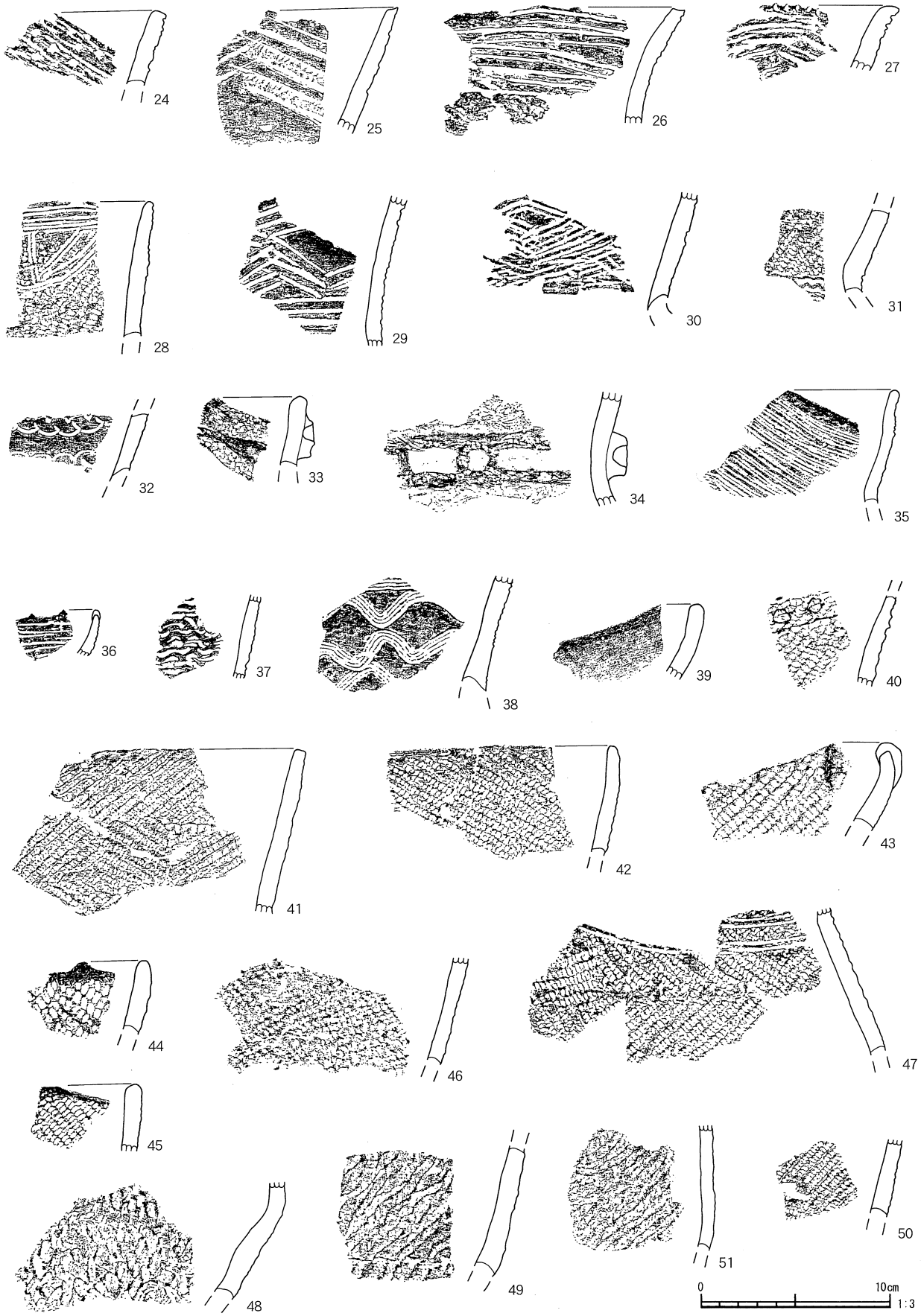


図 11　SI-40 出土遺物（3）

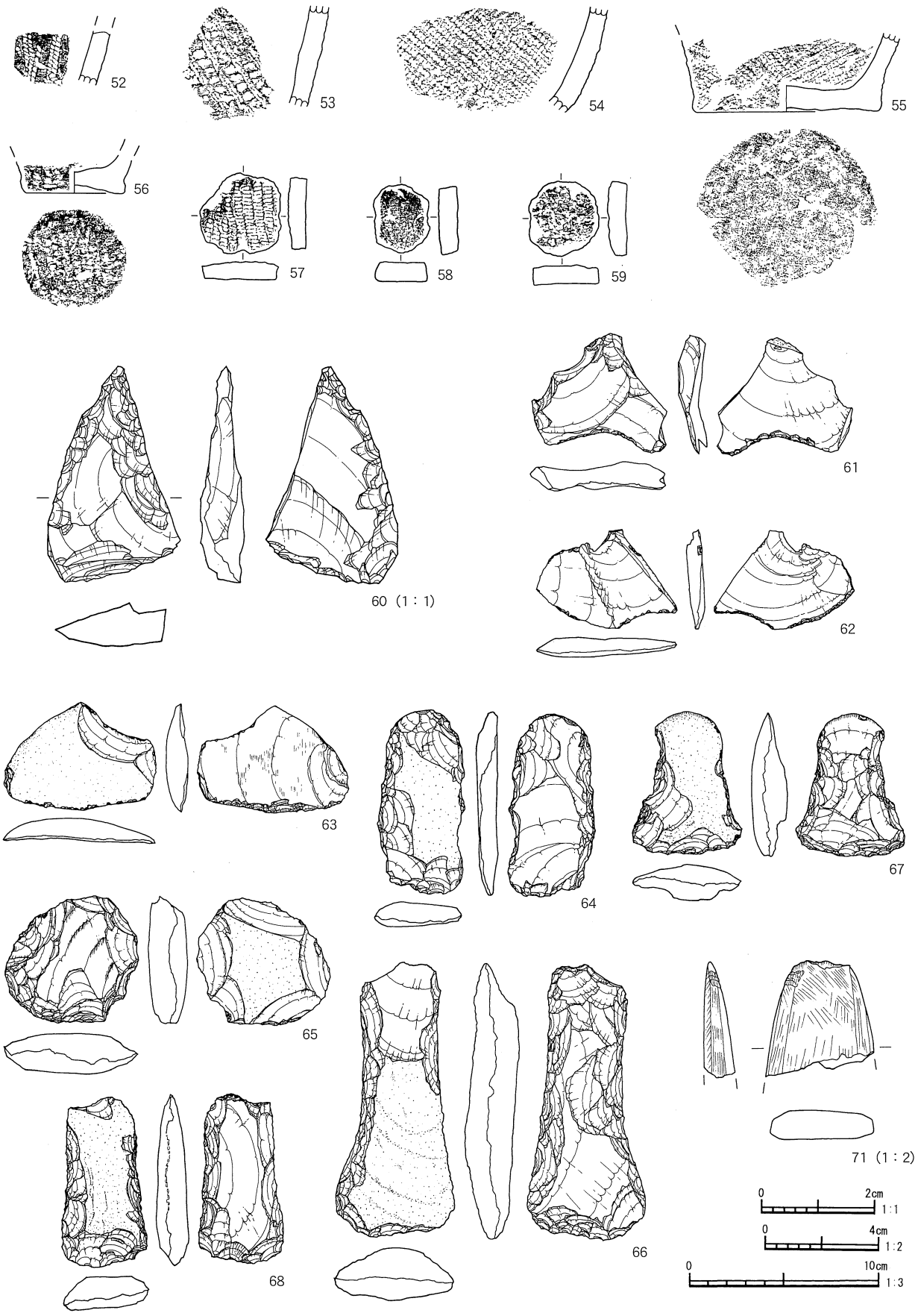


図 12　SI-40 出土遺物（4）

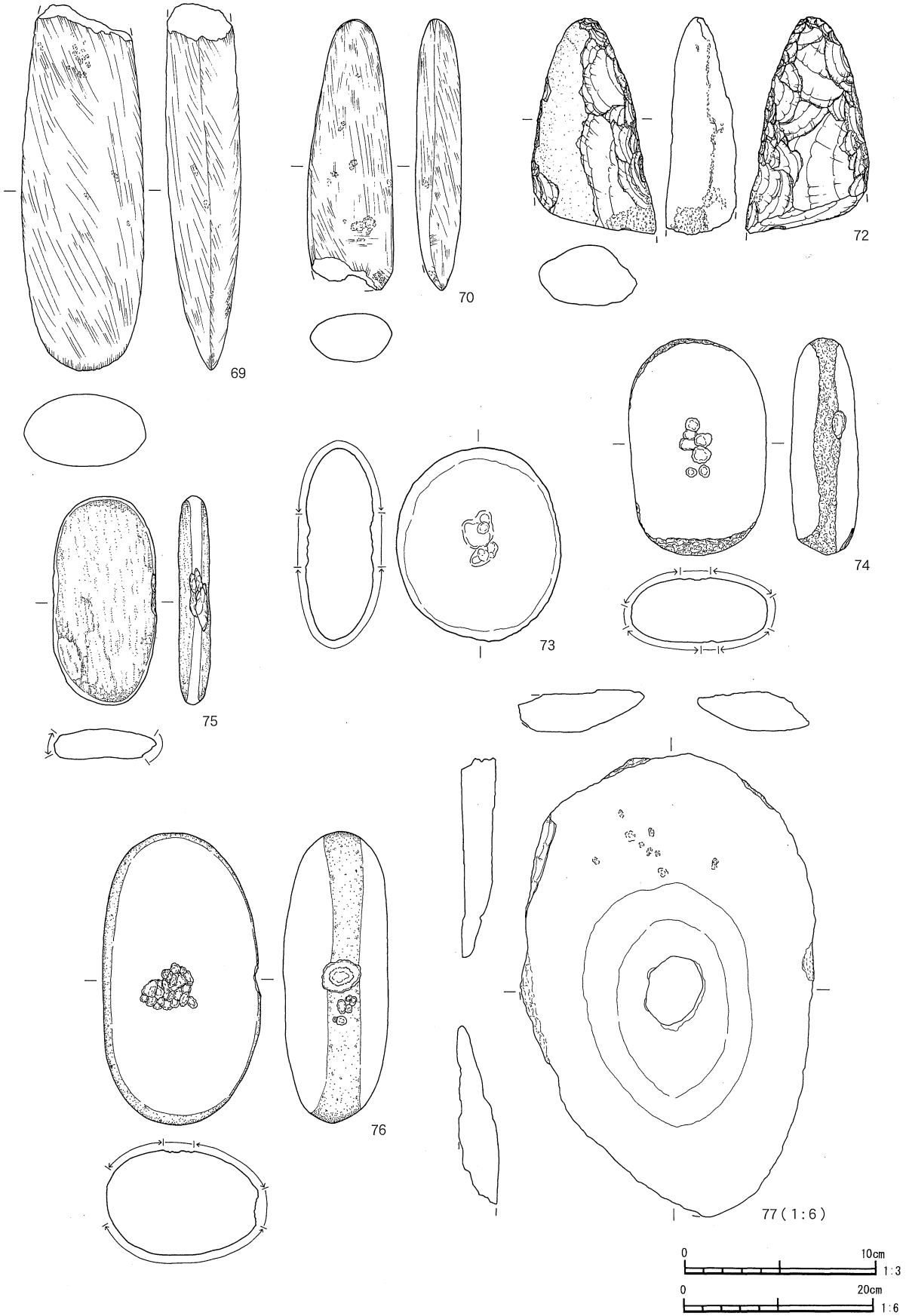


図 13　SI-40 出土遺物（5）

表１　SI－40 出土遺物観察表（１）

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部 ～胴部	口縁部は波状口縁。地紋にＬの無節縄紋を縦、横、斜位に施紋。波状口縁部下より円形竹管状工具による円形竹管文。内面磨き。内面に爆ぜの痕跡と煤付着。	①角閃石・片岩・砂粒 ②明赤褐色
2	縄紋土器 深鉢	口縁部 ～胴部	口縁部～胴部にかけてＬＲの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩・砂粒②にぶい橙色
3	縄紋土器 深鉢	口縁部	波状口縁。口縁内彎。半截竹管状工具による平行沈線文。口唇部に棒状工具の側面による連続刺突。平行沈線内に爪形連続刺突。下端にＬＲの単節縄紋を横位施紋。内面ナデ。	①繊維・角閃石・片岩 ②褐色
4	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による連続爪形文描米字文。合流部分に円形竹管文。ＬＲ、ＲＬの単節縄紋をそれぞれの区画に羽状に充填。内面磨き。	①繊維・角閃石・長石・雲母②灰黄褐色
5	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋にＲＬの単節縄紋を横位施紋。半截竹管状工具による平行沈線文。平行沈線内に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・角閃石・雲母 ②暗赤褐色
6	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬ、ＬＲの単節縄紋を交互に横位施紋し、羽状構成をとる。頸部に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・角閃石・雲母 ②暗赤褐色
7	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①角閃石・片岩②明赤褐色
8	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①片岩②にぶい赤褐色
9	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。丸棒状工具の先端による刺突。内面磨き。	①片岩②にぶい黄褐色
10	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。補修孔あり。	①角閃石・片岩②灰黄褐色
11	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①角閃石・片岩②褐色
12	縄紋土器 深鉢	口縁部	無紋。全面磨き。	①角閃石・石英 ②にぶい褐色
13	縄紋土器 深鉢	底部	胴部にＬＲの単節縄紋を横位施紋。底部は上げ底。底面に網代痕。四本越え四本潜り二本送り。	①角閃石②にぶい赤褐色
14	縄紋土器 深鉢	底部	胴部にＬＲの単節縄紋を横位施紋。底面磨き。内面に輪積み痕跡残る。	①角閃石・長石 ②にぶい褐色
15	縄紋土器 深鉢	口縁部 ～頸部	地紋はＬＲ、ＲＬの単節縄紋を交互に施紋し羽状構成。波状口縁で、波底部に小突起を有する。口縁部には５本１束の櫛歯状工具による平行沈線文を２段廻らす。平行沈線上には同工具先端による連点状刺突。体上部及び頸部には２本１束、３本１束の櫛歯状工具とその上下に１本づつ弧状の沈線を添わせた４列ないし５列構成の波状沈線文を３条廻らせる。	①繊維・角閃石・片岩 ②にぶい褐色
16	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による平行沈線文。沈線文内に丸棒状工具による連続刺突。内面ナデ。	①繊維・角閃石②明褐色
17	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬの単節縄紋と合撚を横位交互施紋し羽状構成をとる。上部に丸棒状工具の先端による連続刺突。内面磨き。	①繊維・片岩②橙色
18	縄紋土器 深鉢	口縁部	半截竹管状工具による平行沈線文。平行沈線内に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・角閃石②暗褐色
19	縄紋土器 深鉢	口縁部	半截竹管状工具による平行沈線文。平行沈線内に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・片岩・チャート ②褐色
20	縄紋土器 深鉢	口縁部	半截竹管状工具による平行沈線文。平行沈線内に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・片岩②橙色
21	縄紋土器 深鉢	口縁部	半截竹管状工具による平行沈線文。平行沈線内に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・角閃石 ②にぶい褐色
22	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁部に縦位の短沈線。半截竹管状工具による平行沈線文。平行沈線文に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・角閃石・雲母 ②褐色
23	縄紋土器 深鉢	口縁部	地紋にＲの無節縄紋を施紋。口縁部半截竹管状工具による横位押引。半截竹管状工具による縦位、横位の平行沈線紋を施紋後、連続爪形刺突。内面ナデ。	①繊維・雲母②にぶい褐色
24	縄紋土器 深鉢	口縁部	波状口縁。半截竹管状工具による平行沈線紋を施紋。沈線紋間に丸棒状工具による連続刺突。内面ナデ。	①繊維・片岩 ②灰黄褐色

表２　SI－40 出土遺物観察表（２）

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
25	縄紋土器 深鉢	口縁部	半截竹管状工具による平行沈線文。平行沈線内に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②赤褐色
26	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による平行沈線文。内面ナデ。	①繊維・角閃石・片岩 ②褐色
27	縄紋土器 深鉢	口縁部	波状口縁。半截竹管状工具による平行沈線文。口唇部に丸棒状工具の側面による連続刺突。内面ナデ。	①繊維・雲母・チャート ②にぶい赤褐色
28	縄紋土器 深鉢	口縁部	地紋にＬＲの単節縄紋を横位施紋。半截竹管状工具による横位、縦位、斜位の平行沈線文。縄先端部による縦位刺突。内面ナデ。	①繊維・角閃石・砂粒 ②にぶい赤褐色
29	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による横位、斜位の平行沈線文。内面磨き。	①繊維・片岩 ②にぶい黄褐色
30	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による斜位の平行沈線文。内面ナデ。	①繊維・雲母・片岩 ②にぶい橙色
31	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋にＬＲの単節縄紋を横位施紋。頸部に半截竹管状工具による波状沈線文。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②暗赤褐色
32	縄紋土器 深鉢	胴部	コンパス紋。内面磨き。	①繊維・角閃石 ②にぶい赤褐色
33	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁部に小突起。口縁部直下に細隆帯を貼付。ＬＲの単節縄紋を器面に横位施紋、細隆帯に押圧。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②褐色
34	縄紋土器 深鉢	胴部	頸部に箍状の隆帯を貼付。器面と隆帯にＲＬの撚糸紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・雲母②灰黄褐色
35	縄紋土器 深鉢	口縁部	口唇部無文。集合沈線紋を施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石②黒褐色
36	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁部に一対の小突起を貼付。集合沈線を横位に施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石②黒褐色
37	縄紋土器 深鉢	胴部	撚糸紋を施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石・石英 ②灰黄褐色
38	縄紋土器 深鉢	胴部	４本１束の櫛歯状工具による波状沈線文。上端は同工具による横位沈線文。内面磨き。	①繊維・角閃石・雲母 ②褐色
39	縄紋土器 深鉢	口縁部	無紋。全面磨き。	①繊維・角閃石・雲母 ②にぶい黄褐色
40	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬの単節縄紋を縦位施紋。縄先端部で刺突。内面磨き。	①繊維・砂粒・雲母 ②暗褐色
41	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＬＲの前々段多条を横位、縦位に施紋し羽状構成。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②にぶい黄褐色
42	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＬＲの単節縄紋を縦位施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石②暗褐色
43	縄紋土器 深鉢	口縁部	波状口縁。波頂部に貼付文。のち、ＬＲの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・片岩 ②にぶい赤褐色
44	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁部に小突起を付す。ＬＲ、ＲＬの単節縄紋を交互縦位施紋し羽状構成をとる。内面磨き。	①繊維・雲母②褐色
45	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＬＲの単節縄紋の縦位施紋。内面磨き。	①繊維・雲母②黒褐色
46	縄紋土器 深鉢	胴部	ＬＲ、ＲＬの単節縄紋を縦位交互施紋し羽状構成をとる。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②にぶい褐色
47	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋にＬＲ、ＲＬの単節縄紋を交互に横位施紋し羽状構成。頸部に半截竹管状工具による沈線文を二条施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石②暗褐色
48	縄紋土器 深鉢	胴部	ＬＲの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石・雲母 ②黒褐色
49	縄紋土器 深鉢	胴部	ＬＬの反撚縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・片岩 ②にぶい黄褐色
50	縄紋土器 深鉢	胴部	２種のＬの附加条縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石 ②にぶい黄橙色
51	縄紋土器 深鉢	胴部	ＬＲの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②にぶい赤褐色

表３　SI－40 出土遺物観察表（３）

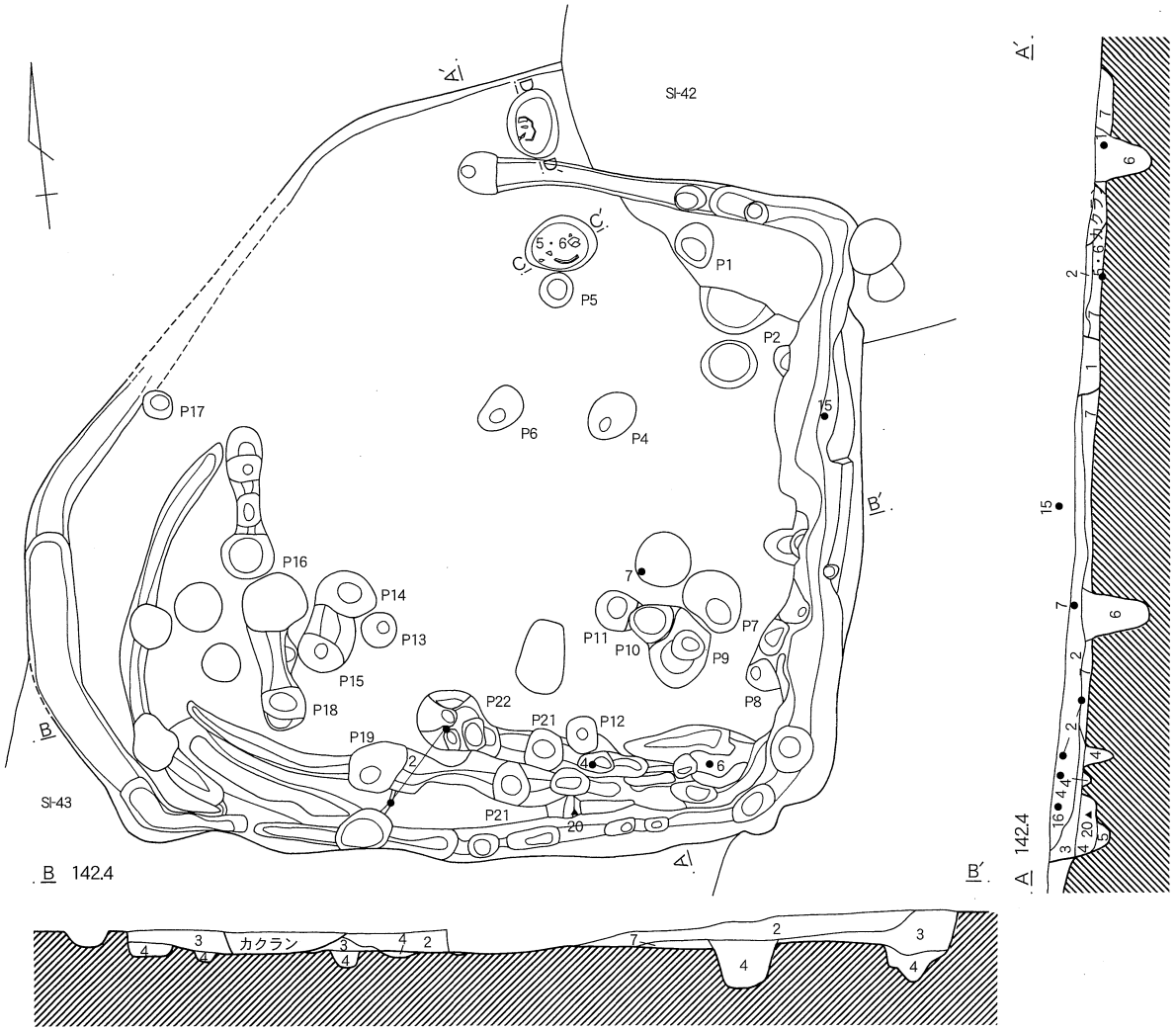
番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
52	縄紋土器 深鉢	胴部	２種の附加条縄紋を施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石②黒褐色
53	縄紋土器 深鉢	胴部	ＬＲの単節縄紋とＲの無節縄紋の合撚を横位施紋。内面磨き。	①繊維・石英②にぶい褐色
54	縄紋土器 深鉢	胴部	Ｒの附加条縄紋を施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石②橙色
55	縄紋土器 深鉢	底部	胴部は２種の附加条縄紋による羽状構成をとる。外面底部と内面磨き。	①繊維・砂粒②にぶい橙色
56	縄紋土器 深鉢	底部	ＬＲの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。上げ底。底面にＬＲの単節縄紋を横位施紋。	①繊維・砂粒②赤褐色
57	土製品 円盤	三箇所に抉り。 直径：4.3 cm　厚さ：1.0 cm　重量：14.46 g		①繊維・角閃石②暗褐色
58	土製品 円盤	二箇所に抉り。側面に摩耗痕跡あり。 長軸：3.6 cm　短軸：2.4 cm　厚さ：1.0 cm　重量：13.31 g		①繊維・片岩②灰黄褐色
59	土製品 円盤	長軸：4.0 cm　短軸：3.7 cm　厚さ：1.0 cm　重量：15.17 g		①繊維・砂粒②褐色
60	石器	石鏃	チャート。　長さ：3.8 cm　幅：2.4 cm　厚さ：0.8 cm　重量：5.47 g	
61	石器	スクレイパー	片側側縁に微細剥離。頁岩。　長さ：6.3 cm　幅：7.2 cm　厚さ：1.3 cm　重量：35.42 g	
62	石器	スクレイパー	頁岩。　長さ：5.3 cm　幅：7.4 cm　厚さ：0.8 cm　重量：24.09 g	
63	石器	スクレイパー	礫面残る。頁岩。　長さ：5.7 cm　幅：8.1 cm　厚さ：1.2 cm　重量：39.95 g	
64	石器	箆状石器	一部摩耗。頁岩。　長さ：9.7 cm　幅：4.6 cm　厚さ：1.2 cm　重量：60.25 g	
65	石器	打製石斧	摩耗痕有。頁岩。　長さ：6.5 cm　幅：7.2 cm　厚さ：2.1 cm　重量：117.95 g	
66	石器	打製石斧	泥岩。　長さ：14.6 cm　幅：6.3 cm　厚さ：2.5 cm　重量：252.87 g	
67	石器	打製石斧	礫面残す。頁岩。　長さ：7.5 cm　幅：5.8 cm　厚さ：1.9 cm　重量：70.90 g	
68	石器	打製石斧	礫面残す。頁岩。　長さ：9.0 cm　幅：4.5 cm　厚さ：1.7 cm　重量：86.96 g	
69	石器	磨製石斧	上端部欠損。敲打痕一部あり。緑色岩類。 長さ：[19.1 cm]　幅：6.3 cm　厚さ：3.7 cm　重量：798.86 g	
70	石器	磨製石斧	刃部欠損。全体的に良く研磨。一部敲打痕。緑色岩類。 長さ：14.2 cm　幅：4.5 cm　厚さ：2.6 cm　重量：267.55 g	
71	石器	磨製石斧	良く研磨される。緑色岩類。 長さ：[4.1 cm]　幅：[3.9 cm]　厚さ：[1.0 cm]　重量：22.75 g	
72	石器	磨製石斧	未製品か。緑色岩類。　長さ：11.3 cm　幅：6.5 cm　厚さ：3.7 cm　重量：315.13 g	
73	石器	凹石／磨石	表裏面及び側面に摩耗痕。安山岩。 長さ：10.1 cm　幅：8.7 cm　厚さ：3.6 cm　重量：458.74 g	
74	石器	磨石／敲石	表裏面に顕著な摩耗痕。のち、表裏・側面で敲打。閃緑岩。 長さ：11.4 cm　幅：7.2 cm　厚さ：3.4 cm　重量：473.52 g	
75	石器	敲石	扁平礫の側縁に剥離痕及び摩耗痕。片岩。 長さ：11.9 cm　幅：5.4 cm　厚さ：1.6 cm　重量：150.97 g	
76	石器	磨石／凹石	表裏面摩耗痕。表面中央・右側面中央に敲打による凹穴。安山岩。 長さ：15.3 cm　幅：8.2 cm　厚さ：5.5 cm　重量：1045.03 g	
77	石器	石皿	全体に摩耗している。片方向からの使用により中央貫通する。緑色岩類。 長さ：48.4 cm　幅：31.2 cm　厚さ：4.5 cm　重量：9,700 g	

SI－41（図 14 ～ 16、表４・５／写真図版５・６・13・14）

位置：調査区南側中央に位置する。SI－42・43 と重複し、前者より旧く、後者より新しい。

形状：長軸 6.70 m、短軸 5.53 mを測り、不整形を呈する。

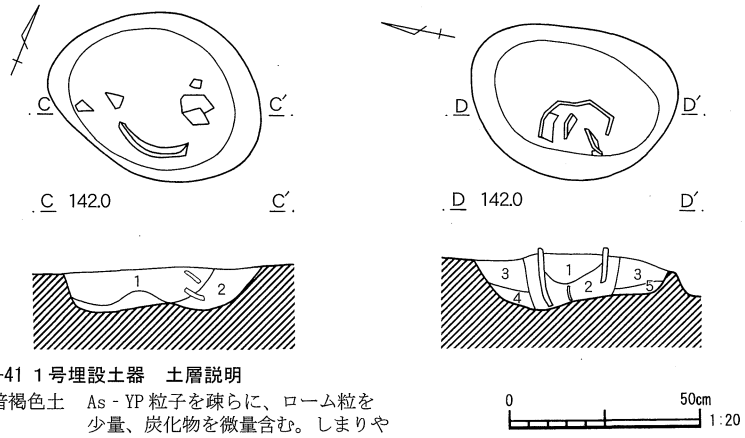
構造：壁面はほぼ垂直に立ち上がり、残存深度は 43 cmを測る。床面は細かい起伏が見られるが概ね平坦で部分的に硬化面を持つ。南壁付近の一部床面では高低差が見られる。壁周溝は北西部を除き計４条検出された。各壁周溝は北側及び東側を共通とし、南側でそれぞれ分岐する。各壁周溝は幅 30 ～ 50 cm、深度 10 ～ 35 cmを測り、箱状あるいはU字状を呈する。底面はほぼ平坦である。ピット



SI-41　土層説明

1 暗褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
2 黒褐色土　As - YP 粒子を多量、ローム粒、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
3 暗褐色土　As - YP 粒子を多量、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。
4 暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
5 褐色土　ロームブロックを多量含む。しまり、粘性ともにやや強い。
6 暗褐色土　ロームブロック、褐色土ブロックを少量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
7 暗褐色土　ローム粒を大量、ロームブロックを多量に含む。しまりやや強く、粘性弱い。

0　2m　1:60



SI-41 1号埋設土器　土層説明

1 暗褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
2 褐色土　As - YP 粒子を微量、ロームブロックを多量、ローム粒を少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

SI-41 2号埋設土器　土層説明

1 暗褐色土　As - YP 粒子を均一に、ローム粒を多量、炭化物を少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
2 暗褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒、ロームブロックを少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
3 暗褐色土　As - YP 粒子を微量、ローム粒少量含む。しまり、粘性ともにやや弱い。
4 暗褐色土　As - YP 粒子を均一に、ローム粒、炭化物を少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
5 褐色土　As - YP 粒子を微量、ロームブロックを少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

図 14　SI-41・1号・2号埋設土器

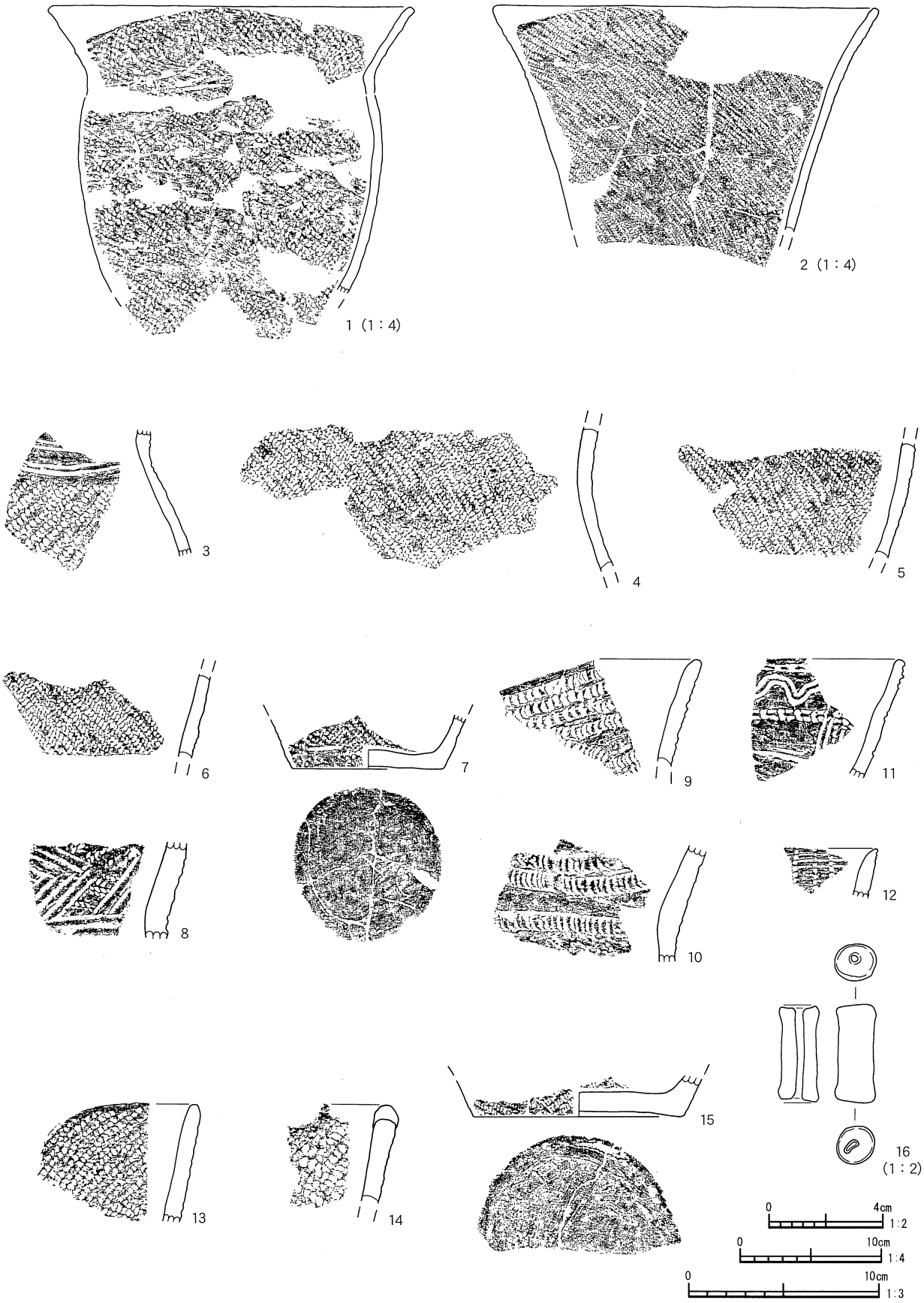


図15　SI-41 出土遺物（1）

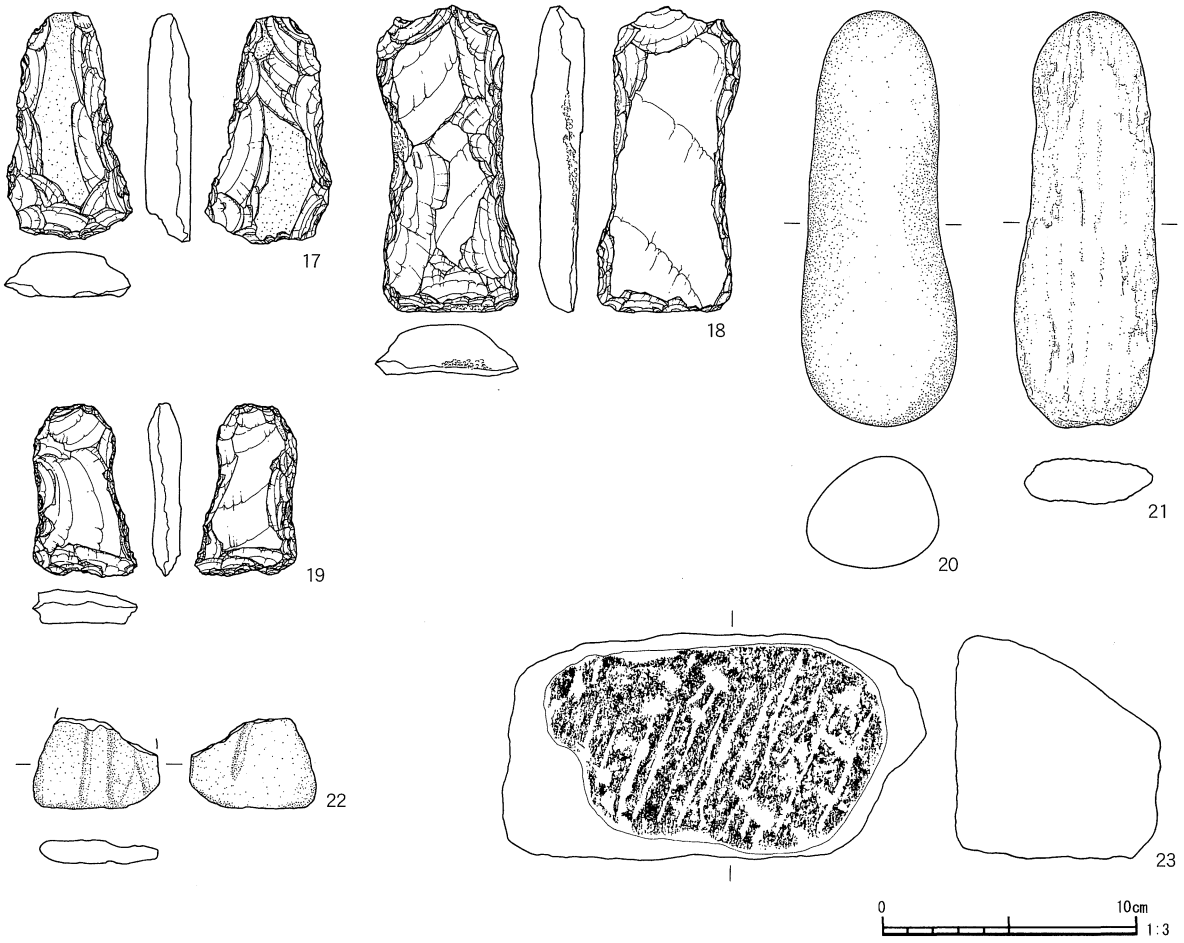


図 16　SI-41 出土遺物（２）

表４　SI－41 出土遺物観察表（１）

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部 ～胴部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。器面は丁寧に磨かれ、やや光沢を帯びる。	①角閃石・雲母・砂礫 ②明赤褐色
2	縄紋土器 深鉢	口縁部 ～胴部	胴部にＲＬの単節縄紋を横位施紋。口縁部直下は原体の違うＲＬの単節縄紋を横位施紋。下位の縄紋結節部が一部残る。内面磨き。	①片岩②赤褐色
3	縄紋土器 深鉢	胴部	頸部に半截竹管状工具による横位沈線区画。頸部以下にＬＲ単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①片岩②にぶい赤褐色
4	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①片岩②にぶい赤褐色
5	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①砂粒②黒褐色
6	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①砂粒②黒褐色
7	縄紋土器 深鉢	底部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。底部直上は横方向のミガキ。内面磨き。	①片岩・角閃石②褐色
8	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による平行沈線を施紋。ＲＬの単節縄紋を２条を使った撚糸紋を充填施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石②暗灰黄色
9	縄紋土器 深鉢	口縁部	半截竹管状工具による押引。内面磨き。	①繊維・砂粒②褐色
10	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による押引。内面磨き。	①繊維・片岩・角閃石 ②灰黄褐色
11	縄紋土器 深鉢	口縁部	単沈線による波状、横位施文。横位施紋部に等間隔刺突文。	①繊維・砂粒②にぶい褐色

表５　SI－41 出土遺物観察表（２）

番号	種別／　器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
12	縄紋土器 深鉢	口縁部	口端部に細かい丸棒状工具による縦位刺突。半截竹管状工具による横位の集合沈線。内面磨き。	①繊維・角閃石・石英・雲母②橙色
13	縄紋土 深鉢	口縁部	口縁部直下はＬＲの単節縄紋を横位施紋。胴部下半にＲＬの単節縄紋を横位施紋し、羽状構成。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②暗赤褐色
14	縄紋土器 深鉢	口縁部	口端部に突起を貼付。ＬＲ、ＲＬの単節縄紋を横位施紋し、羽状構成。内面磨き。	①繊維・角閃石②明赤褐色
15	縄紋土器 深鉢	底部	胴部にＬＲ、ＲＬの単節縄紋を施紋し、羽状構成。内面磨き。	①片岩・石英②明赤褐色
16	土製品 垂飾具ヵ	長さ：3.4 cm　幅：1.4 cm　厚さ：1.3 cm　重量：7.55 g 中央長軸方向に孔（直径２～３mm）が貫通。		①雲母②にぶい褐色
17	石器	打製石斧	撥形。緑色岩類。　長さ：8.9 cm　幅：5.0 cm　厚さ：1.8 cm　重量：86.01 g	
18	石器	打製石斧	撥形。緑色岩類。　長さ：12.0 cm　幅：5.3 cm　厚さ：2.0 cm　重量：165.65 g	
19	石器	打製石斧	撥形。泥岩。　長さ：6.8 cm　幅：4.0 cm　厚さ：2.3 cm　重量：40.27 g	
20	石器	磨石	砂岩。　長さ：16.4 cm　幅：6.2 cm　厚さ：4.4 cm　重量：655.63 g	
21	石器	棒状礫	片岩。　長さ：16.5 cm　幅：5.6 cm　厚さ：1.8 cm　重量：277.47 g	
22	石器	砥石	砂岩。　有溝砥石。表３条、裏１条の研磨痕。 長さ：(3.6) cm　幅：5.0 cm　厚さ：1.1 cm　重量：18.82 g	
23	石器	砥石	砂岩。　有溝砥石。片面に一方向に 13 条の研磨痕。 長さ：16.8 cm　幅：9.0 cm　厚さ：8.1 cm　重量：1231.86 g	

は 17 基検出され、そのうちＰ１・８～10・14・15 は主柱穴と考えられる。南壁周溝内にピット状の掘り込みが見られたが、SI－40 のような明確な対ピットは検出できなかった。本住居跡では埋設土器が２基検出され、うち２号埋設土器は内周する壁周溝より外側に位置している。１号埋設土器は長径 58 cm、短径 43 cm、深度 10 cmの楕円形状の掘り込みに埋設されている。土器が散在する状態であったが正位に埋設された痕跡が見られた。２号埋設土器は長径 55 cm、短径 40 cm、深度 14 cmの楕円形状の掘り込みに埋設されている。１号埋設土器と同様に正位に埋設されており、残存状態は本遺構の方が良好であった。ともに埋設土器内から焼土は認められていない。炉跡は検出されなかった。

遺物：縄紋前期中葉黒浜式から前期後半諸磯ａ式が少量ながら出土しているが、主体を占めるのは諸磯ａ式である。住居南側に遺物が集中し、北側では希薄になる傾向が窺える。８～15 は前期中葉期の土器群であり、上方で重複するSI－43 からの流れ込みとも考えられる。16 の土製品は南壁際覆土中層から出土している。中央長軸に平行して孔が貫通しており、垂飾具を連想させる。

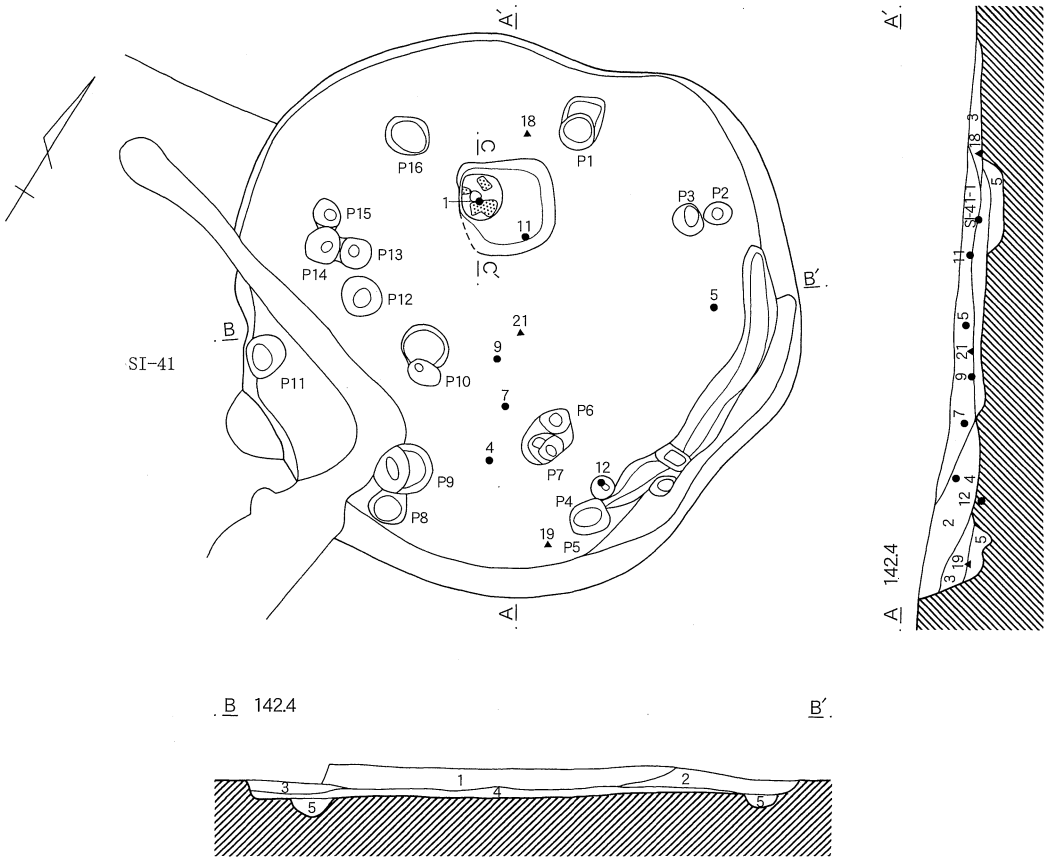
所属時期：覆土と出土遺物から縄紋時代前期後半と考えられる。

SI－42（図 17・18、表６／写真図版５・６・14）

位置：調査区の中央北側に位置する。SI－41 と重複し、本遺構が新しい。

形状：長径 4.52 m、短径 4.42 mを測り、円形を呈する。

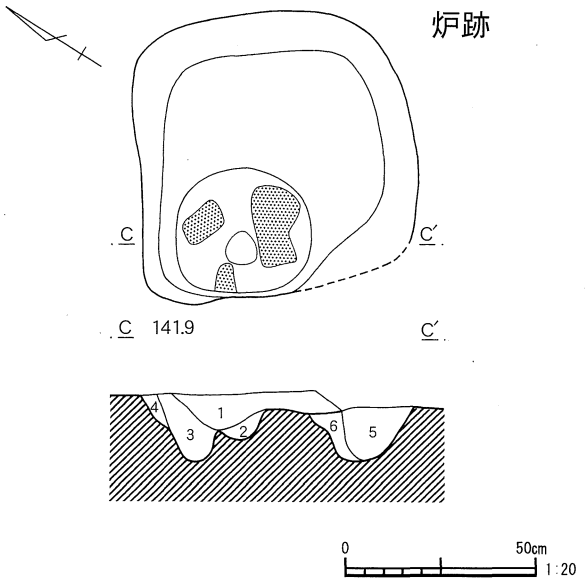
構造：壁面はやや急な傾斜を持ちながら立ち上がり、残存深度 52 cmを測る。床面は起伏が見られるものの、概ね平坦である。重複するSI－41 の壁周溝部分は床面を整形する際に同等の固さにしたためか、壁周溝内覆土は固くしまっている状態であった。壁周溝は東壁の一部に見られ、幅 25 cm、深度 10 cmを測り、断面箱状を呈する。ピットは壁寄りに 16 基検出されたが深度が一定しない。炉は地床炉で、中央やや北寄りに位置する。一辺 73 cm、残存深度５～18 cmを測り、緩やかに立ち上がる断面皿状の掘り込みに、焼土・炭化物が多量に検出された。南西隅では被熱して赤化したローム面が



0 2m 1:60

SI-42　土層説明

1 黒褐色土　As－YP粒子を均一に含み、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。
2 黒褐色土　As－YP粒子を疎らに含み、径１cmの褐色土ブロックを多量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。
3 暗褐色土　ローム粒、径３cmの褐色土ブロックを多量、ロームブロックを微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
4 褐色土　ロームブロックを多量、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。
5 暗褐色土　ローム粒を大量、ロームブロック、炭化物を微量含む。



SI-42 炉跡　土層説明

1 黒褐色土　As－YP粒子を疎らに、焼土粒、焼土ブロック、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性やや弱い。
2 黒褐色土　焼土を少量、ロームブロックを微量含む。しまり強く、粘性弱い。
3 黒褐色土　As－YP粒子を均一に、ローム粒を多量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。
4 黒褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
5 暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性ともにやや強い。
6 暗褐色土　径３cmの褐色土ブロックを多量に含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

図17　SI-42・炉跡

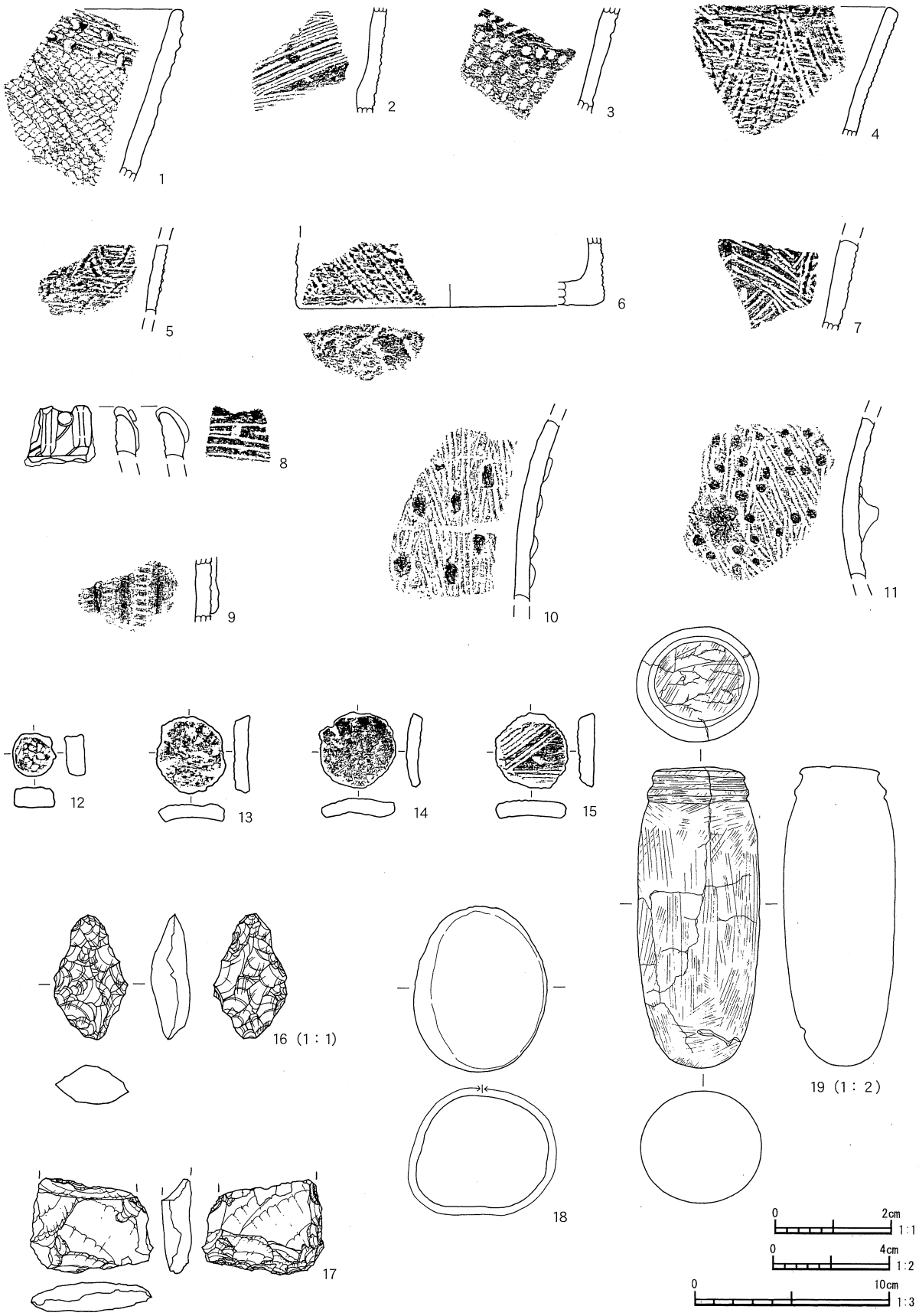


図 18　SI-42 出土遺物

表６　SI－42 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。口縁部に半截竹管状工具による横位沈線を施し、沈線内に連続爪形刺突。内面磨き。	①繊維・砂粒 ②にぶい黄褐色
2	縄紋土器 深鉢	胴部	集合沈線による文様施紋。内面磨き。	①繊維・砂粒 ②にぶい黄褐色
3	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具の凸面による列点文。内面磨き。	①繊維・角閃石・砂粒 ②黒褐色
4	縄紋土器 深鉢	口縁部	横位の集合沈線。浮線文を貼り付け、上面に半截竹管状工具による押引。内面磨き。	①角閃石・雲母 ②灰黄褐色
5	縄紋土器 深鉢	胴部	横位の集合沈線。浮線文を貼り付け、上面を半截竹管状工具による押引。内面磨き。	①角閃石②灰黄褐色
6	縄紋土器 深鉢	底部	横位の集合沈線。浮線文を貼り付け、上面を半截竹管状工具のよる押引。内面磨き。	①角閃石・砂粒②暗褐色
7	縄紋土器 深鉢	胴部	半截竹管状工具による文様施紋。のち、縦位の浮線紋を貼付け、押引。内面磨き。	①片岩 ②黒褐色
8	縄紋土器 深鉢	口縁部	地紋に横位の集合沈線。口端部に貼付文。	①片岩 ②黒褐色
9	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋に横位の集合沈線。のち、縦位に貼付文。内面磨き。	①雲母 ②灰黄褐色
10	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋に縦位の集合沈線を矢羽状に施紋。のち、瘤状貼付文。	①片岩 ②褐色
11	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋に縦位の集合沈線を矢羽状に施紋。のち、瘤状貼付文。	①角閃石・雲母 ②灰褐色
12	土製品 円盤	直径：2.2 cm、厚さ：1.0 cm、重量：4.84g		①角閃石・雲母 ②灰黄褐色
13	土製品 円盤	長軸：4.0 cm、短軸：3.4 cm、厚さ：0.7 cm、重量：10.27g		①雲母 ②褐色
14	土製品 円盤	長軸：4.0 cm、短軸：3.8 cm、厚さ：0.7 cm、重量：9.84g		①雲母 ②褐灰色
15	土製品 円盤	直径 3.8 cm、厚さ：0.8 cm、重量：13.06g		①砂粒 ②黒褐色
16	石器	石鏃	一部摩耗。黒曜石。　長さ：2.1 cm　幅：1.3 cm　厚さ：0.7 cm　重量：1.74 g	
17	石器	打製石斧	刃部のみ検出。頁岩。　長さ：4.9 cm　幅：6.2 cm　厚さ：1.5 cm　重量：55.35 g	
18	石器	磨石	全体に摩耗痕。礫岩。　長さ：8.6 cm　幅：6.9 cm　厚さ：5.3 cm　重量：461.17 g	
19	石製品	石棒	全体に良く研磨。上部に２条の溝。凝灰岩。 長さ：10.4 cm　幅：4.2 cm　厚さ：3.8 cm　重量：203.90 g	

みられ、土器が据えられるような形状を呈している。

遺物：縄紋前期中葉黒浜式から前期後半諸磯ａ～ｃ式の土器が大量に出土しているが、主体を占めるのは諸磯ｃ式である。遺物分布は偏りなく全体的に広がり、覆土下層に諸磯ｃ式の土器が多く、上層は諸磯ｃ式以前の土器が多い傾向にある。12 ～ 15 の土製品は上層より出土している。また、多量の黒曜石の小剥片が南東壁付近の覆土中層から床面にかけて纏まって出土しているが、製品は見られなかった。南壁床面５cm直上では 19 の石棒が横位の状態で検出されている。

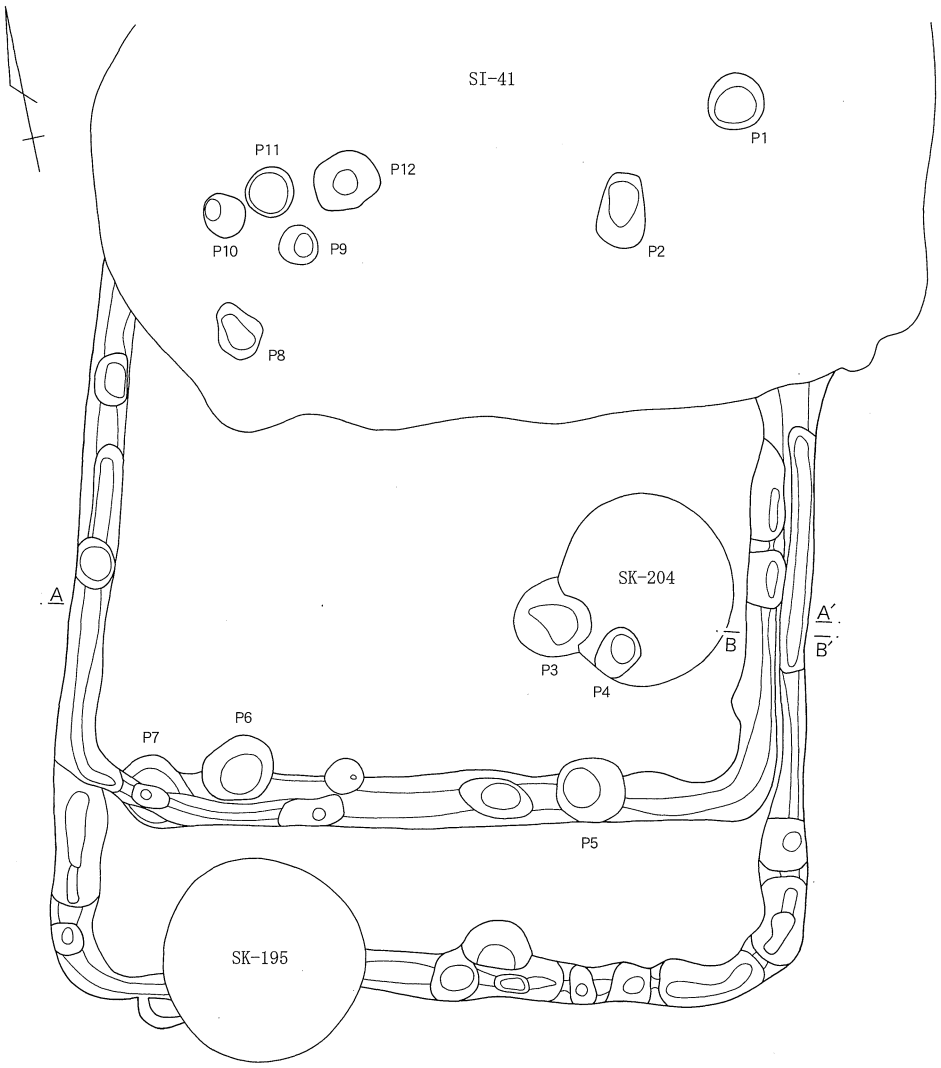
所属時期：出土遺物から縄紋時代前期後半と考えられる。

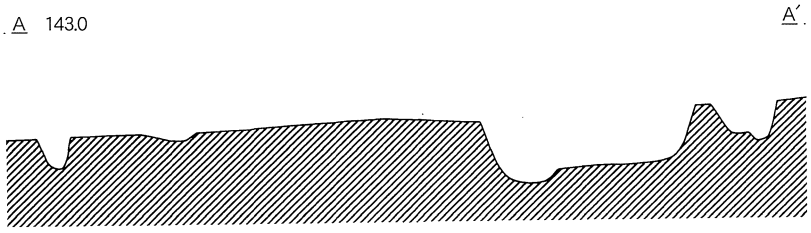
SI－43（図 19・20、表７／写真図版５・15）

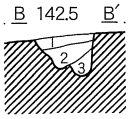
位置：調査区中央南側に位置する。SI－41、SK－195・204、Ｐ５と重複し、本遺構が最も旧い。

形状：北側一部が重複しており、推定で長軸 5.90 ｍ、短軸 5.83 ｍを測り、隅丸長方形を呈する。

構造：周溝のみの検出のため壁面は見られず、地山と同レベルに床面がある。床面は概ね平坦であ







SI-43 周溝　土層説明

1 暗褐色土　As-YP 粒子を均一に、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

2 暗褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒をを多量含む。しまりやや強く、粘性弱い。

3 褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

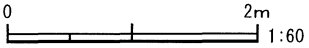


図 19　SI-43

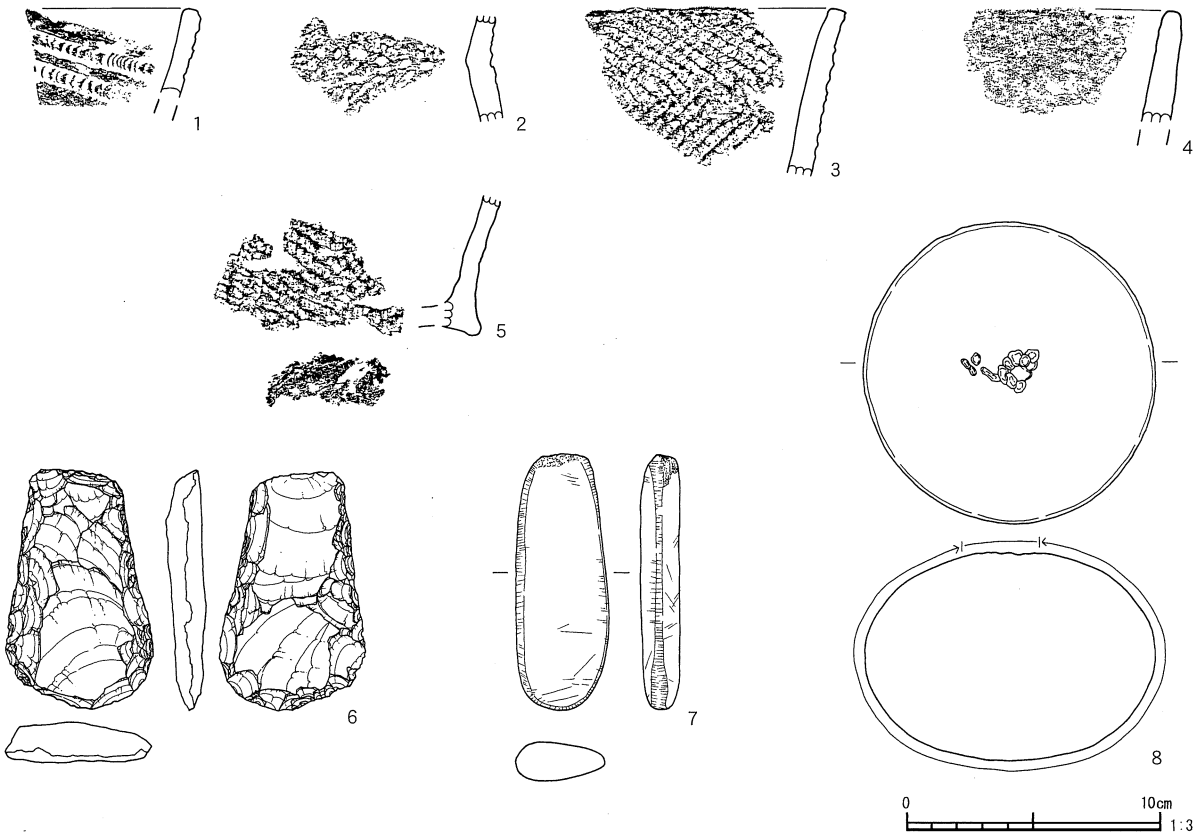


図 20　SI-43 出土遺物

表 7　SI－43 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁部に半截竹管状工具による押引。内面磨き。	①繊維・角閃石・雲母・長石②明赤褐色
2	縄紋土器 深鉢	胴部	頸部に半截竹管状工具の凸面による連続刺突。内面磨き。	①繊維・片岩②灰褐色
3	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＬＲ、ＲＬの単節縄紋を横位施紋し羽状構成。内面磨き。	①繊維・角閃石・雲母 ②暗褐色
4	縄紋土器 深鉢	口縁部	無紋。内外面ともに磨き。	①繊維・片岩②にぶい褐色
5	縄紋土器 深鉢	底部	胴部にＲＬの単節縄紋を横位施紋。底部上げ底。	①繊維・片岩 ②にぶい赤褐色
6	石器	打製石斧	砂岩。　長さ：9.4 cm　幅：5.8 cm　厚さ：1.4 cm　重量：90.32 g	
7	石器	磨石	安山岩。　長さ：10.1 cm　幅：3.7 cm　厚さ：1.6 cm　重量：97.61 g	
8	石器	磨石／敲石	全体に摩耗痕。中央に敲打痕。砂岩。 長さ：11.9 cm　幅：11.5 cm　厚さ：8.2 cm　重量：1620.30 g	

るが細かい起伏が多い。壁周溝は 2 条確認され、西側壁周溝は共有する。外周する壁周溝は幅 20 ～ 40 cm、深度 25 ～ 30cm で、断面箱状を呈する。内周する壁周溝は幅 23 ～ 40 cm、深度 20 ～ 25 cmで断面箱状を呈する。ピットはSI－41 と重複するものを含め 12 基検出された。Ｐ１～３・５～７・12 は主柱穴と考えられる。周溝内にはピット状の掘り込みが見られるものの、SI－40 のように南壁中央に入口施設を想定させるようなピットは検出されなかった。

遺物：少量ながら壁周溝内やピット内で縄紋前期中葉黒浜式、有尾式の土器が出土している。

所属時期：出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。

（２）埋設土器

南側調査区において単独の埋設土器が１基検出された。本報告では竪穴住居跡内の検出ではないため単独の埋設土器として掲載したが、SI-43のように周溝のみの検出に留まる竪穴住居跡もあることから、隣接するＰ７を包括する住居跡の存在が推定される。また、後世の倒木により攪拌されていることから、倒木は縄紋前期中葉以降のものと考えられる。

単独埋設土器（図21・表８/写真図版７・15）

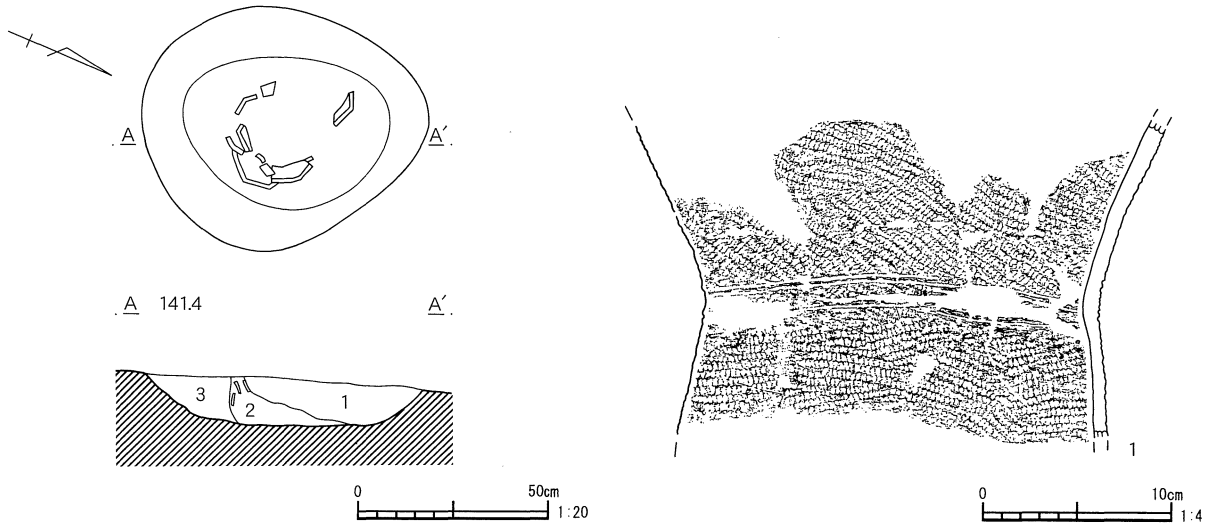
位置：調査区の南中央に位置する。Ｐ７が東側に隣接している。

形状：長軸0.75ｍ、短軸0.65ｍを測り、円形を呈する。

構造：壁面は緩やかな傾斜を持ちながら立ち上がる皿状を呈し、残存深度は14㎝を測る。

遺物：１は1/3がほぼ原位置で検出されたが、そのほかは倒木の影響で散在している状態であった。覆土中で検出された土器片はすべて１の同一個体であると考えられる。

所属時期：出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。



単独埋設土器　土層説明

1 黒褐色土　As-YP粒子を疎らに、ローム粒を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。

2 黒褐色土　As-YP粒子を疎らに、ロームブロックを多量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。

3 暗褐色土　As-YP粒子を疎らに、ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまり、粘性ともに弱い。

図21　単独埋設土器

表８　単独埋設土器観察表

番号	種別/器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋にＬＲの単節縄紋を縦位施紋。頸部に半截竹管状工具による平行沈線を廻らせる。内面磨き。	①繊維・角閃石・砂粒 ②橙色

（３）溝　跡（SD）

溝跡は総計２条確認された。平行して走向しているため２条１対になると考えられる。残存状態が悪いため、時期判別の根拠に乏しい。

SD－02・03（図４・22、表９・10/ 写真図版 16）

位置：調査区中央北側に位置する。

形状:SD－02 は全長 13.4 m、SD－03 は全長 17.2 mを測り、主軸方位はともにN－44°－Eである。

構造：ともに断面皿状を呈し、底面は起伏が激しい。残存深度はともに３㎝程度である。

遺物:覆土中より縄紋時代前期中葉黒浜式、前期後半諸磯ａ式、中期後半加曽利Ｅ式（SD－02 －１・２、SD－03 －1）を主体として、大量の礫（径 10cm）と少量の陶器が検出されている。

所属時期：不明。近世以降と思われる。

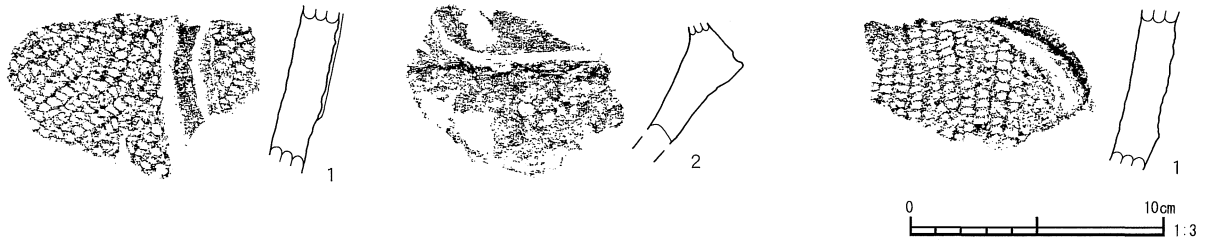


図 22　SD-02・03 出土遺物

表９　SD－02 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・ｇ）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋にＬＲの単節縄紋を横位施紋。隆帯によるＳ字状状文。隆帯側縁を縁取る。内面磨き。輪積み接合断面部に刻み。	①角閃石・長石②明黄褐色
2	縄紋土器 深鉢	胴部	口縁部に丸棒状工具による沈線区画と側面圧痕。全面磨き。	①角閃石②明赤褐色

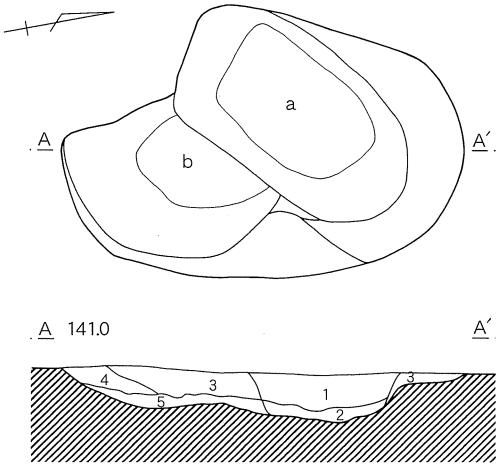
表 10　SD－03 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・ｇ）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	隆帯で口縁部文様帯を構成。区画内にＬＲの単節縄紋を横位充填施紋。その後、沈線で隆帯を縁取る。	①角閃石・片岩②橙色

（４）土坑・ピット（SK・Ｐ）

土坑は総計 13 基検出され、主に調査区南西側に集中して分布している。形状は円形と隅丸長方形を主体とする。帰属時期は縄紋時代（SK－189 ～ 191、196 ～ 199、202 ～ 204）と中世以降（SK－192 ～ 195、200 ～ 201）に大別される。縄紋時代の土坑は基本的に固く締まる暗褐色土あるいはしまりのない黒褐色土を覆土とする。SK－202 はしまりのない黒褐色土の覆土であり、縄紋時代中期後半（加曽利Ｅ式期）の土器片が大量に出土している。SI－43 と重複するSK－204 では、縄紋時代前期中葉黒浜式期の鉢形土器が底面に伏した状態で検出された。中世以降の土坑はロームブロックを含むしまりのない黒褐色土を覆土としており、出土遺物は微量の陶器類と縄紋土器が検出されるにとどまった。

ピットは総計 10 基検出され、しまりの強い暗褐色土を覆土とする。出土遺物は縄紋土器を少量検出している。Ｐ７は残存深度 70 ㎝を測るもので調査当初単独のピットとして捉えていたが、隣接する埋設土器との関係を考慮すると、竪穴住居跡の柱穴の可能性も考えられる。



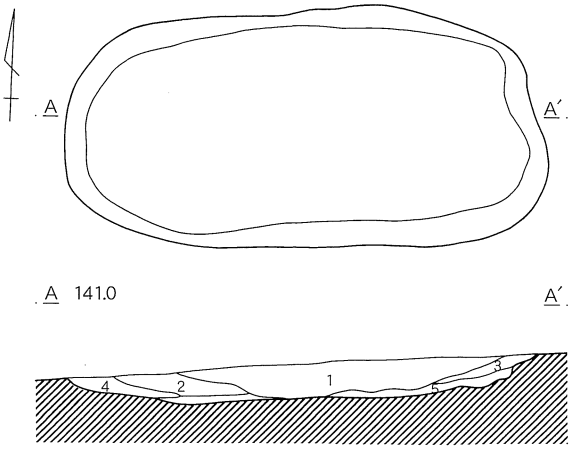
SK-189　土層説明

1 黒褐色土　As - YP 粒子を均一に、ローム粒少量、ロームブロック、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

2 暗褐色土　ローム粒、As - YP 粒子を多量、ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

3 褐色土　ロームブロックを多量、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

4 黄褐色土　黒褐色土ブロックを含む。しまり強く、粘性弱い。



SK-190　土層説明

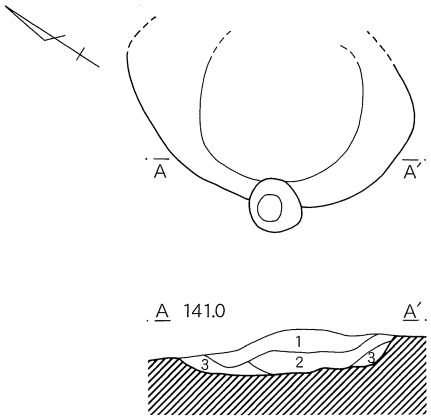
1 黒褐色土　As - YP 粒子均一に、ローム粒、ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

2 黒褐色土　As - YP 粒子疎らに、ローム粒微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。

3 黒褐色土　As - YP 粒子均一に、ローム粒を多量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

4 暗褐色土　As - YP 粒子疎らに、ローム粒少量、ロームブロック、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

5 暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロック、炭化物を微量含む。しまり強い。粘性弱い。

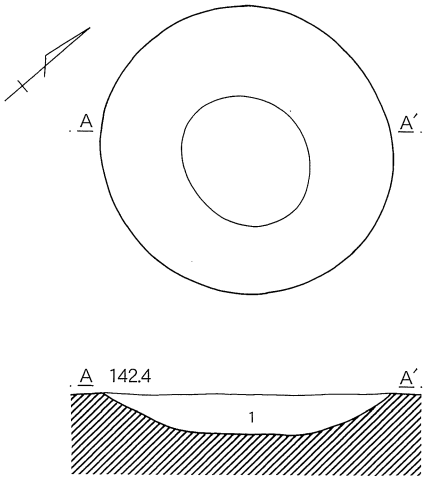


SK-191　土層説明

1 黒褐色土　耕作土。しまり、粘性ともになし。

2 黒褐色土　As - YP 粒子、ローム粒を多量に、炭化物を少量、焼土を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

3 褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ロームブロック、ローム粒を多量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。



SK-192　土層説明

1 黒褐色土　径 1 ～ 5cm のロームブロックを多量に、ローム粒少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。

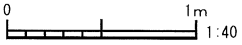


図 23　SK-189 ～SK-192

SK－189（図23・26、表11/写真図版15）

位置：調査区北西に位置する。２基重複しており、新しい方を「ａ」、旧い方を「ｂ」とした。

形状：SK－189 ａは長軸1.38ｍ、短軸0.68ｍ、SK－189 ｂは長軸0.90ｍ、短軸0.74ｍを測り、ともに楕円形を呈する。

構造：SK－189 ａ・ｂともに急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、SK－189 ａの残存深度は0.31ｍ、SK－189 ｂは0.21ｍを測る。底面は平坦である。

遺物：SK－189 ａ覆土上層から中層にかけて縄紋前期中葉黒浜式が主体となり、前期後半諸磯ａ式（１）や中期後半加曽利ＥⅢ式（２・３）が出土している。また、黒曜石剥片が少量検出されている。

所属時期：SK－189 ａ・ｂともに覆土の状態と出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。

SK－190（図23・26、表12/写真図版７・15）

位置：調査区北西に位置する。

形状：長軸2.50ｍ、短軸1.27ｍを測り、平面形は隅丸方形を呈する。

構造：壁は垂直気味に立ち上がる箱状を呈し、底面は平坦である。残存深度23㎝を測る。

遺物：覆土中から縄紋中期後半加曽利ＥⅢ式を主体として、前期中葉黒浜式が出土している。石器では黒曜石製の剥片が１点確認されている。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代中期後半と考えられる。

SK－191（図23・26、表13/写真図版15）

位置：調査区西側に位置する。

形状：短軸0.78ｍで、平面形は残存部から楕円形を呈すると推測される。

構造：南壁は急な傾斜、北壁は緩やかな傾斜で立ち上がる箱状を呈し、残存深度23㎝を測る。

遺物：縄紋前期中葉黒浜式と前期後半の諸磯ａ式が微量ながら検出されている。１・２はともに磨石、あるいは土器製作時における研磨具と考えられる。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。

SK－192（図23/写真図版７）

位置：調査区南側、SI－40の南側に位置する。

形状：長軸1.52ｍ、短軸1.50ｍで、平面形は楕円形を呈する。

構造：壁面は緩やかな傾斜を持ちながら立ち上がる皿状を呈し、残存深度は22㎝を測る。

遺物：検出されなかった。

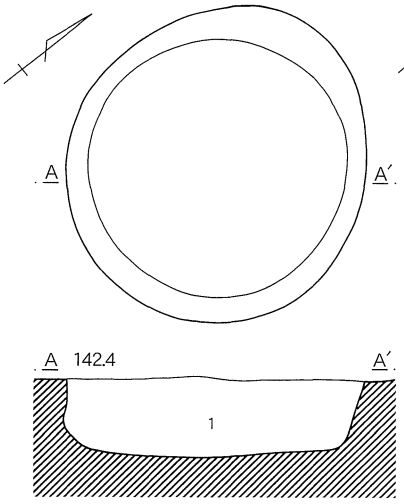
所属時期：覆土の状態から中世以降と考えられる。

SK－193（図24/写真図版７）

位置：調査区南側、SI－40の南側に位置する。

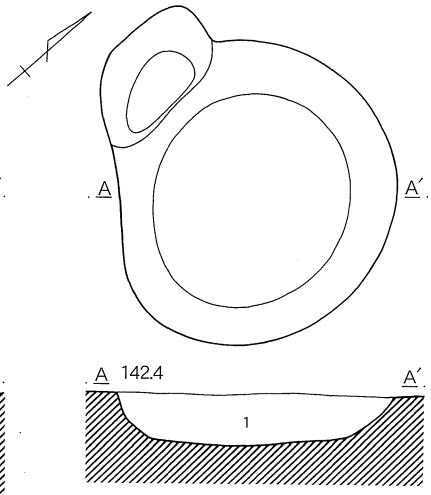
形状：長軸1.71ｍ、短軸1.47ｍで、平面形は楕円形を呈する。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は42㎝を測る。



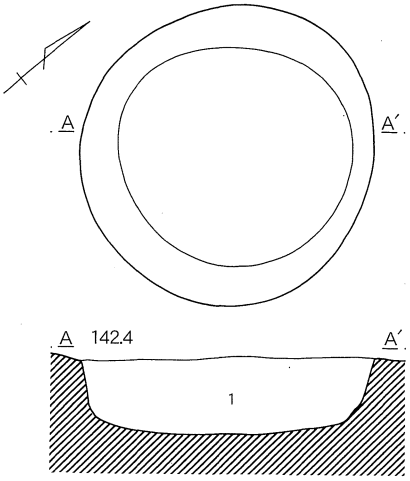
SK-193　土層説明

1 黒褐色土　径1～5cmのロームブロックを多量、ローム粒を少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。



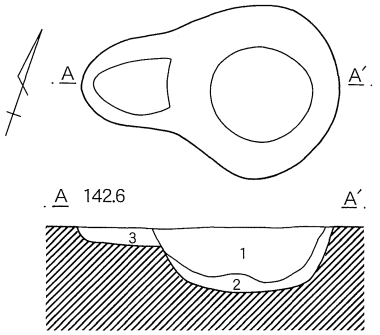
SK-194　土層説明

1 黒褐色土　径1～5cmのロームブロックを多量に、ローム粒少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。



SK-195　土層説明

1 黒褐色土　径1～5cmのロームブロックを多量に、ローム粒少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。

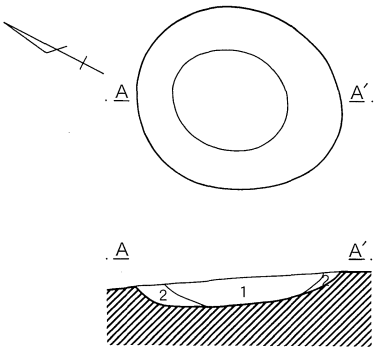


SK-196　土層説明

1 黒褐色土　As－YP粒子を均一に、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

2 褐色土　径1～3cmのロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性やや強い。

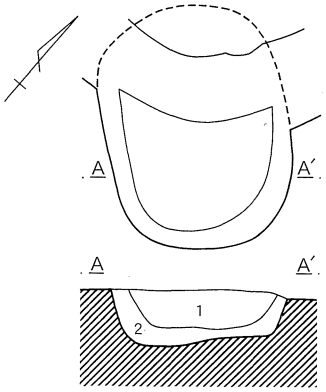
3 暗褐色土　As－YP粒子を疎らに、ローム粒微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。



SK-197　土層説明

1 暗褐色土　As－YP粒子を疎らに、ローム粒、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性やや弱い。

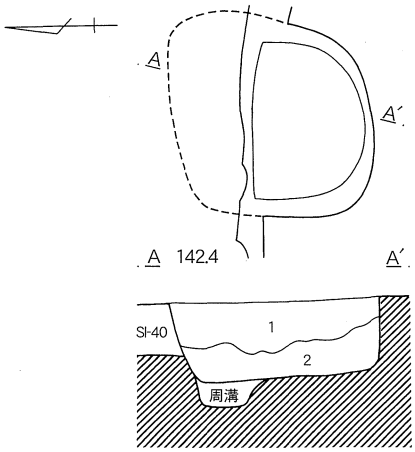
2 褐色土　As－YP粒子、ロームブロックを微量含む。しまり強く、粘性やや弱い。



SK-198　土層説明

1 暗褐色土　As－YP粒子を均一に、炭化物を少量、ローム粒を微量含む。しまり強く、粘性やや弱い。

2 暗褐色土　As－YP粒子を疎らに、ロームブロックを多量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。



SK-199　土層説明

1　黒褐色土　As－YP粒子疎らに、ローム粒を多量、ロームブロック、炭化物を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

2　暗褐色土　As－YP粒子疎らに、ロームブロックを少量、ローム粒、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

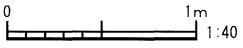


図24　SK-193～SK-199

遺物：縄紋前期黒浜式、中期後半加曽利ＥⅢ式の土器片が少量検出されたが、覆土が縄紋時代の遺構と相違することから流入したものと思われる。

所属時期：覆土の状態から中世以降と考えられる。

SK－194（図 24・26、表 14/ 写真図版７・15）

位置：調査区南側、SI－40・43 の南側に位置する。Ｐ４と重複関係にあり、本遺構が新しい。

形状：長軸 1.61 m、短軸 1.47 mで、平面形は楕円形を呈する。

構造：壁面はやや緩やかな傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は 42 cmを測る。

遺物：覆土中より縄紋前期中葉黒浜式、前期後半諸磯ａ式、中期後半加曽利ＥⅢ式の土器が検出されたが、覆土が縄紋時代の遺構と相違することから流入したものと思われる。１は器面を丁寧に磨いた無紋土器である。

所属時期：覆土の状態から中世以降と考えられる。

SK－195（図 24、表 15/ 写真図版７・16）

位置：調査区南側、SI－43 と重複し、本遺構が新しい。

形状：長軸 1.61 m、短軸 1.60 mで、平面形は楕円形を呈する。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は 40 cmを測る。

遺物：縄紋前期中葉黒浜式、前期後半諸磯ａ式、中期後半加曽利ＥⅢ式、晩期粗製土器（１）が覆土中より検出されたが、覆土が縄紋時代の遺構と相違することから流入したものと思われる。

所属時期：覆土の状態から中世以降と考えられる。

SK－196（図 24）

位置：調査区南側、SI－40 の西側に位置する。

形状：長軸 1.38 m、短軸 0.96 mで、平面形は楕円形を呈する。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は 36 cmを測る。

遺物：縄紋前期黒浜式の土器が覆土中から微量ながら検出されている。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。

SK－197（図 24・26、表 16/ 写真図版 16）

位置：調査区南側、SI－43 の南側に位置する。

形状：長軸 1.68 m、短軸 0.97 mで、平面形は楕円形を呈する。

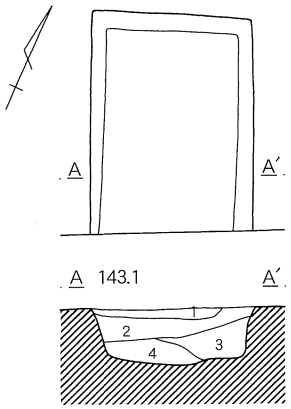
構造：壁面は緩やかな傾斜を持ちながら立ち上がる皿状を呈し、残存深度は 22 cmを測る。

遺物：器面に成形時の輪積み痕跡が残る１を含め、縄紋前期中葉黒浜式の土器が検出されている。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。

SK－198（図 24）

位置：調査区南側に位置する。SI－40 と重複し、本遺構が新しい。



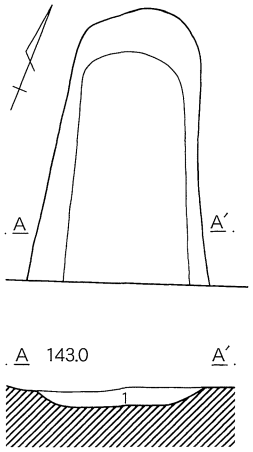
SK-200　土層説明

1 褐灰色砂質土　ローム粒を微量含み、砂利を含む。しまりやや弱く、粘性なし。

2 黒褐色土　ロームブロックを少量含み、ローム粒を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。

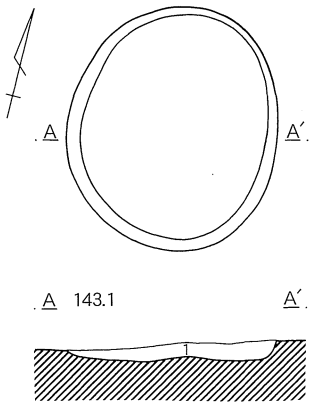
3 黒褐色土　ロームブロックを多量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。

4 暗褐色土　ローム粒、ロームブロックを多量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。



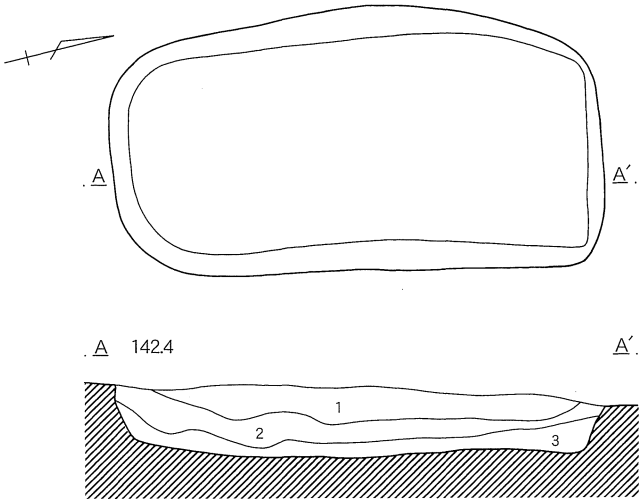
SK-201　土層説明

1 黒褐色土　ロームブロックを少量含み、ローム粒を微量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。



SK-202　土層説明

1 黒褐色土　ロームブロックを少量含み、ローム粒微量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。

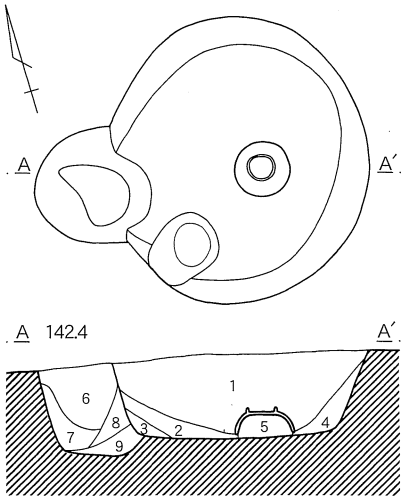


SK-203　土層説明

1 黒褐色土　ローム粒を少量含む。しまりやや弱く、粘性弱い。

2 暗褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。

3 黄褐色土　ローム粒、ロームブロックを大量に含む。しまりやや弱く、粘性弱い。



SK-204　土層説明

1 黒褐色土　As - YP 粒子を均一に、ローム粒を多量、炭化物を少量、ロームブロック、マンガン粒子を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

2 黒褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒、ロームブロックを微量含む。しまり強く、粘性弱い。

3 暗褐色土　ローム粒を微量含む。しまり強く、粘性弱い。

4 暗褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりやや強く、粘性弱い。

5 暗褐色土　ローム粒を微量含む。しまり、粘性ともにやや弱い。

6 暗褐色土　As - YP 粒子疎らに、ローム粒を多量、ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。

7 暗褐色土　As - YP 粒子疎らに、ローム粒、炭化物を少量含む。

8 暗褐色土　As - YP 粒子を疎らに、ローム粒を多量含む。しまりやや強く、粘性弱い。

9 褐色土　ローム粒、ロームブロックを微量含む。しまりやや強く、粘性弱い。

0　1m　1:40

図 25　SK-200 ～SK-204

形状：検出部分では長軸 0.99 m、短軸 0.98 mで、平面形は楕円形と推測される。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は 24 cmを測る。

遺物：縄紋前期中葉黒浜式の土器が覆土中より微量に検出されている。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。

SK－199（図 24・26、表 17/ 写真図版 16）

位置：調査区南側に位置する。SI－40 と重複し、本遺構が新しい。

形状：検出部分では長軸 1.03 m、短軸 0.64 mで、平面形は楕円形と推測される。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は 44 cmを測る。

遺物：縄紋前期後半諸磯ａ式（１）が主体となって、前期中葉黒浜式とともに覆土中より多量に検出されている。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代前期後半と考えられる。

SK－200（図 25・26、表 18/ 写真図版 16）

位置：調査区の南東側、SK－201 の西側、SK－202 の南側に位置する。

形状：検出部分では長軸 1.18 m、短軸 0.86 mで、平面形は長方形と推測される。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がり、残存深度は 40 cmを測る。

遺物：縄紋中期後半加曽利ＥⅢ式（１）や前期中葉黒浜式（２）と磨石が１点覆土中より検出されているが、覆土が縄紋時代の遺構と相違しているため、流入したものと思われる。

所属時期：覆土の状態から中世以降と考えられる。

SK－201（図 25/ 写真図版８）

位置：調査区の南東側、SK－200 の東側に位置する。

形状：検出部分では長軸 1.45 m、短軸 0.97 mで、平面形は隅丸長方形と推測される。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる皿状を呈し、残存深度は 10 cmを測る。

遺物：縄紋中期後半加曽利ＥⅢ式の土器片が微量検出されているが、覆土が縄紋時代の遺構と相違しているため、流入したものと思われる。

所属時期：覆土の状態から中世以降と考えられる。

SK－202（図 25）

位置：調査区の南東側、SK－200 の北側に位置する。

形状：長軸 1.30 m、短軸 1.10 mで、平面形は楕円形を呈する。

構造：壁面は緩やかな傾斜を持ちながら立ち上がる皿状を呈し、残存深度は 10 cmを測る。

遺物：検出されなかった。

所属時期：覆土の状態から中世以降と考えられる。

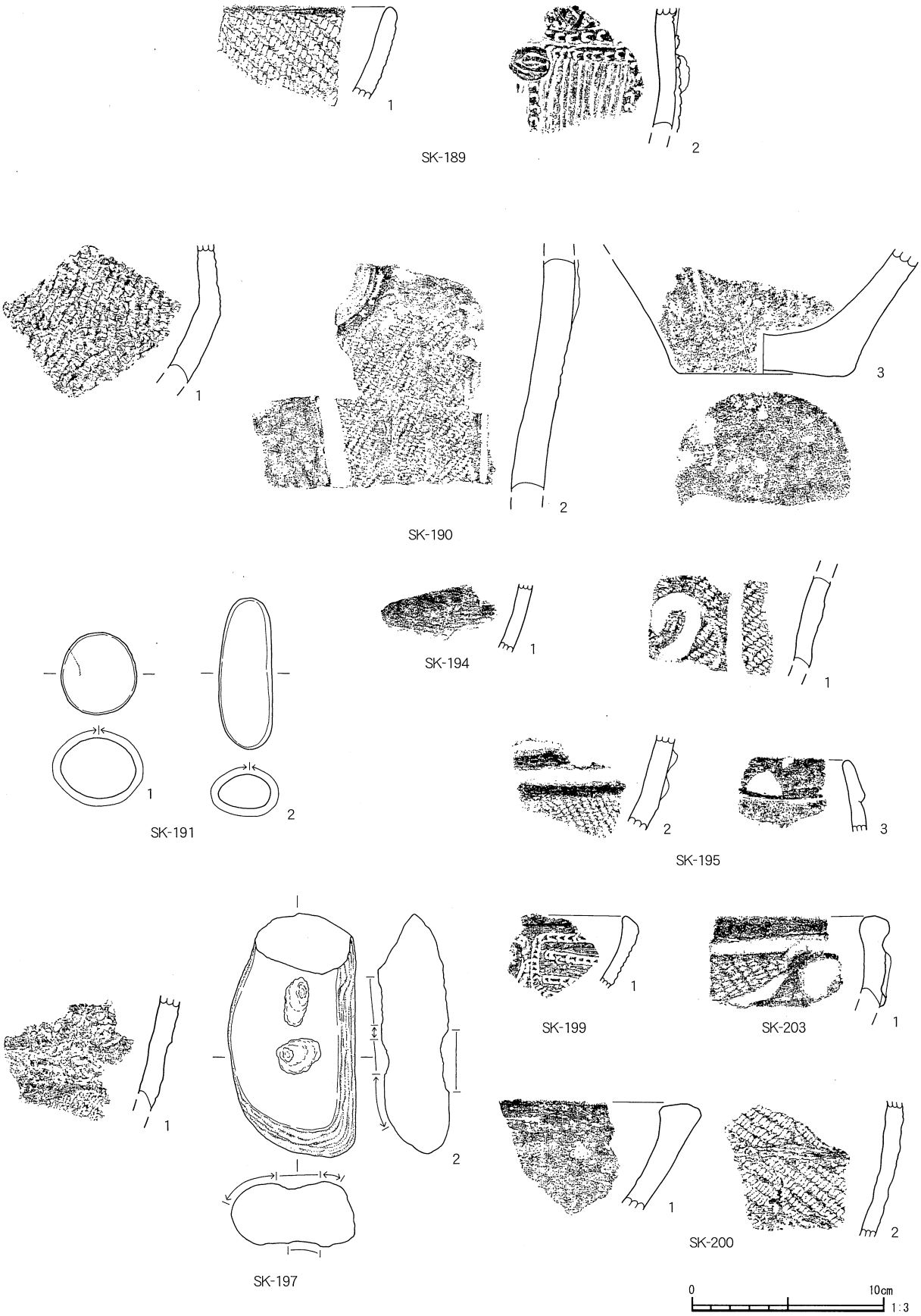

SK-189
SK-190
SK-194
SK-191
SK-195
SK-199
SK-203
SK-197
SK-200
0
10cm
1:3

図 26　SK出土遺物（1）

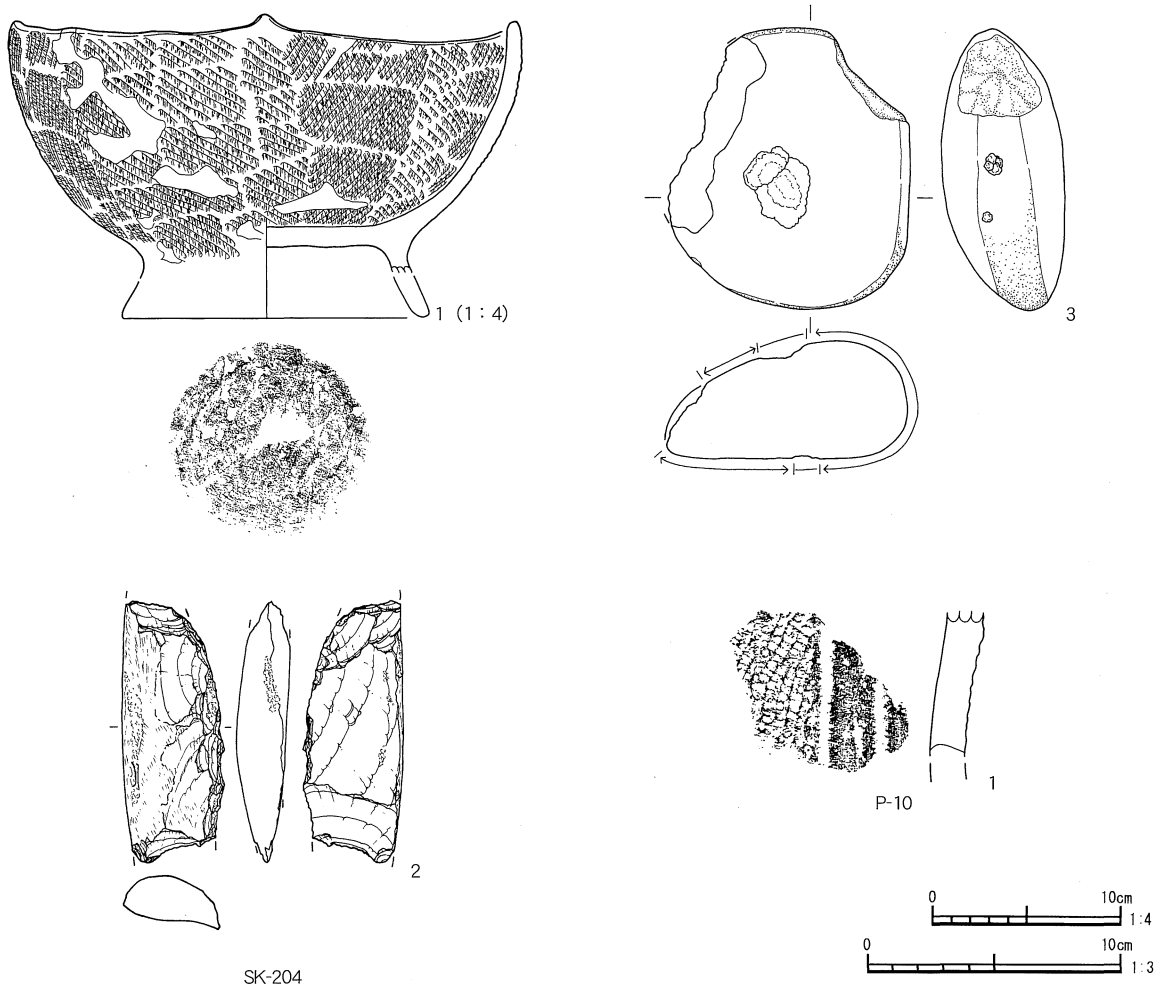


図 27　SK出土遺物（２）

SK－203（図 25・26、表 19/ 写真８・16）

位置：調査区の北東側、SD－02・03 の南側に位置する。

形状：長軸 2.59 m、短軸 1.40 mで、平面形は隅丸長方形を呈する。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は 46 cmを測る。

遺物:縄紋中期後半加曽利ＥⅢ式（１）を主体として、縄紋前期中葉黒浜式が大量に出土している。石器は石核と黒曜石片の２点が出土している。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代中期後半と考えられる。

SK－204（図 25・27、表 20/ 写真８・16）

位置：調査区の南西側で、SI－43 と重複し、本遺構が新しい。

形状：長軸 1.51 m、短軸 1.40 mで、平面形は隅丸長方形を呈する。

構造：壁面は急な傾斜を持ちながら立ち上がる箱状を呈し、残存深度は 46 cmを測る。

遺物：縄紋前期中葉黒浜式の土器が少量出土している。１は伏せた状態で底面から出土した。四単位の小突起を付し、底面に高台が付くと思われる。石器は４点出土し、３が底面から出土している。

所属時期：覆土の状態と出土遺物から縄紋時代前期中葉と考えられる。

表 11　SK－189 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	緩やかな波状口縁。ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①角閃石・片岩 ②黒褐色
2	縄紋土器 深鉢	胴部	頸部と胴部に切先状工具による集合沈線。頸部上半に紐隆帯を斜位に貼付。頸部無紋で頸部と胴部に連続爪形刺突を持つ細隆帯を廻らせる。その上に巻上状の貼付文。　内面磨き。	①片岩 ②にぶい赤褐色

表 12　SK－190 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	胴部	Ｌの無節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石 ②灰褐色
2	縄紋土器 深鉢	胴部	ＬＲの単節縄紋を横位施紋。微隆起帯で渦巻文を構成。渦巻文内は磨消。	①片岩 ②にぶい黄橙色
3	縄紋土器 深鉢	底部	胴部内・外面磨き。底部やや上げ底で、底面磨き。	①片岩 ②明黄褐色

表 13　SK－191 出土遺物観察表

番号	種別／器種	計測値（cm・g）	
1	石器	磨石	研磨具か。全体に摩耗痕。砂岩。 長さ：4.25 cm　幅：3.9 cm　厚さ：3.1 cm　重量：68.29 g
2	石器	磨石	研磨具か。全体に摩耗痕。擦痕は認められない。砂岩。 長さ：7.9 cm　幅：2.8 cm　厚さ：1.75 cm　重量：59.42 g

表 14　SK－194 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	胴部	無紋。横方向のミガキ。内面磨き。	①砂粒 ②暗褐色

表 15　SK－195 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	胴部	地紋にＲＬの単節縄紋を縦位施紋。渦巻文と縦方向の沈線文。内面磨き。	①片岩 ②にぶい橙
2	縄紋土器 深鉢	胴部	隆帯で文様区画。下端にＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①角閃石・長石 ②にぶい橙
3	縄紋土器 深鉢	口縁部	無紋の粗製土器。折返し口縁。全面を磨き。	①片岩 ②にぶい褐色

表 16　SK－197 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	胴部	Ｌの無節縄紋を横位施紋。成形時の輪積み痕跡が残る。内面磨き。	①繊維・角閃石 ②褐色
2	石器	磨石／凹石	片岩。　長さ：12.5 cm　幅：6.6 cm　厚さ：3.7 cm　重量：451.34 g	

表 17　SK－199 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁部内傾。半截竹管状工具による平行沈線内に連続爪形刺突。	①角閃石 ②暗褐色

表 18　SK－200 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	無紋。全面に磨き。	①片岩 ②にぶい赤褐色
2	縄紋土器 深鉢	胴部	ＲＬの単節縄紋を横位施紋。内面磨き。	①繊維・角閃石・片岩 ②にぶい赤褐色

表 19　SK－203 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	隆帯で口縁部文様帯を構成。区画内にＬＲの単節縄紋を横位充填施紋。その後、隆帯を縁取る。	①角閃石・片岩②橙色

表 20　SK－204 出土遺物観察表

番号	種別／器種		部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 台付鉢		ほぼ 完形	口縁部に４単位の小突起を持つ。Ｌ、Ｒの無節縄紋を交互横位施紋し羽状構成をとる。　内面磨き。	①繊維・片岩②赤褐色
2	石器	打製石斧		礫面磨かれる。側面のみ加工。未製品か。緑色岩類。 長さ：10.3 cm　幅：4.0 cm　厚さ：1.9 cm　重量：106.75 g	
3	石器	磨石／敲石		安山岩。　長さ：11.1 cm　幅：9.5 cm　厚さ：4.7 cm　重量：655.50 g	

表 21　Ｐ－10 出土遺物観察表

番号	種別／器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	胴部	ＬＲの単節縄紋を横位施紋後、沈線による縦位区画。区画内は縄紋を磨消。内面磨き。	①角閃石・片岩 ②にぶい褐色

表 22　SK計測表

土坑番号	平面形	規模（m）			備考
		長軸	短軸	残存深度	
SK-189	隅丸長方形	2.48	1.25	0.18	
SK-190	隅丸長方形	2.15	1.42	0.36	
SK-191	楕円形	1.56	[0.76]	0.24	Ｐ２と重複。
SK-192	円形	1.52	1.50	0.22	
SK-193	円形	1.71	1.56	0.37	
SK-194	円形	1.61	1.47	0.42	Ｐ４と重複。
SK-195	円形	1.61	1.60	0.40	Ｐ５と重複。
SK-196	楕円形	1.38	0.96	0.36	
SK-197	楕円形	1.68	0.97	0.22	
SK-198	楕円形か	0.99	0.98	0.24	SI-39 と重複。
SK-199	楕円形か	1.03	0.64	0.44	SI-39 と重複。
SK-200	長方形	1.18	0.86	0.40	
SK-201	隅丸長方形	1.45	0.97	0.10	
SK-202	楕円形	1.30	1.10	0.10	
SK-203	隅丸長方形	2.59	1.40	0.46	
SK-204	楕円形	1.51	1.40	0.46	

表 23　ピット計測表

ピット番号	平面形	規模（m）			備考
		長軸	短軸	残存深度	
Ｐ１	円形	0.42	[0.38]	0.26	
Ｐ２	円形	0.30	0.30	0.30	SK-191 と重複。
Ｐ３	楕円形	[0.47]	[0.47]	0.03	
Ｐ４	円形か	0.69	[0.44]	0.30	SK-194 と重複。
Ｐ５	円形か	0.42	0.25	0.23	SK-195 と重複。
Ｐ６	楕円形	0.40	0.40	0.22	
Ｐ７	隅丸方形	0.71	1.60	0.10	開口部
	円形	0.34	0.30	0.90	
Ｐ８	円形	0.63	0.55	0.10	Ｐ９と重複。
Ｐ９	円形	0.59	0.48	0.07	Ｐ８と重複。
Ｐ10	円形	0.63	0.57	0.10	

４　遺構外出土遺物（図 28・29、表 24/ 写真図版 17）

本地点では遺構内はもとより、遺構外からも多くの遺物が出土している。縄紋土器が主体で、特に中期後半加曽利Ｅ式期（６～10）が多い傾向にある。これは、丘陵上部に当概期の集落が存在し、本地点が緩斜面地であることから、上部からの流れ込みであると考えられる。また、早期後半の撚糸紋系土器（１・２）はＢ地点に続いて出土しているが、５の勝坂式土器は他地点ではこれまで検出されていない土器群である。石器では、石鏃（12）や打製石斧（14･15）といったものが少なく、磨石・敲石（16～18）が多い傾向にある。

縄紋時代以降の遺物としてはＡ・Ｂ地点で検出されている弥生土器や平安期の遺物は検出されなかったが、本地点では 11 のような陶器類が少量であるが出土しており、検出した遺構とともに中世以降における土地利用が推定される。

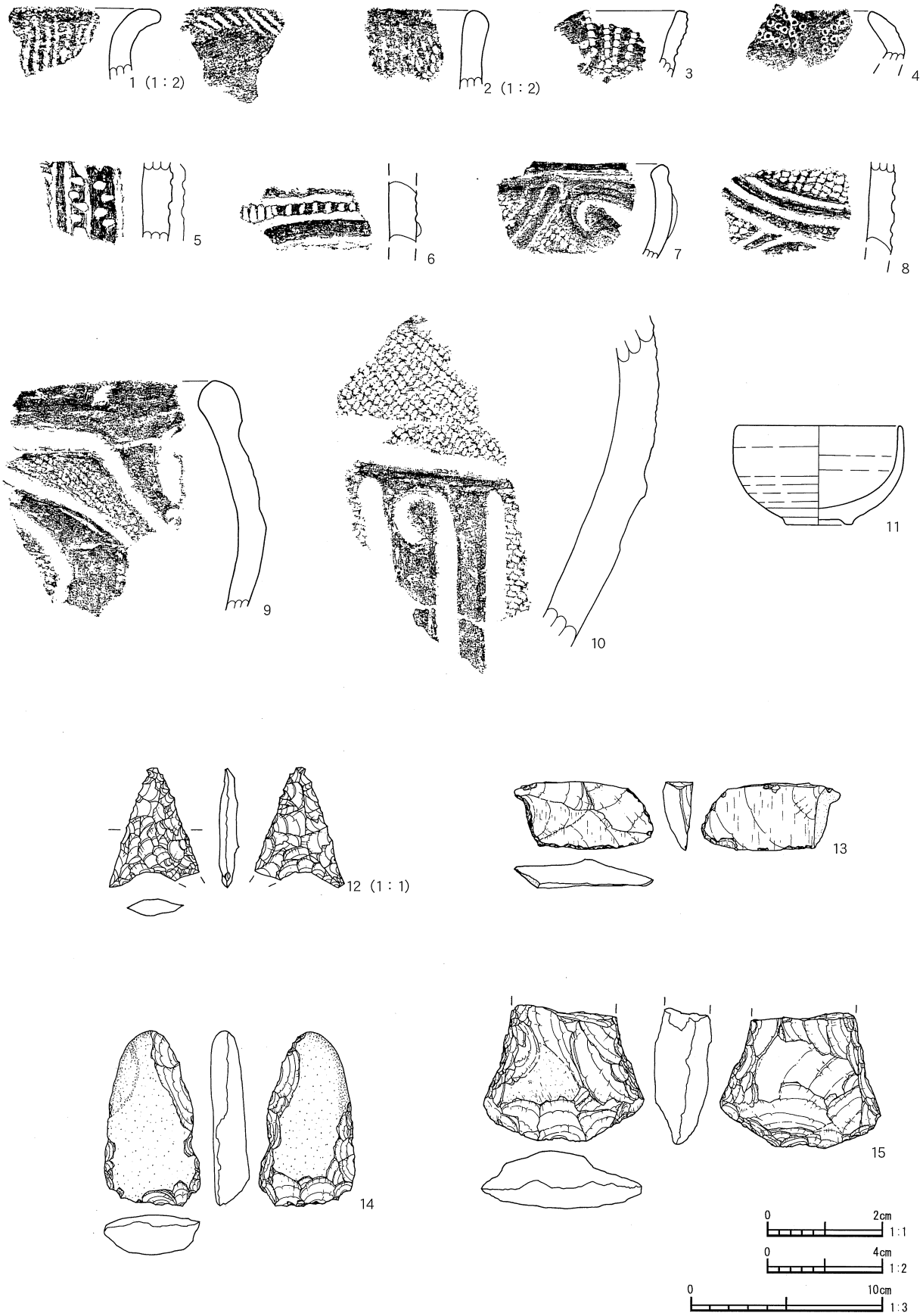


図 28　遺構外出土遺物（1）

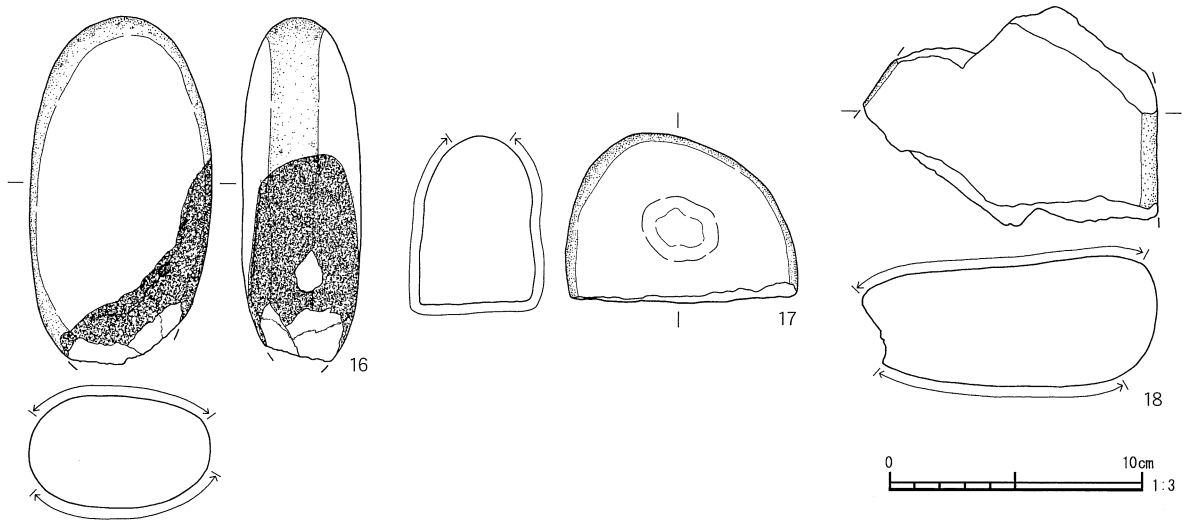


図 29　遺構外出土遺物（２）

表 24　遺構外出土遺物観察表

番号	種別 / 器種	部位	文様・器面調整・計測値（cm・g）	①胎土②色調
1	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁部から胴部にＲＬの単節撚糸紋を横位施紋。口唇部にＲＬの単節撚糸紋を側面押圧。内面磨き。	①片岩・砂粒 ②にぶい黄橙
2	縄紋土器 深鉢	口縁部	ＬＲの撚糸紋を横位施紋。内面磨き。	①片岩 ②にぶい赤褐色
3	縄紋土器 深鉢	口縁部	丸棒状工具先端による縦位の列点。内面磨き。	①繊維・片岩 ②灰黄褐色
4	縄紋土器 深鉢	口縁部	口縁内彎。竹管状工具による横位の連続刺突。内面磨き。	①片岩 ②灰黄褐色
5	縄紋土器 深鉢	胴部	隆帯を縦位に貼付。隆帯区画内に沈線文を施す。その後、隆帯と器面に丸棒状工具による交互刺突。	①角閃石・片岩 ②にぶい赤橙色
6	縄紋土器 深鉢	胴部	隆帯による文様区画。隆帯側縁を沈線で縁取る。沈線区画内を丸棒状工具で連続刻み。内面磨き。	①角閃石・片岩・砂粒 ②明赤褐色
7	縄紋土器 深鉢	口縁部	隆帯による文様区画。ＲＬの単節縄紋を充填施紋。内面磨き。	①角閃石・片岩 ②褐色
8	縄紋土器 深鉢	胴部	２条ないし３条の平行沈線による文様施文。文様区画内にＬＲの単節縄紋を充填施紋。内面磨き。	①角閃石・片岩 ②明黄褐色
9	縄紋土器 深鉢	口縁部	隆帯による文様区画。ＲＬの単節縄紋を充填施紋。のち、隆帯側縁を沈線で縁取る。内面磨き。	①角閃石・片岩・砂粒 ②明黄褐色
10	縄紋土器 深鉢	胴部	沈線による文様区画。沈線間に蕨手状沈線文を施文。沈線文様以外の部分にＲＬの単節縄紋を充填施紋。	①片岩 ②明黄褐色
11	陶器 碗	口縁部 ～底部 １/２	ロクロ成形。胎土は灰白色(2.5Y8/2)。内面と外面に鉄釉(黒:5Y2/1)。腰錆埦。　口径：8.4 cm　底部：3.6 cm	①白色粒 ②灰白色
12	石器	石鏃	黒曜石。　長さ：2.1 cm　幅：1.6 cm　厚さ：0.3 cm　重量：0.76 g	
13	石器	スクレイパー	全体的に摩耗。頁岩。　長さ：3.5 cm　幅：7.3 cm　厚さ：1.5 cm　重量：37.45 g	
14	石器	打製石斧	礫面残る。頁岩。　長さ：9.0 cm　幅：5.1 cm　厚さ：1.9 cm　重量：108.97 g	
15	石器	打製石斧	刃部のみ検出。緑色岩類。 長さ：[7.0] cm　幅：8.4 cm　厚さ：2.8 cm　重量：196.50 g	
16	石器	磨石	側縁除き摩耗痕が顕著。被熱痕あり。 長さ：[14.8 cm]　幅：4.7 cm　厚さ：4.5 cm　重量：700.26 g	
17	石器	磨石	長さ：9.3 cm　幅：6.7 cm　厚さ：4.6 cm　重量：436.10 g	
18	石器	磨石	表裏面に平滑な摩耗痕。欠損品。安山岩。 長さ：8.7 cm　幅：11.7 cm　厚さ：5.5 cm　重量：623.42 g	

V　まとめ

本調査での成果を簡単にまとめてみたい。

1．縄紋前期中葉から後半期の竪穴住居跡について

本地点では、前期中葉期から後半期の竪穴住居跡が検出され、丘陵平坦地に広がる集落域の東端を確認するに至った。ここでは、本地点検出の竪穴住居跡と出土土器について若干述べてみたい。

本地点では総計4軒の竪穴住居跡を検出した。各竪穴住居跡の時期はその住居形態や出土土器から、SI－40は縄紋前期中葉（黒浜式･有尾式）から後半（諸磯ａ式）期、SI－41は前期後半（諸磯ａ式）期、SI－42は前期後半（諸磯ｃ式）期、SI－43は前期中葉（黒浜式）期にそれぞれ比定される。SI－41は埋設土器から２期の重複が考えられるが、新旧関係は不明瞭であった。ただ、ともに前期後半期に相当する土器を内包しており、大きな時間差はない。SI－43はＢ地点第9・12号住居跡と同様の土器を検出しているが、床面直上より石棒が検出したことは特筆すべき点である。

これまでの他地点の調査結果をふまえて、出土土器の観点から大まかに本遺跡の集落変遷を観ると、Ｂ地点第13号住居跡を最古段階として、Ｂ地点第16・17号住居跡・SI－40 Ⅰ期が続く。Ｂ地点第20・25号住居跡・SI－43、SI－40 Ⅱ・Ⅲ期、Ａ区住居跡、SI－41、Ｂ地点第9・12号住居跡・SI－42と続き、一時空白期があって中期後半期へと移行する過程が窺える。また、本遺跡の集落域は縄紋前期では丘陵平坦地の開けた位置を選ぶ一方、中期では丘陵頂部の比較的狭い範囲を選定しており、占地傾向がはっきりと捉えられる。

さて、SI－40は壁周溝と床面出土土器の様相から３期に分別される重複住居跡である事が調査から判明している。Ⅰ・Ⅱ期は一部の壁周溝のみ相違しているため、Ⅰ期→Ⅱ期への拡張が想定される。Ⅲ期は主軸が異なる事、床面出土土器がⅠ・Ⅱ期が包括する土器群と比べやや時間差を持つことから、Ⅰ・Ⅱ期とⅢ期では若干の隔たりのある重複関係を示していると考えられる。

次に各期の床面出土土器を見てみる。Ⅰ期床面直上からは大波状口縁で口縁部に櫛歯状工具による条線文と列点状刺突文が廻る土器（図10－15）が検出された。また、覆土中において列点状刺突を施す土器や口縁部に縦位の単沈線を施す土器（図10－16・17・22）が見られる。15は口縁部と頸部に櫛歯状工具による条線文を描出し、頸部上部にも同一工具による波状文を施している。口縁部は同工具による条線文を巡らせたのち、縦位の刺突を施紋している。胴部上半には図11－16～30のように列点状刺突や平行沈線と爪形文による菱形文といった紋様は描出されていない。ただし、胴部上半では羽状縄紋である地紋が菱形状を呈している。口縁部直下まで縄紋による羽状構成をとる施紋方法は共伴する黒浜式に特徴的である（図11-41～50など）。15はその影響も考えられ、施紋具の相違はあるが菱形文と同様の紋様表出効果をもたらしているといえる。

ここで、Ｂ地点第16・17号住居跡出土土器との関係性を観たい。ともに口縁部を櫛歯状工具による列点状刺突を施す土器群を内包する住居跡であるが、口縁部横位条線文の有無と菱形文が一方は列点状刺突、一方は羽状構成の地紋で表出するという相違が認められる。同一工具の施紋方法の相違を考慮した場合、15がやや新しい様相を呈すると考える。また、Ｂ地点（松澤2005）では櫛歯状工具から爪形文へとする工具の変化から、第16･17号住居跡→第20･25号住居跡としていることと合わせ、第16・17号住居跡→SI－40 Ⅰ期→第20・25号住居跡と位置づけることができる。

一方、Ⅲ期では無繊維で波頂部に円形竹管文を施す土器（図９－１）を埋設土器としている。また、爪形刺突による米字文を施す土器（図９－４・６）が覆土中で見られた。円形竹管文は前期中葉から見られるが、胎土と紋様描出の観点から１は後半（諸磯ａ式）期の古相を呈しており、４・６は中葉（黒浜式）期でも新段階に相当すると思われる。そのため、Ⅰ期とⅢ期では出土土器において明確に時期差が認められるとともに、Ⅲ期は前期中葉期から後半期に位置づけることができる。

２．SI－42 出土の石棒について

石棒の出現は近年の調査による類例の増加に伴い、縄紋前期まで遡ることが確実となるとともに、その様相が次第に明らかになりつつある。

SI－42 出土の石棒（図 30 － 1）は、壁際床面５㎝直上で検出された。灰白色凝灰岩を用いており、円筒状で中央部がやや膨らむ。一端に２条の浅い刻線を施して頭部とし、一方を幅広く削り込むことで、突帯を造り出している。頭部上端はなだらかな凸面を呈し、体部はよく研磨されている。

この形態的特徴をもつ石棒は、本庄市では初めての出土であるとともに、埼玉県下においてはその類例を見ない。隣県である群馬県においてはいくつかの類例が知られており、集成が行われている（能登 1985、松田 2004）。図 30 に前期後半期の類例を３例挙げておいた。これらは石材（凝灰岩）や頭部表出方法など類似点が多く、２においては体部に穿孔を施す点を除き、竪穴住居跡壁際床面５㎝直上という出土状況も近似している。こうした石棒は諸磯ｂ～ｃ式期の遺構や土器群に共伴して検出しており、当該期に位置付けられている。よって、SI－42 出土の石棒は、形態的特徴や出土状況、共伴関係から前期後半期に特徴的なものといえる。

前期石棒の類例は少なく、地域も限定されて検出されている（松田 2004）。そのため、本例を前期石棒の一資料とし、類例の増加による詳細な分析を行い、その様相を明らかにすることが今後の課題であるといえる。

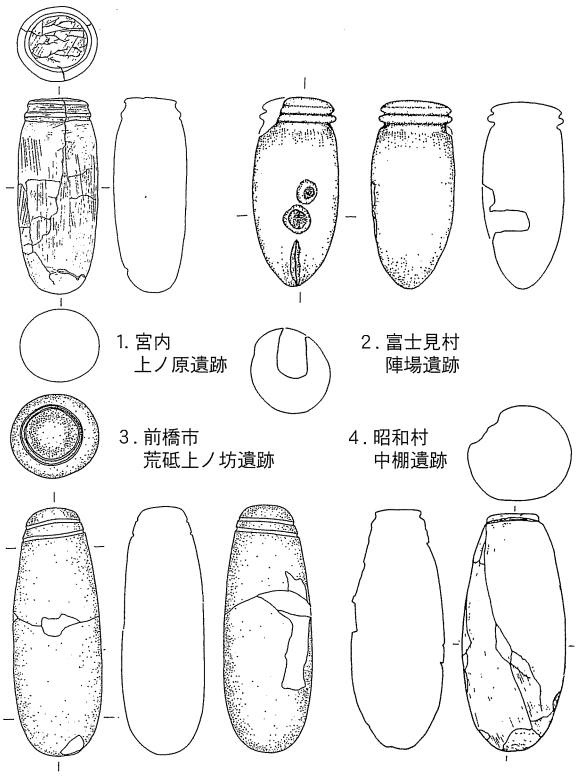


図 30　SI－42 出土石棒の類例（すべてＳ =1/4）

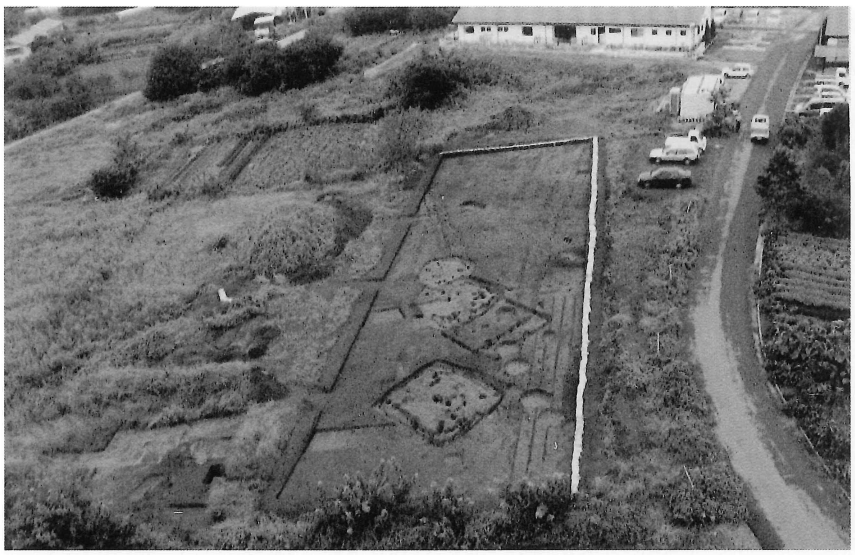
本遺跡は丘陵部における縄紋前期と中期の集落の様相をよく表している遺跡であるが、未だ「点」での結果を繋ぎ合わせているにすぎず、その全体像は測りえない。従って、今後も地道に調査を積み重ねていき、本遺跡における集落の様相を次第に明らかにすることを課題としつつ、結語としたい。

【主要参考文献】
金子直行（1989）「縄文前期中葉における大型菱形文形土器群の成立と展開―有尾式土器をめぐって―」『埼玉考古』第 25 号
小島敦子・能登健（1995）『荒砥上ノ坊遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
埼玉考古学会（1990）「シンポジウム　大木、有尾、そして黒浜―縄文前期中葉土器群にみる系統と交流の実態―」 埼玉考古別冊3　埼玉考古学会
関根愼二・谷藤保彦『糸井宮前遺跡Ⅱ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
鈴木徳雄・尾内俊彦（2006）『宮内上ノ原遺跡Ⅱ－Ｃ・Ｄ地点の調査－』本庄市遺跡調査報告書　第 20 集
谷藤保彦（1997）「北関東の様相」『第 10 回　縄文セミナー　前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
富沢敏弘（1985）『中棚遺跡・長井坂城跡』昭和村教育委員会
松澤浩一（2005）『宮内上ノ原遺跡－B地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第 18 集
松田光太郎（2004）「縄文時代前期の小形石棒に関する一考察」『古代』第 116 号

写 真 图 版

宮内上ノ原遺跡の位置と周辺の地形（国土地理院、2000年10月撮影）

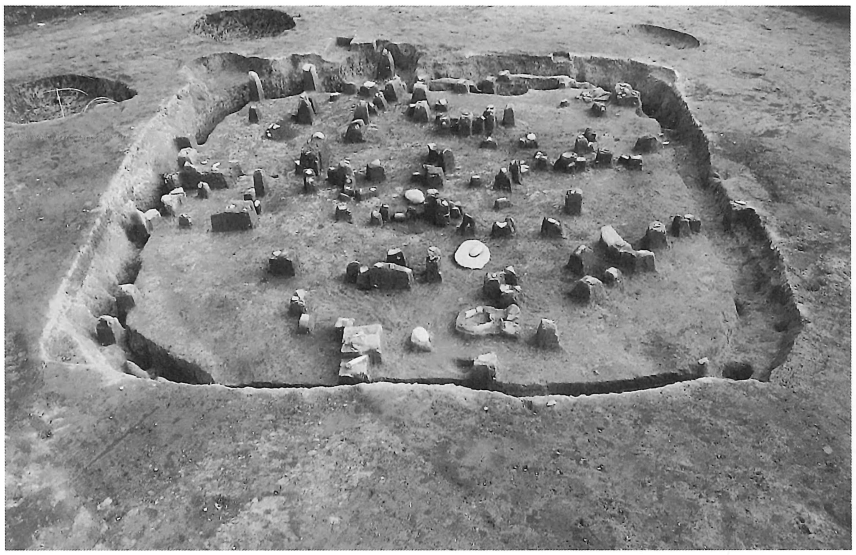
写 真 図 版 2



宮内上ノ原遺跡Ｅ地点全景
（南西より）

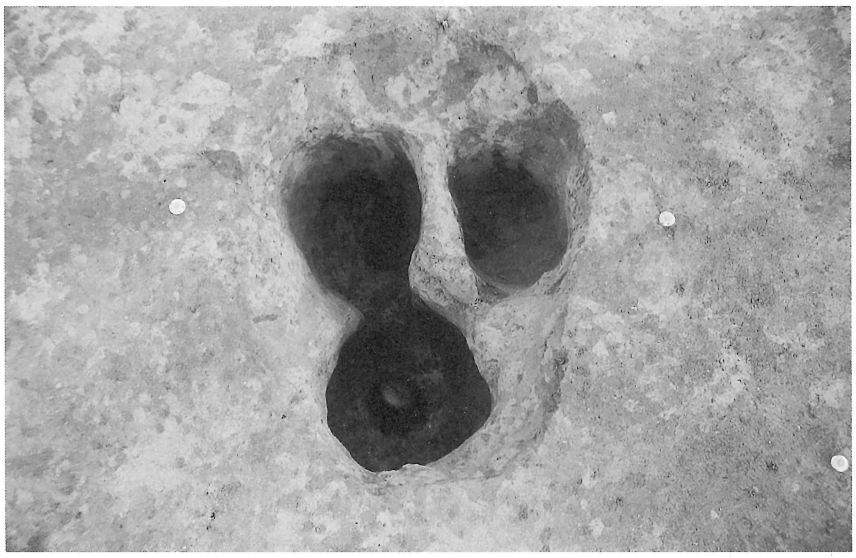
北側調査区全景（北より）

南側調査区全景（南西より）



SI-40遺物出土状況
（北より）

SI-40全景（北より）



SI-40
P-14全景（北より）

写 真 図 版 4

SI-40
1号埋設土器全景（北より）

SI-40
磨石・石皿出土状況（東より）

SI-40遺物出土状況
（北東より）

SI-41・42・43全景（北より）

SI-41・43全景（北より）

SI-41
1号埋設土器出土状況（北東より）

写 真 図 版 6

SI-41
2号埋設土器出土状況（北より）

SI-42全景（北より）

SI-42石棒出土状況（北より）

単独埋設土器全景（北より）

SK-190全景（北より）

（奥から）SK-192～195
（北東より）

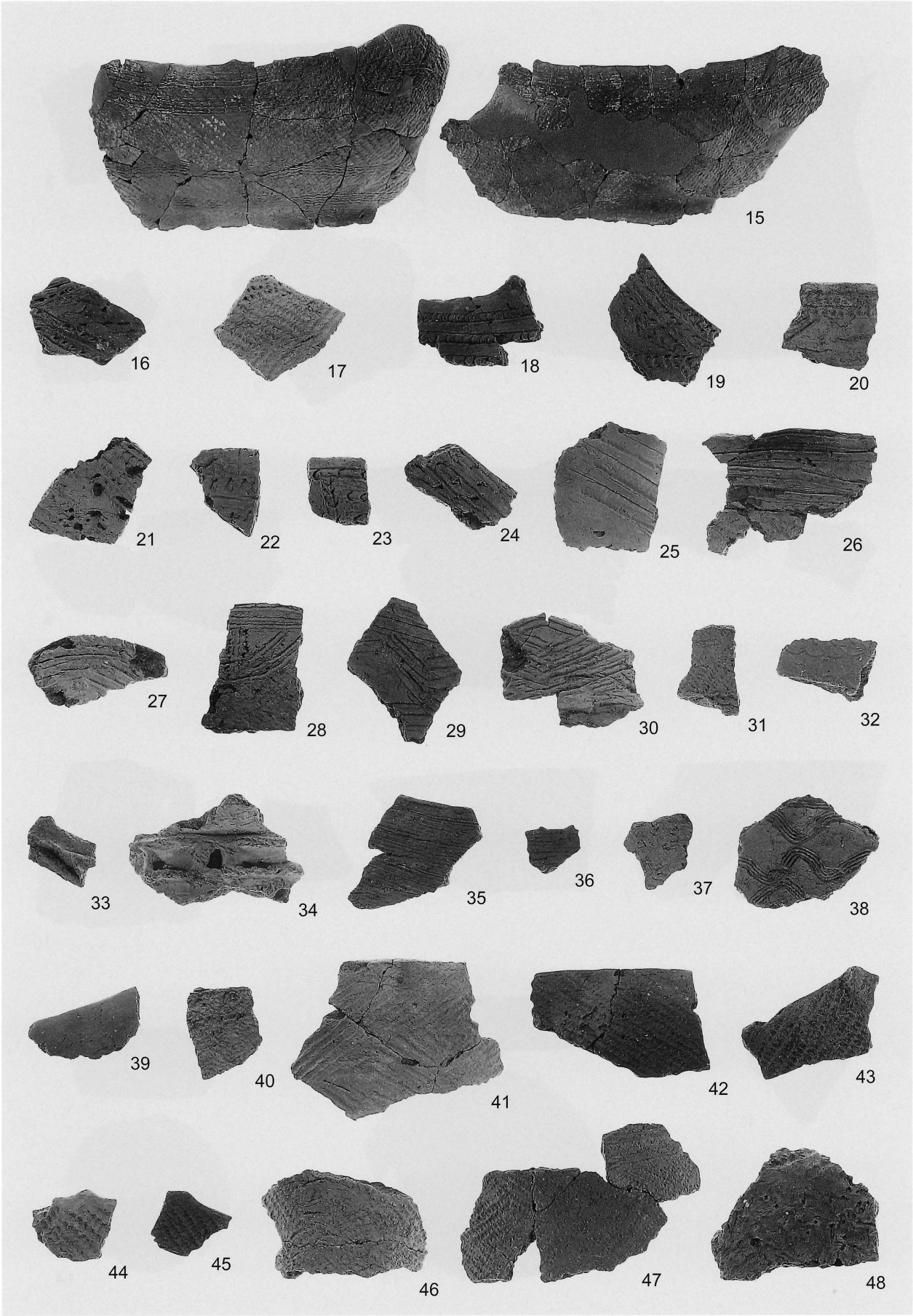
写真図版8

SK-202（北より）

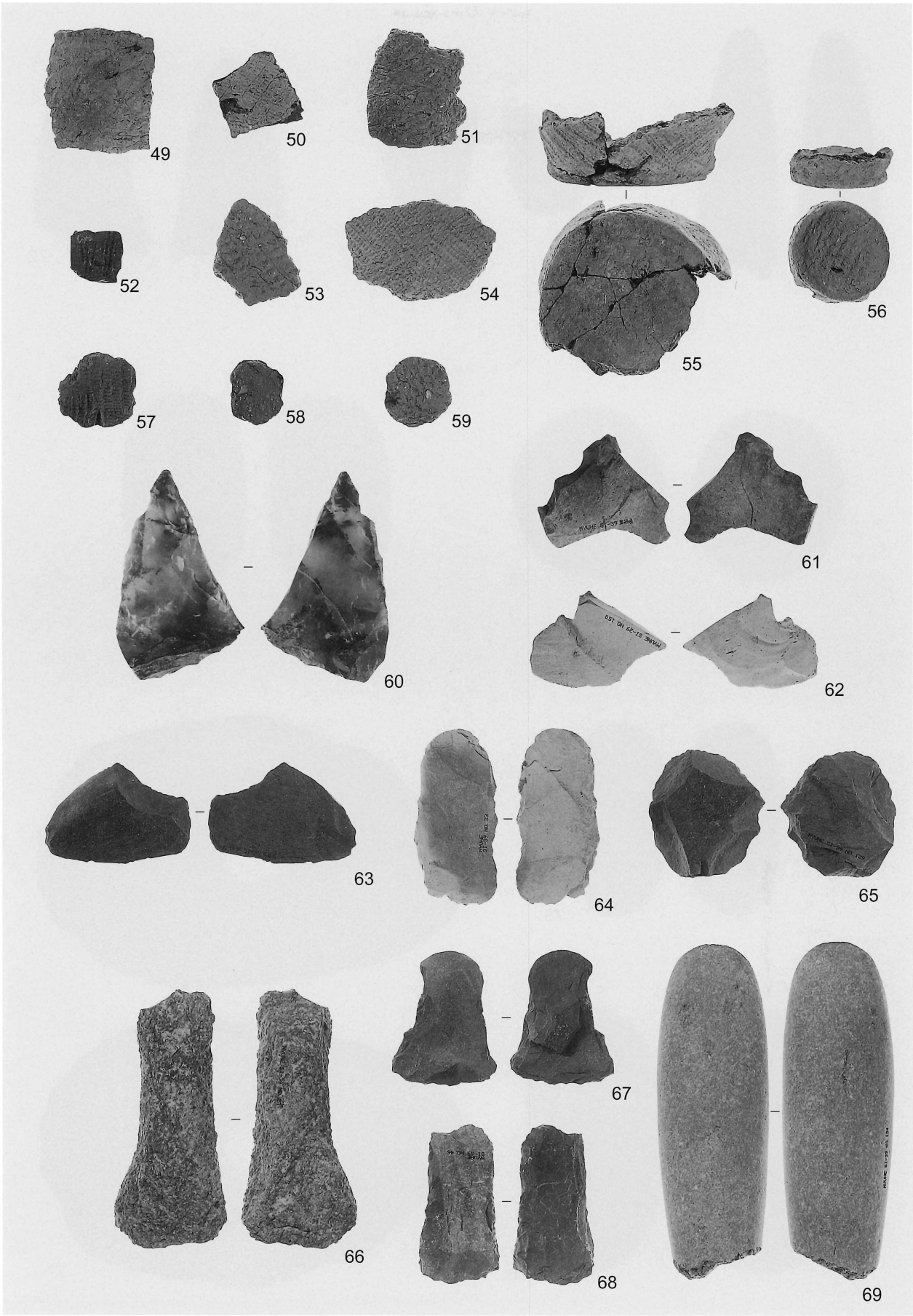
SK-203（南より）

SK-204（南より）

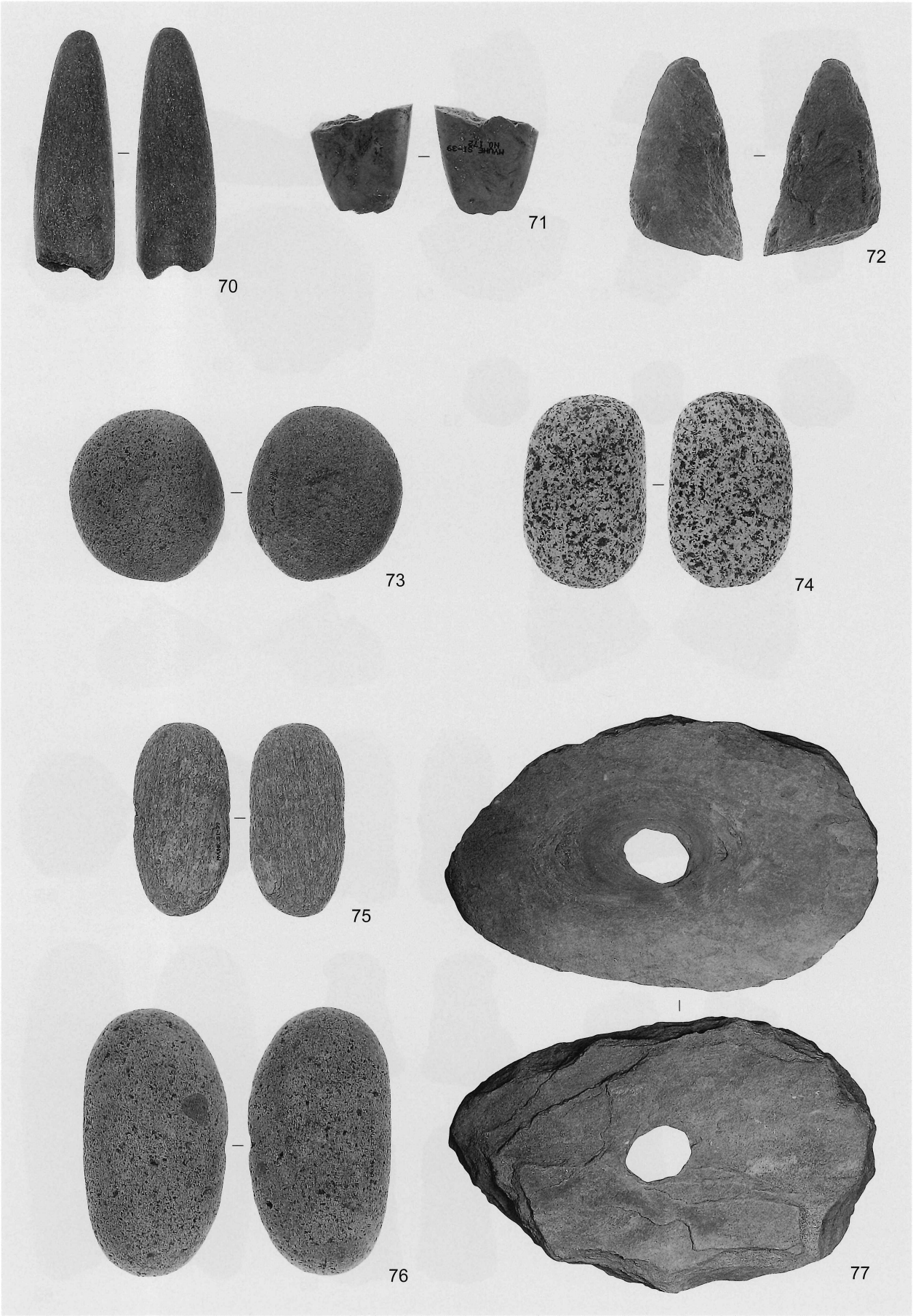
SI-40出土遺物（1）


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

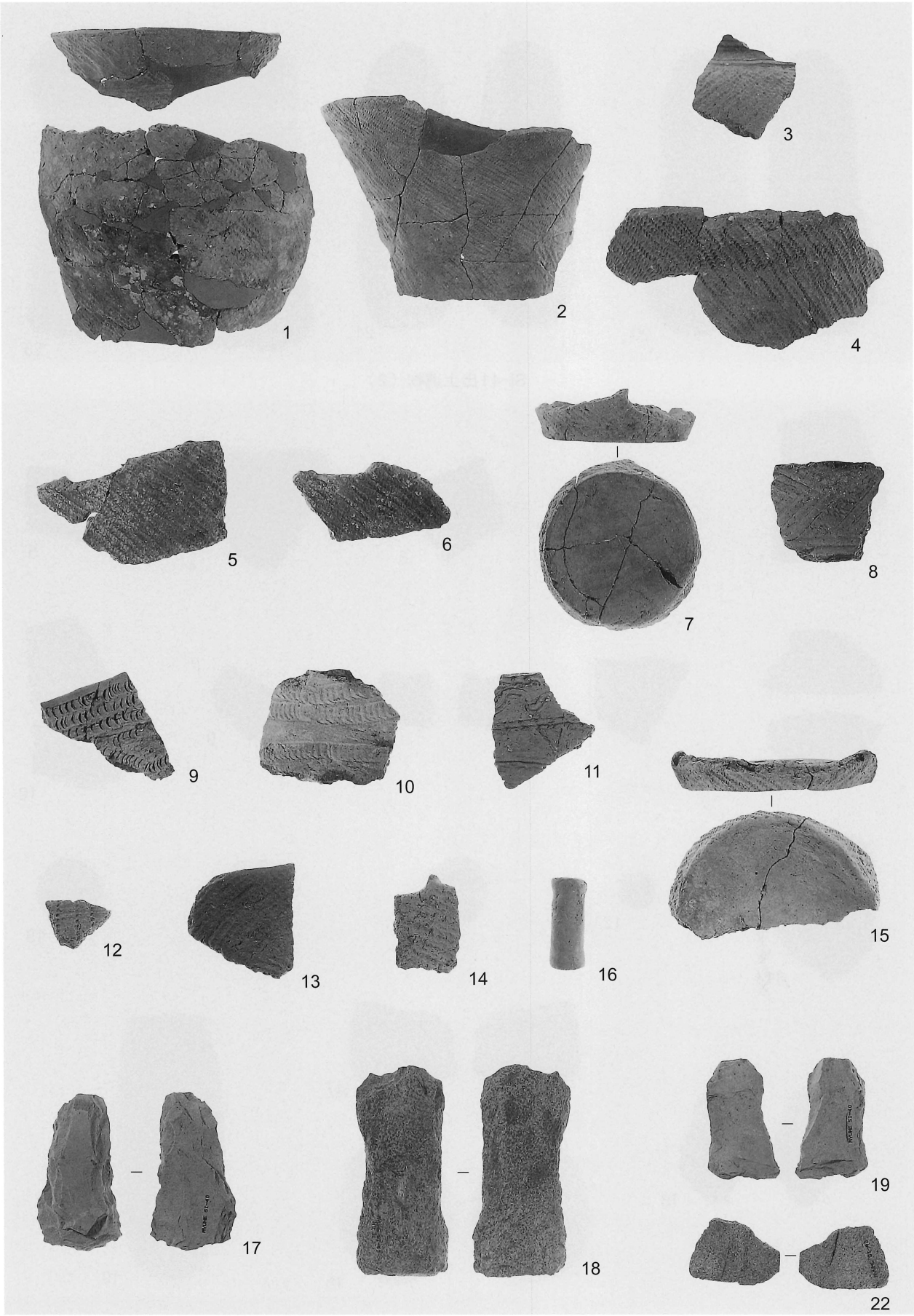
SI-40出土遺物（2）



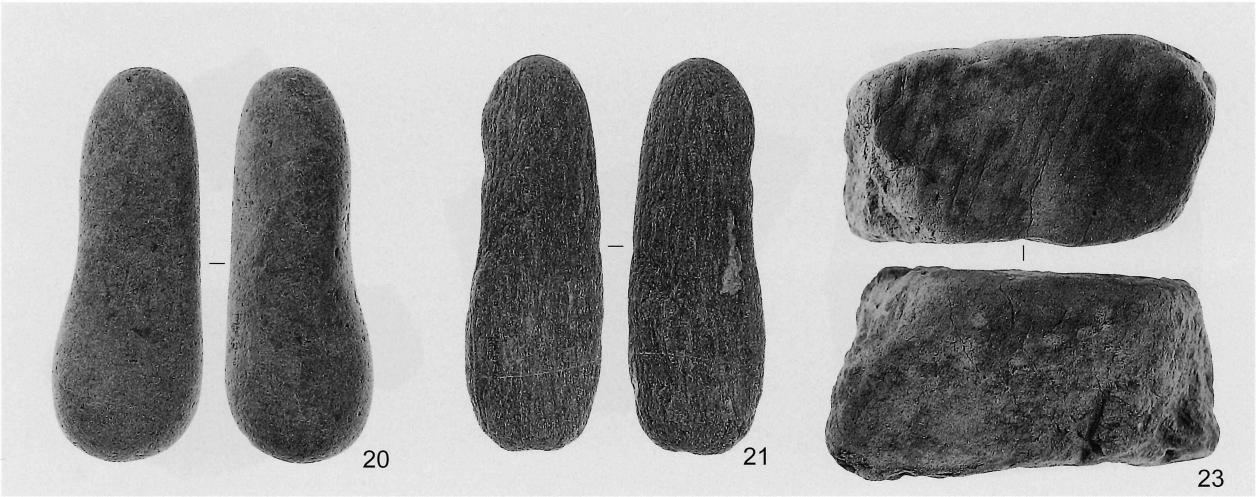
SI-40出土遺物（3）



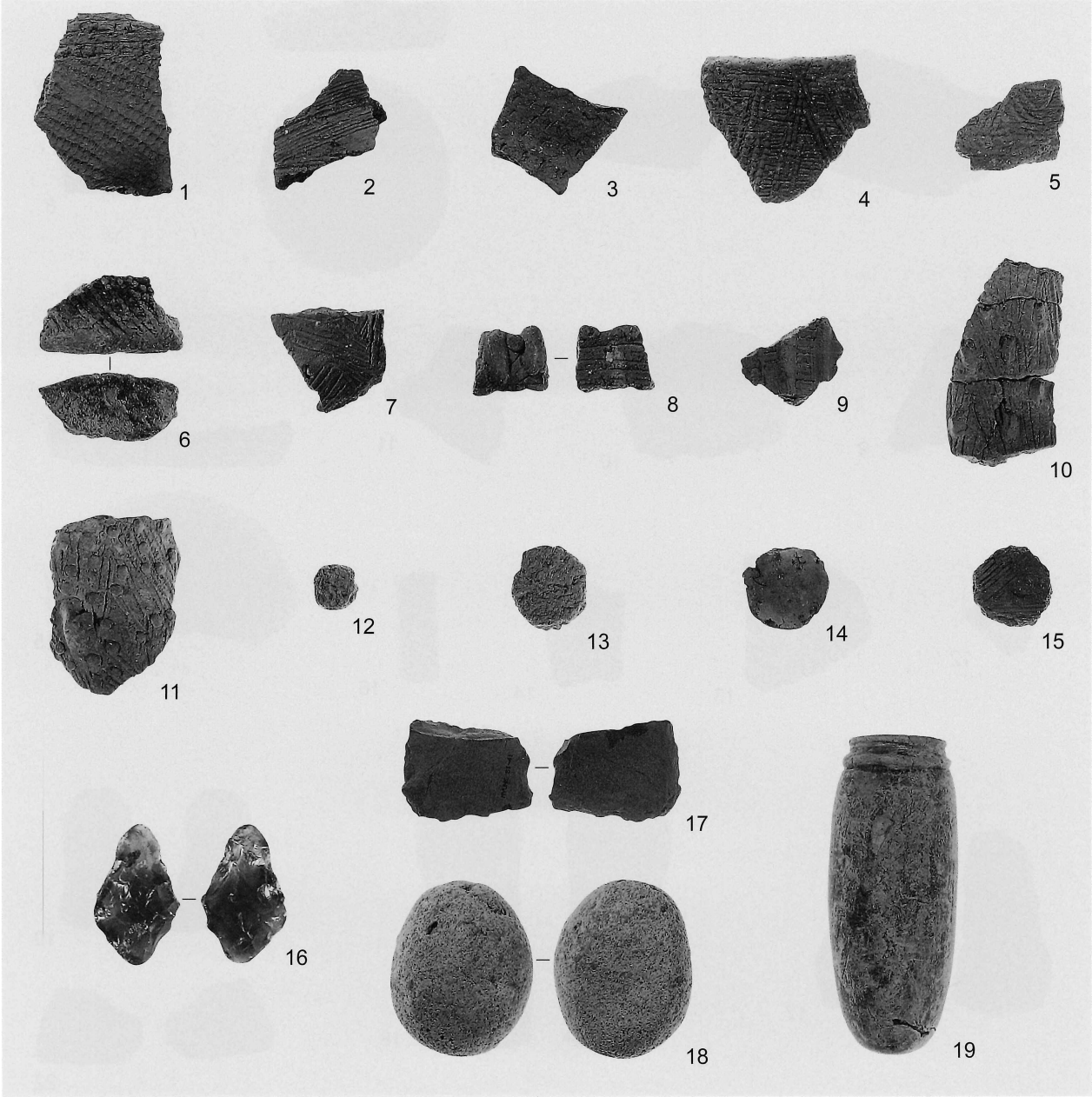
SI-40出土遺物（4）



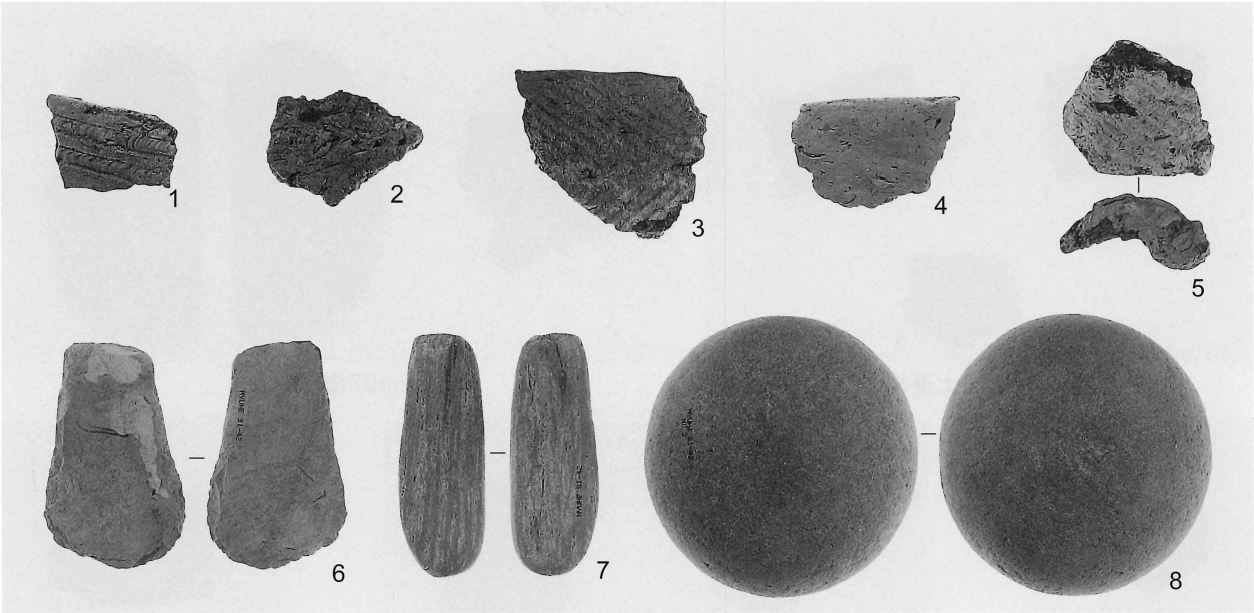
SI-41出土遺物（1）



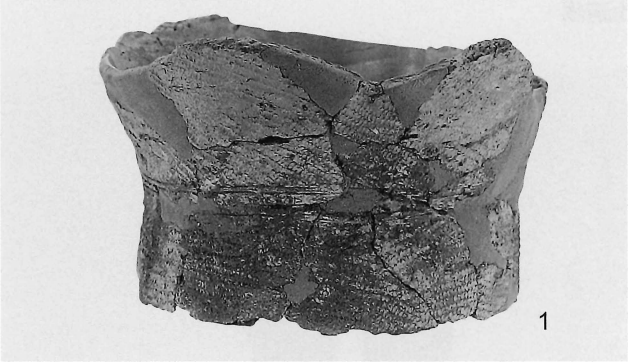
SI-41出土遺物（2）



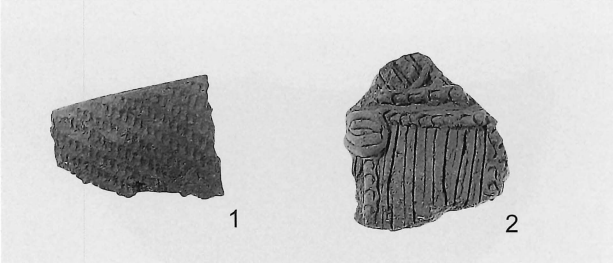
SI-42出土遺物



SI-43出土遺物

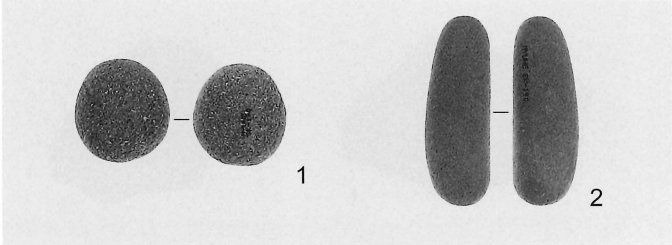


単独埋設土器

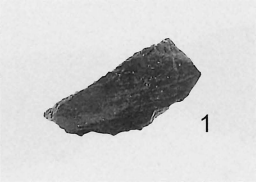


SK-189出土遺物

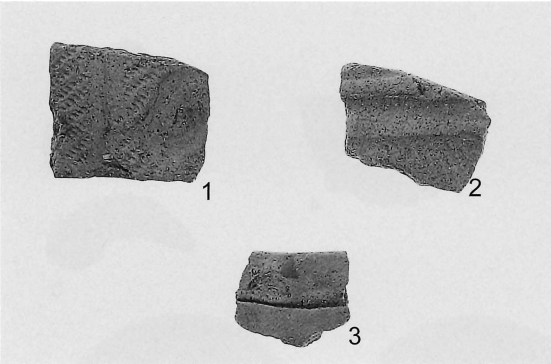
SK-190出土遺物



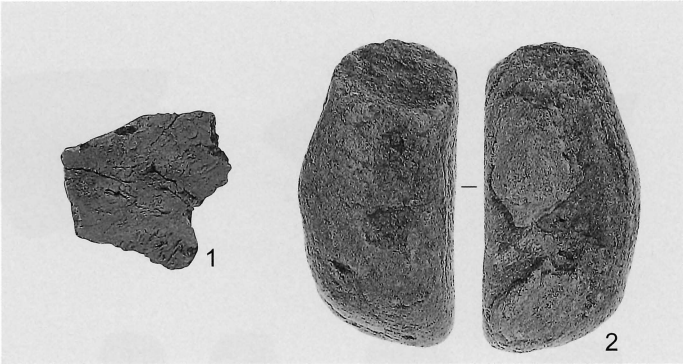
SK-191出土遺物



SK-194出土遺物

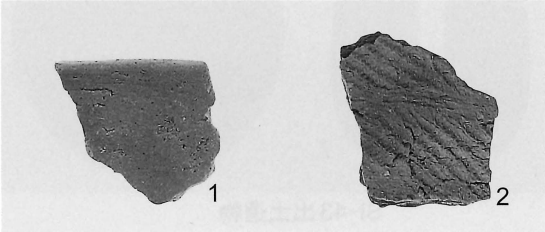


SK-195出土遺物

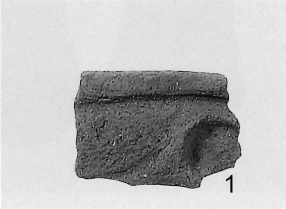


SK-197出土遺物

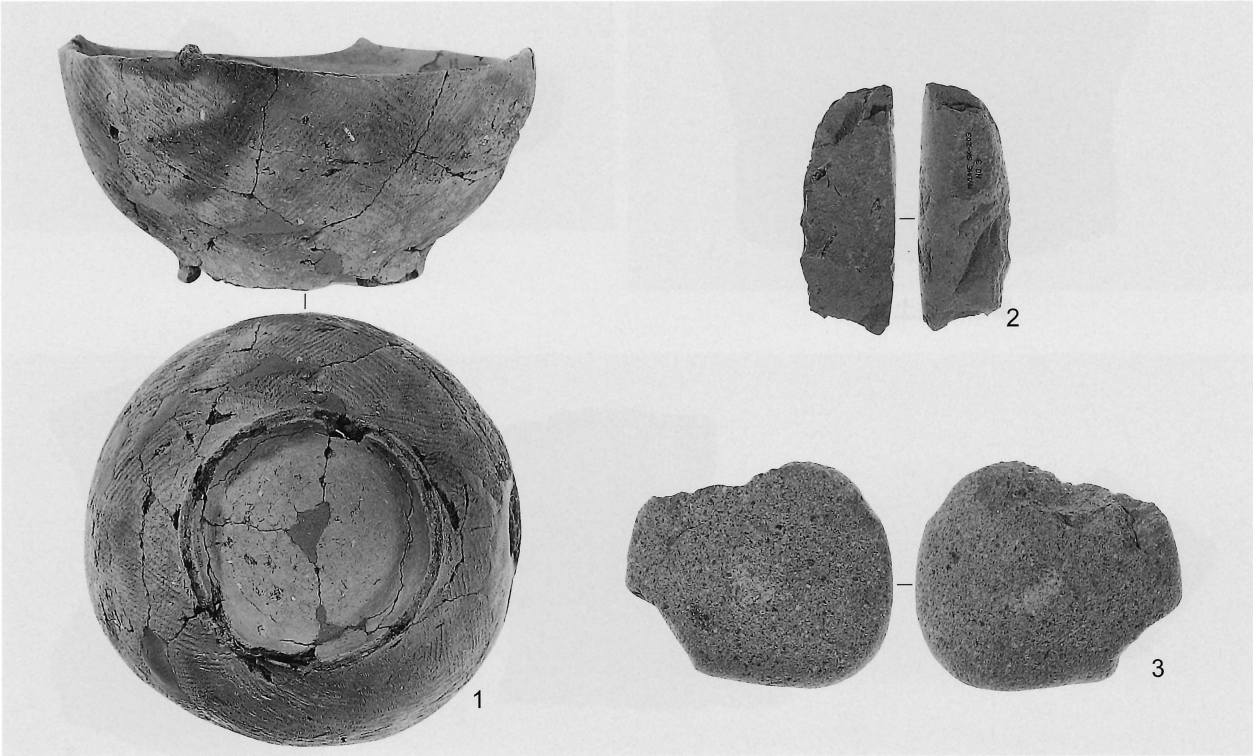
SK-199出土遺物



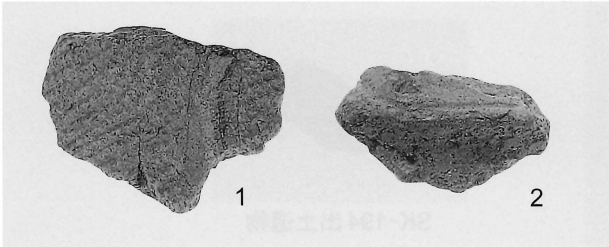
SK-200出土遺物



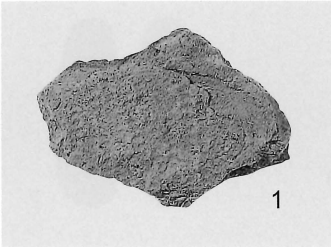
SK-203出土遺物



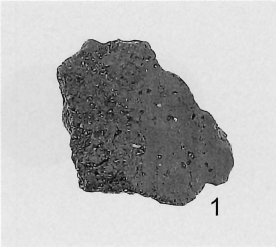
SK-204出土遺物



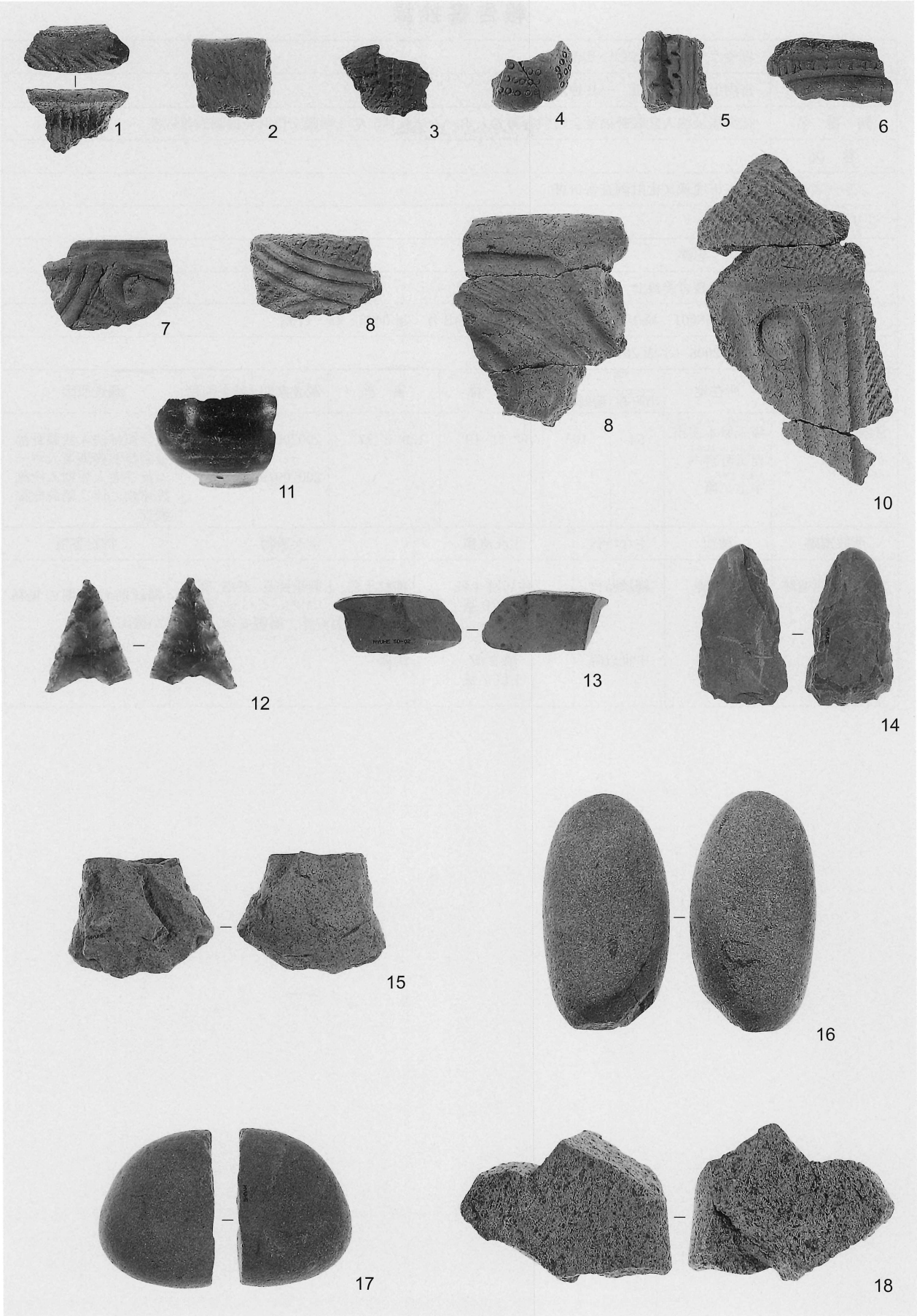
SD-02出土遺物



SD-03出土遺物



P-10出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みやうちうえのはらいせき
書　　名	宮内上ノ原遺跡Ⅲ　―Ｅ地点の調査―
副　書　名	社会福祉法人武蔵野福祉会特別養護老人ホーム建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	宮田　忠洋
編集機関	本庄市教育委員会
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号　℡ 0495 - 25 - 1185
発行年月日	西暦2008（平成20）年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮内上ノ原遺跡（みやうちうえのはらいせき）	埼玉県本庄市（さいたまけんほんじょうし）児玉町宮内（こだままちみやうち）字上ノ原（あざうえのはら）	54	105	36° 11′ 19″	139° 5′ 37″	20070621 ～ 20070919	723.7 ㎡	社会福祉法人武蔵野福祉会特別養護老人ホーム及び老人短期入所施設建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮内上ノ原遺跡 Ｅ地点	集落跡	縄紋時代 中世以降	住居跡４軒 土坑９基 溝２条 土坑７基	縄紋土器、土製垂飾具、石鏃、磨石、敲石、石皿、スクレイパー、砥石、剥片、打製石斧、磨製石斧、石棒 陶器	縄紋時代前期の集落が検出された。

本庄市埋蔵文化財調査報告書　第10集

宮内上ノ原遺跡Ⅲ

—Ｅ地点の調査—

社会福祉法人武蔵野福祉会
特別養護老人ホーム建設等に伴う
埋蔵文化財調査報告書

平成20年3月18日　印刷

平成20年3月31日　発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号

電話　0495 - 25 - 1185

印刷／朝日印刷工業株式会社